

CAMINOS-4 (*michi* : 道)  
(*Ensayos sobre la cultura de la peregrinación*)

Aiko Arai\*  
Bernardo Villasanz\*\*

ÍNDICE GENERAL

1. 「中米およびカリブ海諸島への巡礼の道 (その一)」  
CAMINO DE PEREGRINACIÓN AL CARIBE Y AMÉRICA CENTRAL.  
Por Aiko Arai : (新井 藍子).
2. EN EL CAMINO DE LA VERDADERA IDENTIDAD CRISTIANA. (I)  
(Ensayo sobre creencias y valores cristianos)  
Por Bernardo Villasanz.

---

\* *Aiko Arai*. Ex profesora de la Universidad de Fukuoka (Japón).

\*\* *Bernardo Villasanz*. Catedrático Emérito (名誉教授) de la Facultad de Humanidades. Universidad de Fukuoka (Japón).

## 1. 「中米およびカリブ海諸島への巡礼の道（その一）」

### CAMINO DE PEREGRINACIÓN AL CARIBE Y AMÉRICA CENTRAL.

(Título en el original japonés: *Chūbei oyobi karibukai shotō e no junrei no michi*)

Por Aiko Arai : (新井 藍子).

## 「中米およびカリブ海諸島への巡礼の道」

### プロローグスペインにおける 1492 年の意味および セルバンテスの新大陸

カリブ海は、碧かった。想像していたとおりのターコイズブルーだった。ため息がでるほど美しかった。

1 月末から（2019 年）、3 週間かけて北太平洋、およびパナマ運河を経てカリブ海、北大西洋を大型クルーズ船で巡った。15 世紀末から始まったスペイン大航海時代を体験し、スペイン人征服者の足跡をたどり、当時の被征服者の子孫である現地の人々と対話をするためである。

1492 年は、スペインにとって、スペインの歴史を変える契機となる重要な年である。1 月、スペインにおけるイスラム教徒の最後の牙城であるグラナダ王国が陥落した。イベリア半島に 711 年から 8 世紀の間、君臨していたイスラム教徒の王国が完全に消滅したのである。キリスト教徒がレコンキスタ（国土回復戦争）を完了したのである。

10 月 12 日には、コロンブスがカリブ海の現バハマ諸島の小さな島に到達した。無人島ではなかった。グアナハニーという現地名を持つこの島には、住民がいた。しかし、コロンブスは、スペイン王旗を翻し口上を述べたうえ、スペインの領有宣言をして、この島をサン・サルバドル島と命名した。「聖なる

救世主の島」という意味である。大西洋西回り航路によるアジア行を着想していたコロンブスは、ここを最後まで、アジアの地、インドの一部と思い込み、新大陸をインディアスと呼ぶようになる。その時から、19世紀初頭まで、スペインが領有した南北両アメリカ大陸の地域を指す公式名称となる。現在の西インド諸島およびフィリピン群島も含まれる。

こうして、スペイン人による征服(コンキスタ)の時代が始まった。まさに、レコンキスタからコンキスタへと移行したのである。やがて、コンキスタドール(征服者)は、北大西洋とカリブ海を我がもの顔に縦横無尽に船を操って駆け巡り、中南米諸国、カリブ海の島々に広大な領土を得ていく。スペインは、数多くの植民地を築きあげ「太陽の没することなき大帝国」となっていくのである。1898年に、最後の植民地、キューバ、プエルトリコ、フィリピンを失うまで植民地統治は、続けられた。

さかのぼって、1492年3月には、ユダヤ人国外追放令が出された。キリスト教に改宗したユダヤ人は、スペインに残ることが出来た。コンベルソと呼ばれた新キリスト教徒である。親代々からの旧キリスト教徒とは区別されて、異端審問所(スペインにはびこる異端の弊害を除去するために設立された機関、泣く子も黙ると言われていた恐わい所で、異端と判決ができれば、火刑に処された)から嚴重に監視された。8世紀にわたってイベリア半島を支配していたイスラム教徒(モーロ人)も追放されたが、キリスト教徒に改宗してスペインに残留したモーロ人もかなりいた。モリスコと呼ばれ、異端審問所の監視の対象となった。しかし、1609年には、ついに、スペイン全土からモリスコが強制的にアフリカとフランスに送られる事態にまでなった。

さて、植民地統治時代を生きたセルバンテス(1547 - 1616)の不朽の名作「ドン・キホーテ」には、上述の旧キリスト教徒に触れた箇所が多数見られる。例

えば、「おいらは昔ながらのキリスト教徒。...酸っぱくなったほど古いキリスト教徒、長きにわたるキリスト教徒...古くからの由緒あるキリスト教徒...親代々の古くからのキリスト教徒...モーロの女ってものは古くからのキリスト教徒と...わたくしの母親はキリスト教徒でしたし、父親も同じくキリスト教徒で、...」(牛島信明訳)

まだまだ枚挙にいとまがないが、これらのさまざまな作中人物の言葉から推察されるのは、同じキリスト教徒でも、何代も昔からの旧キリスト教徒であることがいかに重んじられたかである。それは、当時、命の安全を保証する証を意味していた。

セルバンテスにとっての新大陸の視点から、もう一度「ドン・キホーテ」を読み直してみると、今まで気づけなかった面白いことが分かってくる。偉才セルバンテスも含めて、当時のスペイン人が新大陸をどう見ていたのかがよく理解できる。本文のエッセイに深い意味を与えるためにも、「ドン・キホーテ」をとおしての考察は大切であると、私には思われた。

セルバンテスは、1575年から1580年までの5年間、イスラム教徒の捕虜となりアルジェにいた。この期間、数千人のキリスト教徒の捕虜の悲惨な有様を目の当たりにしていた。

スペインに戻ってから、セルバンテスは満足のいく職には、恵まれなかった。高潔な人物である彼は、時には、不本意な仕事もしなければならなかった。

1590年、43歳のセルバンテスは、新大陸での役職を希望して嘆願書をマドリッドに提出したが、すげなく断られた。この時の苦々しい思いがあふれているのが、1615年に出版された「ドン・キホーテ、後篇42章」である。ある島の太守になれたサンチョに向かって、キホーテは次のようにサンチョの幸運を

称えて言う、「お前の大願は早くも、本来の順序の法則に反してかなえられつつあるのだからな。世間の多くの者たちが賄賂をつかい、しつこくせがみ、懇願し、夜討ち朝駆けなんのその、ねだりまくって、ねばりにねばっても、それでもなお望むものを手に入れることができないでいる。……大勢の者があればほど望んでいた地位と職務をさらってしまう、などということがある。……」(牛島信明訳)

アルジェでの捕虜期間中に、セルバンテスは4回、逃亡を企てた。全て失敗に終わっている。その度、厳しい尋問を受け拷問されても、決して共犯仲間の名前を告げなかった。自分が主犯だと申し立てた。「驚くべきスペイン人」と、イスラム教徒からも称賛されていた。仲間のキリスト教徒から信望厚く、高潔な人物だったセルバンテスが、新大陸での役職を得るために厚顔無恥なふるまいをしたとは、考えられない。請願書を提出してから4年後、セルバンテスは、当時、おもにユダヤ人が引き受けていた滞納税の徴収官吏としてセビリャに赴いている。誰からも厭われ、歓迎されることのない嫌われ役である。瞳の奥に知性をたたえていた、あのセルバンテスが王権を盾に税金を取り立てなければならないとは……どんなに失意を覚えたであろうか。

ここで、思いだされるのは、善良で、高潔、信念強く、博学な、知性ある世間のものさしから少々ずれているおかしな騎士、ドン・キホーテである。ドン・キホーテは、深い失意をおぼえて郷里の村に帰っている。セルバンテスは、自身のすがたをこのドン・キホーテに映したのではないだろうか。一説では、1570年に「エルドラド(黄金郷)の騎士」と呼ばれていたコンキスタドールのひとりがドン・キホーテのモデルとも言われている。彼は、不屈のエルドラド遠征隊長であった。ベネズエラを流れているオリノコ川近くにある平原地帯を自ら、エルドラドと命名している。新たな黄金産地に総督領を打ち立て、総

督と侯爵になることを若い頃から夢見て、全力をそそいだが、叶わなかった。1579年、失意の内に73歳で死亡している。

セルバンテスの生まれた（1547年）数年後、一般に、1550年代に征服の時代は幕を閉じ、インディアス（すでに見てきたように、新大陸のアメリカのこと。1万年以上前の昔からそこに住む人は、コロンブス以来、インディオと呼ばれた。現在では、差別語である）は、スペイン国王の領有するところとなった。セルバンテスは、スペインの植民地支配の真っ只中を生きてきたことになる。本国スペインから新大陸の植民地に渡った者は、馬を連れた騎士、徒歩の兵、郷士、由緒ある人々、宮廷に仕える人々、農夫、職人、金銀採掘の鉱夫、商人、船乗り、牧夫など、さまざまな階級の人たちであった。大多数の人たちは、貧しく、しがない日々の労働に追われ、一旗あげようと出世の道を求めている。「ドン・キホーテ」に見られる、しがない山羊飼いである農夫サンチョもそのひとりである。1605年に出版された前篇、第7章では、近所に住むサンチョを従士として再び冒険の旅に出ようとしているドン・キホーテがサンチョの気を引くために並べた約束の一つが、「喜び勇んで供をせよ、そうすれば、そのうちに、どこかの島がいと簡単に手に入るような冒険に出くわすこともあるから、そうなったらお前をその島の領主にとりたててやろう、というものがあつた。」（牛島信明訳）

この島というのは、カリブ海のどこかの植民地の島と思われる。サンチョは、たくさんの約束の中でも、いちばん、わくわくしたのが島の領主になることだったらしく、「.....おいらに約束しなされた島のこと、どうか忘れねえでくだせえよ。おいらは、どれほどでかい島でもちゃんと治めてみせるだからね。」（牛島信明訳） こうして、サンチョは、「妻と子供を見捨ててまで、近所の郷士の従士におさまることになったのである。」（同訳）

1590年に新大陸で役職を請願して、そっけなく断られたセルバンテスの念頭にあったのは、大西洋およびカリブ海にあるバハマ諸島、大アンティル諸島、エスパニョーラ島（現サントドミンゴ）、その他の島々にあるスペインの植民地であったと推察される。

前篇では、主従の間で時々、島の領主についての話題がとりあげられる。第15章では、争いを好まない穏やかな性質のサンチョが、相手が貴族であろうと平民であろうと、人から受けるどんな辱めもぜんぶ赦してやるというのと、ドンキホーテは、約束した島をせめとって、お前をその領主にしてやろうというのに、そんな心構えではだめだ、というのも、新たに征服された王国や島にあっては、住民たちは、新しい領主に反抗的になり、不穏な動きに出るという恐れが十分にある。新任の領主は巧みに統治する才覚と敵を攻める勇気が必要であると、サンチョを諭す。

事実、1492年から1605年の征服および植民地支配の期間を眺めてみれば、原住民の反乱がどんなに多かったかが分かる。コロンブスを始めとしてエルナン・コルテス（Hernán Cortés）、フランシスコ・ピサロ（Francisco Pizarro）など、多数のスペインの征服者たちが、このような反乱をどのように鎮圧してきたのか、当時の本国スペインに広く知れ渡っていたのである。

反乱の中でも、だれもが知っているものを以下に簡単に述べると；1520年、アステカ王国の王都、テノチティラン（現在のメキシコシティ）が反乱を起こし、スペイン人に対して執拗に戦ったが、1521年には、彼らの守護神が祀られていた大神殿が徹底的に破壊され降伏した。

1543年には、チリ中南部の先住民であるアラウカノ族が反乱した。これにより、スペイン遠征隊が敗北し、隊長が捕らえられた後に死亡している。この反乱の十数年後の1557年に反乱軍の指揮官、カウポリカン（Caupolicán）が

処刑されてチリの征服が完了した。スペイン側にとっては、非常に難しい征服であった。しかし、完全に鎮圧することはできず、彼らの抵抗は19世紀まで続いた。アラウカノ族の勇猛果敢さを称えた叙事詩「ラ・アラウカナ」がスペインの詩人 Ercilla によって書かれた。1569、78、89年に出版された三部作の作品は、スペイン文学における最もすぐれた8行詩による叙事詩として高く評価されている。1555年から1563年のチリ征服に参加していた詩人は、ある時はペンを、ある時は剣をとって、Caupolican および敵対するスペインの隊長の戦いを力強く、悲痛な眼差しで描いた。それらの人物描写は、抜きんでて他に並ぶものがないと言われている。

高名な叙事詩人 (Alonso de Ercilla y Zuniga, 1533 - 1594) の十数年前に生まれたセルバンテスは、当然、この3部作を読んでいる。高貴な生まれの叙事詩人はチリから帰ってきてからは、宮廷に仕え、サンティアゴ騎士団の騎士にまでなっている。ドン・キホーテが憧れてやまぬ正式に叙任された本物の騎士である。

セルバンテスは、前篇、第6章で、その本に少し触れている。この6章は、セルバンテスの博学ぶりがよく分かる、中でも特に面白い章である。ドン・キホーテが騎士物語を読み過ぎて、頭が少しおかしくなったと思いこんだ家政婦、姪、床屋および司祭がキホーテの書齋に入ってたくさんの書物を調べ始める。為にならない本は燃やされてしまうが、良き書は救われる。その中の一つが、この「ラ・アラウカナ」である。物知りの司祭が、他の2冊の叙事詩をあわせてこう絶賛する、「その三冊はいずれも.....スペイン語で書かれた、最高の叙事詩のうちに数えられるもので、それこそイタリアで最も有名な叙事詩にも匹敵するほどの傑作ばかりですよ。ですからスペインが誇る貴重この上ない詩作品として保管すべきでしょう。」(牛島信明訳)

1532年、フランシスコ・ピサロがペルー征服を成し遂げた。その後、インカ帝国の首都、クスコにスペイン人都市を建設、および諸王の都（リマ）など、いくつもの都市を建設する。ピサロ総督に任命されたインカ帝国の王、マンガ・インガによる反乱が、1536年に開始される。それは、同盟者とみなして迎え入れたスペイン人に裏切られたことによる。詳しい経緯は、息子のインカ帝国皇帝のティトゥ・クシ・ユパンキによって1570年、スペイン国王に提出された文書に述べられている。反乱インカは、「諸王の都」リマを中心に支配の確立を目指すスペイン人に挑戦し続けたが、1572年9月、インカの反乱は終結された。

その他、スペイン国王の支配を受け入れずに敢然と抵抗したメキシコ、ユカタン半島のマヤ族やスペイン人に帰順し、キリスト教に改宗しながら、その後、スペイン支配の打倒をスローガンに、大規模な反乱を起こしたメキシコ北部のサカテコ族などがいた。

本国から遠い海のかなたのこういうスペイン人の征服、先住民の反乱を当時のヨーロッパの一般市民は、どう見ていたのだろうか。ドン・キホーテ、前篇、第33章に、少しそれが垣間見られる。フィレンツェ在住の裕福で家柄の良い紳士がこう言う、「……世の中のための仕事とは、あの財宝と呼ばれるものを手に入れるために、広漠たる大海を渡り、炎暑酷寒をものともせず、多くの蛮族に立ち向かっていく人びとのくわだでだ。……しばしば見られるこうしたくわだては、いかに困難と危険に満ちていようと、名誉であり、光栄であり、有益である。」（牛島信明訳）

はるか昔から島に住んでいる先住民が、蛮族であるという先入観は、つい最近までヨーロッパに限らず、どこの国でも抱いていたものである。それをお

もえば、この時代のヨーロッパ人が征服、植民地支配を立派なくわだて、偉業と考えていたのもうなずける。しかし、先に述べたように、同時代人がインディアスについて書いてきた多くの書物を読んでいる博学であり、知性の人、セルバンテスが本当にそう思っていたとは、考えられないのである。

サンチョは旅の間中、ドン・キホーテがしてくれた約束を決して忘れていない。ただただ、それを期待して辛い道中を空腹をかかえて遍歴の騎士である主人に従っているのである。それも女房と子供のためである。サンチョの心情とは、「おいらは女房と子供たちが不憫でなりませんや。だって、自分たちの父親がどごぞやの島の領主か、あるいは王国の副王くらいにはなって家に帰ってくるのを期待してるはずなのに……」(前篇、第47章、牛島信明訳)

「たしかにおいらは島を願っているが、ほかの連中はもっとよくねえ物を求めてるのさ。……だから島の領主なんぞ造作ないことで、おまけにご主人が、それをくれてやる人間がたりねえほどたくさん島を獲得しようというんだからね。」(同上)

「ドン・キホーテ様、お前様がおいらに何度も約束しなさり、おいらが待ちこがれているその伯爵領を、ひとふんばりして、早くおいらにくださいませよ。それを治める能力なら心配御無用、……あっちこっちの王様と同じように、自分の領地の王様になれるはずですよ。そして、いったん王様になったら、おいらは自分の思いどおりにするんだ。……伯爵領よ早く来いでき。」(前篇、第50章、同訳)

「ああ旦那様、……なにしろお前様は、……海の中の海に囲まれた一番いい島をくれようとしなさったんだから！」(前篇、第52章、同訳)

前篇の最後の52章では、主従の三度目の旅がサンチョによって示唆される。島の領主になるという望み、否、ほとんど現実にそうなるという口ぶりで妻テ

レサに次のように話す、「……わしらがまた冒険を探して旅に出ることになれば、お前はおいらがたちまち伯爵か島の領主に出世するのを見ることになるだろうよ。島といってもそんじょそこらにあるやつじゃなくて、とびきり上等のやつさね。……おまけに、お前も家臣たちに奥方呼ばわりされてびっくりすることになるぞ。」(牛島信明訳)

1615年に出版された後篇では、ついに約束されていた領地がサンチョに与えられる。セルバンテスは、当時のスペインの植民地統治をどう考えていたのだろうか。1552年には、スペイン人ドミニコ会士バルトロメー・デ・ラス・カサスがスペイン人コンキスタドールによる被植民者、インディオ（インディアスに昔から住んでいた先住民族）に対する殺戮と搾取の実態を暴露し、告発した「インディアスの破壊についての簡潔な報告」が印刷されている。当然、セルバンテスも眼をとおしているはずである。

「ドン・キホーテ」の後篇は全部で74章あるが、そのうちの第42章から第53章まで、サンチョの島の統治にあてられている。おびただしい数のエピソードから成り立っている「ドン・キホーテ」の中でも、ひとつのエピソードとしては極めて長いと思われる。サンチョの島への赴任そうそうから周囲の者たちの悪ふざけ、揶揄、からかいが始まる前代未聞、奇想天外のエピソードがしばしばの領主の物語である。

はて、叡知の人、セルバンテスの真意は何なんだろうかと私は、しばし頭をひねって考えよう。

長ったらしいプロローグに飽きてしまった読者は、はやくカリブ海の大海原へ船出をしたいとうずうずしているだろう。

「ドン・キホーテ」の後篇の上記にあげたサンチョの領主にまつわる珍騒動

およびセルバンテスの真意についての私的考察は、エピローグに述べることにして今から出港することにします。

(1) 第1日目、カボサンルーカス、メキシコ (Cabo San Lucas) 1月29日

ロサンゼルスを前々日、夕方5時ごろ出港して北太平洋を航行してきたクルーズ船が、メキシコのカボサンルーカスの港にゆっくりと入ったのは、1月29日の昼前であった。

航行中は、船が立てる白波は穏やかで、太平洋の海原はどこまでも蒼く広大であった。時々、海原を飛び交う海鳥たちが、まどろみを誘う単調さを破ってくれた。同じようにむくむくとどこからともなく湧き上がる白雲たちが、変幻自在に姿を変えてくれて、デッキで終日、海を眺めている私に大きな喜びを与えてくれた。

ロスカボス半島の岬は、北太平洋とコルテス内海に挟まれた南バハ・カリフォルニア州にある。コルテス海 (Mar de Cortés) の名称は、もちろん、1521年、アステカ王国を征服し、Nueva España—ヌエバ エスパニーヤ (メキシコ) の初代総督になった Hernán Cortés というコンキスタドールからきている。いまだに、コルテス海と呼ばれているのには、驚きと違和感をおぼえて、海上散策のボートを運転してくれたメスティソ (スペイン人とインディオとの混血、メキシコの人口の半数を占める) の若者に聞いてみても、きょとんとした顔をして何を言っているのかわからないと、こちらを見る。

5百年前に、ロスカボスに居住していた10部族よりなる南方海洋民族も征服された。前述した (プロローグ) ドミニコ会士ラス・カサス (1484 - 1566)

は、何回かのメキシコ滞在中にスペイン人征服者によるインディオに対する暴虐ぶりを目の当たりにした。国王にその実態を訴えるために文書の要訳を作成した。それが「インディアスの破壊についての簡潔な報告」である。キリスト教徒を名乗る人たちがインディアスで犯した非道、不正、暴力、虐待が報告されている。若ものはこういう歴史を知っているのだろうか。たぶん、知らないのだろうか。学校では教えないのだろうか。今まで、東京でも、現在、住まいがある福岡でも多数のメキシコ人と出会ってきたが、スペイン人に抱いている感情は決して悪くない。しかし、個人的な気持ちと国の見解とは、当然異なっている。国際的な会合があると、メキシコはスペインに対していまだに謝罪を求めている。先日（2019年3月）、現スペイン国王フェリペ六世がメキシコを訪れた。国王はメキシコに謝罪を求められても応じようとはしない。国王には、それなりの次のような理由がある。

1500年6月20日、イサベル女王はセビーリャから勅令を發布し、インディオの奴隷化を禁止し、カステイーリャ王国の自由な臣民としてインディオを扱うよう命じた。1503年12月20日にも、勅令を發布した。それには、インディオをキリスト教徒と交際させ、キリスト教への改宗を促進させること、インディオの労働に対しては正当な報酬を支払うこと、インディオは奴隷ではなく、自由な人間として使役されることなどが規定されている。

ちなみに、ラス・カサスは勅令に従い、彼に仕えていたインディオを解放した。また、彼は、女王が、インディオのキリスト教への改宗に対して抱いていた熱意を高く評価している。

イサベル女王は、先記の年月にさかのぼって早々に、1493年5月29日に、第2回航海(1493年9月25日)に出る前のコロンブスに指示書を伝達している。それには、「彼の地の島々ならびに大陸の住民を聖なるカトリックの信仰に導き、改宗させること、彼我の交遊を深め、彼の地の人々には、やさしく慈しみの情をもって接し、善行を為すこと、いかなる形であれインディオに悪行を働

く者あらば、嚴罰に処すべし」と、ある。

それにもかかわらず、少しでも多く、少しでも早くアジアの富をイサベルとフェルナンド両王に届けなければならぬと考えていたコロンブスは、その富が見つからずに、1494年3月には、インディオ奴隷化をスタートさせた。1495年2月、8月と500名ずつのインディオを本国スペインへ送ったコロンブスに対して、イサベル女王は、いかなる権限をもって我が臣下をかくも粗末に扱うのか、と声を荒げたという。そして、前述のように、1500年6月にインディオの奴隷化を禁止した。しかし、そのイサベル女王は1504年11月26日に崩御した。

現在では、ロスカボスはアメリカの植民地になっているような観光地である。観光客の90パーセント以上がアメリカ人で、ホテルの半分以上がアメリカ資本である。しかし、最近では、世界中に進出している中国人の資本もだんだん増加している傾向にあると、さきほどの若者が説明してくれた。そのせいか、今回の旅では、どこに行っても中国語であいさつをされる。前回のアジア紀行でも述べたように、ここラテンアメリカにまで中国の躍進がめざましいのかと、考えこんでしまう。

小型のボートでの海上散策は、面白かった。ロスカボスの象徴であるアーチ型の天然岩、アル アルコは、当時、スペイン人がガレオン船で新鮮な水、食料を近くの植民地から運搬して、ここまで運んできた入り口として使われていた。アシカ、ハイイロペリカン、ウ、カモメなどの海の生物が群がって、この海は豊穡な楽園となっていた。すぐ隣のサンホセ・デル・カボの浜辺は、ウミガメの産卵地であり、リタイアしたアメリカ人で賑わっている。征服前のサンホセは、ラス・カサスによると、豊かな美しい楽園の村で、インディオたちが群がって住んでいた。

ロスカボスの海岸から離れて、バスはダウンタウンへ向かって走っていく。遠くには、樹木に覆われた山々が午後の、まだ強い陽光を浴びてくっきりと連なっている。メキシコと聞くと、砂漠、サボテン、乾いた大地のイメージが強いが、実際は、南国らしい花々の樹木が、あちこちに見られる緑の自然に囲まれている国である。山々には、ガラガラ蛇、野ウサギ、アライグマ、スカンク、鹿、サソリ、ヒアリ、クモ類が生息していて、生物の宝庫となっている。

ダウンタウンは、サンホセ教会および広場、市庁を囲むように作られている。平日にかかわらず教会には、地元のメキシコ人が大勢いた。1700年代のスペイン植民地時代に建てられ、後に再建されたサンホセカトリック教会に祀ってある暗褐色の聖母マリア像（船乗りの守護者）は、コルテスの生地、スペイン西部のグワダルーペ修道院からもってきたものである。

何故、聖母マリアは暗褐色の肌なのだろうか。それは、次のような伝説によるものである。Nueva España（メキシコ）の征服が、まだ盛んに行われていた1531年、メキシコシティから少し南に下ったところにあるテペアカ（Tepeyac）の丘（現 Guadalupe Hidalgo 市）に、インディオ Juan Diego の前に現れたのが、黒髪、暗褐色の肌の聖母だという。このテペアカの町は、周縁の他の町にくらべて、スペイン人による暴虐が甚だしく、多くのインディオが斬殺されている。そういう背景を考えるとすんなりと流布された伝説は信じられないが、グアダルーペの聖母は、アステカの母神 Tonantzin 信仰とキリストのマリア信仰が習合して、メキシコの守護者となっている。現在もメキシコ人の精神的支柱のひとつとなっている。メキシコのあらゆる町にグアダルーペ教会が建っているのを見れば、どんなに、この暗褐色の肌のマリア様が彼らに慕われているかが分かる。

前述のサンホセ教会でセニョーラが熱心にマリア様にお祈りをしていた。初老の夫が失業中で暮らしが成り立たない。失業手当も貯蓄もない。早く、夫か

私に仕事が見つかりますようにと、近くの村から歩いてきたという。観光客で賑わっているのは海岸なので、村での仕事探しには、難儀しているらしい。それに、夫は若くないのでとうつむく。日本でも神社でお参りするの、何か頼み事がある場合が多いという私に、セニョーラは微笑んでくれた。

(2) 第2日目、プエルト バジャルタ (Puerto Vallarta)、メキシコ

1月30日

ロスカボスを出発したのは、昨日の夕方、6時ごろであった。そこから南に広々とした太平洋を下ってきた。海上の夕日の美しさは、神々しくさえあって、自然に頭を垂れて祈りの姿になっていた。

手が届きそうなくらいほど近くに、むくむくと空を覆っている白雲の下、澄みきった紺碧の洋上をプエルト バジャルタへ入港したのは、昼少し前だった。目の前には、すっきりとした背の高い白い建物が、ほどよい間隔をおいていくつも建っている。洗練された港町は、ハリスコ州 (Jalisco) にある。

1525年、スペイン人の隊長 (ヌーニョ・デ・グスマーン) によってハリスコ王国にある800もの村が破壊され焼き払われたらしい。それ以前のハリスコ地方は、インディアスの中でも、とりわけ豊穡で賞賛に値する土地のひとつだった。その楽園のような土地に住民がひしめき合って暮らし、幸せな生活を送っていた。まさに、スペイン人たちの到着は、彼らにとって悪夢そのものであったろう。

現在のハリスコ地方は、いろいろな異なった種類の植物であふれている豊かな美しい土地である。そして、テキーラとマリアチで有名である。

ビーチまでの一時間位の道路の両側には、緑の樹木やヤシの木が植えられ、

ところどころに、ピンク色のオルキディアの花が顔をのぞかせている。遠くにある 4500 メートル級のシエラからは、銀、マンガンが採掘される。また、このハリスコ地方はメソアメリカ原産の花として有名なポインセチアやコスモス、ダリア、マリーゴールド、アフリカンチュウリップなどが、野生の花としてあちこちの野原に咲き乱れているし、栽培もされている。むろん、忘れてはならないのが、メキシコ産の蒸留酒、テキーラを製造するリュウゼツランの一種であるブルーアガエである。テキーラ市および近隣の 4 つの市はテキーラ製造に最適な気候に恵まれている。湿気がなくさわやかで、1 年中暖かく雨が降らない。最良のテキーラは深みのある濃い琥珀色をしている。最低 3 年はねかせておかないと、コクのある色合いもまろやかな味もでないという。

ビーチに着いた。白砂の前に広がっているのは、エメラルド グリーンの海である。明るい光線がふりそそぐ海面は、白くきらめいている。青々とした亜熱帯の鬱蒼とした樹葉にびっしりとおおわれた低い山々が、ビーチをぐるっと取り囲んでいる景観に感嘆の声があちこちから上がる。その中でも背の高い、実をたわわにつけているヤシの木が目立っている。マンゴーも花を咲かせている。

ここは、プエルト バジャルタでも有数の景勝をもったビーチで長期滞在の人たちが、世界中からやってくる。特に、1 月、2 月が、花たちが咲き誇るいちばん美しく、華やかな季節なのである。すでに何人もの人が浜辺に寝そべて日光浴をしている。小型の船が何艘も海上で強い光の中にゆらめいている。「絵になる」景色とは、こういう情景をいうのだろうか。しばらくの間、その絵の中の人物像のひとりになりきってしまっていた。500 年前に起こったことなど想像もできないのどかで平和な風景。やがて、この夏の午後の幸せなひとときも移ろいで、単なる思い出になるのであろう。少し、胸が痛んだ。

オールドタウンの街はビーチから車で1時間位のところにある。17世紀のスペインコロニアル風のレンガの建築がずらっと並んでいる。少し郊外にできれば、17世紀以降のラテンアメリカで建てられたアシエンダ（大農園）風の建築も見られる。植民地時代、スペイン人の大土地所有者が、インディオを働かせて小麦などの穀類、畜産物を生産して地域経済をまかなってきたのである。

1930年代に建てられたグアダルーペ聖母教会まで歩いていく。しかし、建築は、スペインの1700年代のコロニアル風のれんがで造られている。堂々とした背の高い教会である。両側には、左右対称の小さな塔がついている。それらに挟まれた、塔より一段と大きく高い中央の部分の建物の上部には、大きな鐘がついている。

中に入ると、平日のせいかわらんとしている。中央祭壇の上部には、グアダルーペ聖母の画像が飾られている。前日に訪れたサンホセ教会の聖母の褐色の肌と比べて、こちらの聖母様の肌は白っぽく見えた。今では、インディオとスペイン人の混血を意味する褐色の肌にする必要がなくなったのかと、ふと考えってしまった。

夕方、黒い樹木におおわれた低い山々の彼方を金いろに染めた港を静かに船は外海にでた。いくつかのちぎれ雲が、薄いバラ色と金いろにきらめいて、出港の度に感じさせる哀感をいや増しにさせている。

(3) 第3日目、マンサニージョ (Manzanillo)、メキシコ 1月31日

ハリスコ州の隣にあるコリマ州のマンサニージョの港には、早朝に入港した。昨夕と同じようにバラ色ときん色に雲が染まっているが、入港時の歓びと

期待のせい、それらの雲をとおして洋上に降りそそぐ清冽な光がいちだんと華やかである。

コリマ地方も、周辺の地方と同じように征服時には、スペイン人に荒らされ、破壊された。いずれの地方もスペイン本土のレオン王国やカスティーリャ王国よりはるかに広大であった。

このように、インディオの領土に侵入し、その土地を荒れ野にしてしまった根拠はどこにあったのか、とスペイン人のラス・カサスは問いかけている。それは、次の「レケリミエント—降伏勧告状」(1513年、当時最も権威ある法学者、フアン・ロペス・デ・バラシオス・ルビオスがコンキスタを法的に正当化するための文書を編纂した)であるという。つまり、住民にスペイン国王への臣従と帰順を勧め、それに従わない場合、彼らを国王陛下に背く謀反人、反乱者と決めつけ、殺したり奴隷にしたりすることになるという「通達—レケリミエント」である。事実、領土侵入の征服者たちは、そのように国王陛下に報告した。正当とみなされた公認の根拠にもとづいて行動したのである。1524年から1535年に至るまで、スペイン人はひたすらその根拠に従い続けた。

マンサニージョは、現在はメキシコの港町として栄えている。港からゆっくり歩いて15分くらいの所に商店街がある。いくつもの店の前を通り過ぎるが、買い物客の姿がほとんどないのは、まだ午前も早い時間だからだろうか。暑い太陽を避けて、だらっと日陰で寝そべっている犬を横目で眺めながらどンドン坂を上っていく。坂を上りきった所であつと声がかかる。また、聖母グアダルベ教会がここにもあった。メキシコ人の聖母にたいする厚い信仰心がひしひしと伝わってくる。

中に入ると、朝まだき、誰もいない。中央祭壇の後ろの大きなガラスの向こうに今、来た港の海が遠くにうっすらと青く見え、すぐ手前に見える淡い緑の

樹葉はゆたかに茂っている。遠景をとりいれた教会は、こころを慰め、安らぎを感じさせてくれた。ガラスの上部には、おおきなステンドグラスが2枚はめ込まれている。

2枚とも前述したテペアカ (tepeyac) の丘に出現した聖母マリア様の奇跡の物語である。羊飼いのファン ディエゴは杖を手にして、姿を現したマリア様に驚嘆している。数回、あらわれたというマリア様の衣装は異なっている。左の1枚の赤い衣に青色のケープを羽織ったマリア様は、すりと背が高く優美なお姿でファンの前に立っておられる。右の1枚では、紫色の衣に黄色のケープのマリア様は、少しこうべを傾けてファンに何かを話しておられる。ファンは驚いて背を向けて逃げかけている。そのファンに乞うたのは、テペアカの司教様にテペアカに礼拝堂を建てるよう伝えることであった。司教様は私の言葉など信じてくれませんよ、と言うファンに、やさしい慈しみの表情で「では、あなたのまわっているマントに私の姿を映しましょう、それならば信じてもらえるでしょう」とマリア様が語りかけ、にっこりお笑いになった。

そして、ファンのマントには、どこのグアダルーペ教会でもおなじみの黒髪、暗褐色の肌の聖母マリア様のお姿が映しとられていた。ケープには、今も天体で実際に観測できる星が無数にちりばめられている。

現在、テペアカには、当時の小さな礼拝堂の跡に大聖堂が建てられ、世界中から大勢のキリスト教の巡礼者や観光客が訪れる。

もちろん、マントに映しとられた聖母グアダルーペのお姿を賛美するためである。

教会の裏側に出ると、事務所の隣に小部屋がある。特別に案内して下さった神父様にファンの言い伝えの真偽を伺うと、真面目な顔で「これは、伝説ではありません。マリア様ご出現の奇跡は本当です」とご返答された。それに反

論する根拠を持っていない私は、黙ってうなづくしかなかった。

通された小部屋には、インディオのファン・ディエゴの画像、聖母グアダルルーベ像など、奇跡に関するたくさんの品々が収蔵されていた。マンサニーョ教区のグアダルルーベの聖母信仰の深さが詰まっている空間であった。

毎週、日曜日には、広々としたこの教会は信者でいっぱいになるという。あれから、500年以上が経った現在、確実に、否、本国スペイン以上にキリスト教が一般市民に浸透しているのをイサベル女王がご覧になったら、おおいに満足なさるのだろうかと思うと、一瞬、複雑な感慨にとらわれてしまった。

午後2時、熱帯の澄みきった青い青い空の下、遠くに連なっている碧い山脈を左舷に眺めながら、優雅なクルーズ船はグアテマラのプエルトケツアル港に向けて出港した。これでメキシコともお別れだ。さきほどからぐるぐると海上すれすれに、自由自在にかなりのスピードで飛び回っている海鳥に心の中でさよならと言う。

(4) 第4日目、古都アンティグア (Antigua Vieja), グアテマラ

2月2日 (土)

1) プエルトケツアル (Puerto Quetzal) 港から古都アンティグアへ

まだ、海は黒っぽい蒼さであった。空一面をおおう白とねずみ色のまだら模様の雲から、かすかに陽が射しはじめている。その下の海面はゆらゆらと淡い金いろにきらめいている。雲の割れ目から生まれたばかりの清新な光輪が、徐々に広がり始めている景観に目がいつときも離せない。

それから暫くして、すっかり明るくなったきららかなプエルトケツアル

(Puerto Quetzal) の港 (グアテマラ) にいつもの儀式どおり、船はずしすと敬うごとく入っていった。

9時30分過ぎには、バスは古都アンティグアに向けて走っていた。ここから、標高1520メートルほどの高原にたたずむ静かな古都への道のりは、約85キロメートルある。車窓からは、どんな景色が見えるのだろうか、期待で胸が弾む。

左側には、農業国、グアテマラの代表的な農産物であるサトウキビ畑が青々と広がっている。

右側の窓を夾竹桃に似たマドレカオと呼ばれているピンクと白の花を咲かせている樹木が、すばやく通り過ぎる。

すぐに、左に眼を向けると熱帯地方らしい景観が続いていく。間隔を置いて植えられている、それほど背の高くないヤシの木々たち、その向こうには、濃淡の色とりどりの緑の林が、ずっと先の山裾まで伸びているのが見える。あゝ、なるほどなど、すつんと納得する。この国の名前のグアテマラは、マヤ語で「林がある場所」を意味するからである。

林の向こうに若草いろの平原地帯が続いているところをバスは、快適に走っていく。反対の道路に目を向けると、たまにバイクや車が通り過ぎていく。

グアテマラは、何と緑にあふれている美しい国なのだろうか、と心をすこし震わせた。来て、実際に見ないと分からないことばかりだと、いつも旅をしていて思うことを、また、思う。

昨年(2018年)、噴火したフエゴ火山の噴火跡の傍をとおり過ぎる。火山灰に道がおおわれ、ごろごろした岩石もあちこちに散らばっている。その向こうには、フエゴ火山が何事もなかったかのようにあっけらかんと雲海のなかに佇んでいる。それほど高い山ではないが、優しい姿をしている。

それを過ぎると、左側にコーヒー畑の緑豊かな樹木が目にとび込んできた。

サトウキビ畑と同様に、1300m から 3400m の高地で、11 月から 5 月までの乾期に栽培される。かなり高い所を走っているのがコーヒー畑で分かる。

その他にも、バナナ、カカオ、香辛料などもここの特産品である。もう、そろそろ、街に近いのか、貧し気な小さな家が軒を連ねている傍をとおり抜ける。貧富の差もかなりある国である。

富士山のような優美な稜線を持っているアグア火山が、正面に堂々とそびえ立っている。古都アンティグアによく着いたと思った。スペイン植民地時代の面影がいまだに残る古都のシンボルであるアグア火山は、富士山よりわずかに 16 メートル低い 3760 メートルの死火山である。

## 2) スペイン人によるグアテマラ王国の征服

グアテマラ王国の数ある街の中でも、とりわけ規模が大きくて豊かな街であった古都アンティグアは、かつては、グアテマラの首都として 16 世紀から 1772 年まで 200 年以上繁栄を極めたが、1773 年の大地震によって大きな被害を受け、首都は現在のグアテマラシティにうつることになった。

その後も 2 回にわたって地震の被害を受けた。再建をあきらめた結果として生まれたのが、18 世紀後半のスペイン植民地時代のカラフルな街並みが残る現在のアンティグアである。約 40 の崩壊した教会やコロニアル様式の建物が今でも街のあちこちに見られる。

ここでは、スペイン人によるグアテマラ王国征服の歴史をふり返ってみることにしたい。

1521 年、アステカ王国の首都であるメキシコのテノチティトランで、王国最後の皇帝、クアウテモクがエルナン・コルテス軍に不屈の抵抗を試みたが、

力および捕らえられ、殺された。ここにアステカ王国は滅亡した。

そのメキシコから総司令官、エルナン・コルテス (1485 - 1547 年) がペドロ・デ・アルバラード隊長 (1485-154 年) を太平洋に面したグアテマラ王国へ向かわせた。

アルバラード隊長は陸路をとり、大勢の馬兵 (うまつわもの) と歩兵を従えて出発した。山々や湖を越えての遠征は難儀だった。

1516 年にトレド大司教フランシスコ・ヒメネス・デ・シスネロス (フランシスコ会士) によりインディオ保護官の肩書を与えられたラス・カサスによると、当時のグアテマラ王国は隆盛をきわめ、そこには大勢の人がひしめきあって暮らし、土地も非常に豊穡であった。しかし、コルテス以上に凶暴で無慈悲なアルバラード隊長は、グアテマラ王国へ到着するや、侵略を開始し、大勢のインディオを虐殺した。グアテマラ地方一帯にいた首長たちは、<sup>きん</sup>金を出さないと火あぶりにされることを知るや、自分の治める村を捨て、山中に身を隠した。

アルバラード隊長自身が報告しているが、グアテマラ王国には、アステカ王国をはるかに凌ぐ大勢の人びとが暮らしていた。しかし、スペイン人一行により、この世でもっとも土地の豊饒さと広大さに恵まれていた王国のひとつであったグアテマラ王国は、またたく間に破壊されてしまった。スペイン人の目的は<sup>きん</sup>金を手に入れることだったので、それが見つからないと、インディオたちは鎖につながれ、焼き印を押されて奴隷にされた。

1524 年から 1540 年までの 15, 6 年間に、アルバラード隊長とその弟たちは、このような無法な行為を続けた。この期間中 (1536 年から 1540 年まで)、ラス・カサスはメキシコとグアテマラ間を行ったり来たりしていたので、彼らの暴虐をたびたび目撃していた。そして、このように書いている、「私はその町きっ

ての首長の子息にも焼き印が押されたのを目撃した」、「この無法者(アルバラー  
ド隊長)はまた、船を建造するために無数のインディオを酷使し、死に至らし  
めた。彼はインディオに、北の海(マール・デル・ノルテ—大西洋)から南の  
海(マール・デル・スール—太平洋)まで、距離にして130レグア(1レグア  
は約5,6キロメートル)の道のりを、重さ3キントルか4キントル(1キン  
タルはおおよそ46キログラム)もする錨をかつがせて運ばせた。そのため、錨  
の鉤がインディオの背中や肩にくいこんだ。同様に、彼は何も身につけていな  
い哀れなインディオに数多くの大砲を背負わせた。私は、大勢のインディオが  
疲労困憊し、道中、喘ぎながら大砲を運んでいる光景を目撃したことがある。』

### 3) 古都アンティグア見学

アンティグアの街の中心部へ向かって歩きはじめる。幅広い車道にも歩道に  
も石がびっしりと敷き詰められている。車道の片側には、車がずらっととめら  
れているが、まだ、それらの脇を車が走り抜ける幅は十分に残されている。

今日は土曜日なので、街に遊びにきた家族ずれの車なのだろうか、比較的  
大きい車が多い。道路をはさんだ両側には、淡いブルー、オレンジ、黄、白、茶  
などの色に塗られた一階建てのこじんまりした家々が軒をつらねている。ど  
この家も窓が小さいのに気がついた。道路に面している入口に人の姿は見られ  
ない。ときたま、地元の人らしい男女とすれちがう。道路のむこうには、樹木  
でおおわれた低い山が見える。市内までの距離は遠くはなかった。

市内は、碁盤の目のように道が整然と前後左右に延びているので迷うことは  
ない。そのほとんど真ん中に中央公園がある。アンティグアの郊外から車で親  
に連れてこられた2,3歳くらいのメスティソの女の子は、黒髪をまん中で分  
けて愛らしく、外国人の観光客の眼を引きつけている。手で織ったような青と

オレンジのチェックの模様がはいったスカートと明るいブルーにオレンジ色の花もようのブラウスをまとして大木の根元に座りこんで微笑んでいる。母親らしい若い美しい女性が傍で見守っている。彼女たちの家がある村の名前をさっき教えてもらったが、全然なじみのない場所だった。ここから近いらしい。

生い茂ったたくさんの樹木が、涼し気な影を提供している公園内は、彼女たちのような近隣の村々から来た人や、私のようなアジア系観光客でこみあっている。華やかなグアテマラ衣装を身につけたみやげ物売りの女たちの声にもぎやかである。

正面に見える白いバロック様式のカテドラルが、何度か修復されたものであるが、スペイン植民地時代を象徴するかのように堂々と美しく建っている。今、まさに一組のメスティソの花嫁、花婿が家族、親戚および友人たちに囲まれて外にでてきた姿を眺めて複雑な気持ちがよぎったのは、たぶん、私だけであろう。カトリックの神父様による結婚式を終えたばかりのふたりは、歓びの笑みをたたえて周りの人たちと何かを話している。カトリック教徒であることが、ごく自然な環境で育ったふたりには、この街に起こった壮絶な過去の歴史などほんの一瞬たりとも思い浮かべないだろう。

この大聖堂（カテドラル）には、聖サンティアゴが祀られている。以前、私が100キロの巡礼の道を歩いてたどり着いたのが、スペイン、ガリシア地方にあるサンティアゴ・デ・コンポステーラの大聖堂であった。もちろん、その大聖堂が本家で、サンティアゴの墓所がある。サンティアゴは、スペイン語名であり、イエスの12使徒のひとり、聖ヤコブのことである。

レコンキスタ（国土回復戦争—711—1492年、イスラム教徒に占領されていたスペインをキリスト教徒の手に奪回する戦い）時代、イスラム教徒との戦いで、劣勢になると、白馬にまたがったサンティアゴが現れて窮地を救ってくれるという伝説が、スペイン人キリスト教徒の間に広まった。戦闘的な騎士の姿

のサンティアゴの像が美術史で名高い「サンティアゴ・デ・マタモーロス—イスラム教徒殺しのサンティアゴ」である。

時は移り、スペインは、レコンキスタ時代からコンキスタ時代に突入した、のはすでに見てきたとおりである。

スペインのコンキスタドールたちは、今度は、インディオを攻撃する時「攻撃！」と言うかわりに「サンティアゴ！」と叫んで突撃した。聖サンティアゴは、レコンキスタおよびコンキスタ時代においても、自分の名前で攻撃が鼓舞されたことを知ったら、どんなに顔をしかめたであろうか。

一方では、これは、スペイン人キリスト教徒によるサンティアゴへの信仰心の篤さを如実に現しているのである。イエスがお亡くなりになった後、エルサレムからスペインへ布教のために来た最初のイエスの使徒であり、その活動によりキリスト教をスペインにもたらし、広めた最初の使徒なのである。

ローマ支配下の当時のスペインでの布教活動は、困難を極めた。南のアンダルシアまで活動範囲を広げたが、順調にいかなかった。あきらめてエルサレムに帰ろうとしたサンティアゴは、スペイン北東部のサラゴサまでやって来た。サラゴサは、当時はローマ軍の駐屯地であった。12世紀初頭には、アラゴン王国の首都となるほどの大きな街である。そこを通るエブロ川のほとりにたたずむサンティアゴに奇跡が起こった。マリア様のご出現になったのである。あきらめないで、もう少しスペインにとどまり、布教活動を続けるようにと、サンティアゴにやさしく諭された。こうして、サンティアゴはガリシア地方にまで足を運び、より多くのスペイン人にキリスト教を広めた。

スペインから帰ったエルサレムで殉教を遂げたサンティアゴの遺体は、後に、スペインのガリシア地方の現在の大聖堂がある場所に使徒たちによって運

ばれた。当時、使徒の間では、布教地がどこであれ、布教した場所に埋葬するという習慣があった。こうして、サンティアゴはスペインの守護聖人となったのである。

さあ、グアテマラの古都アンティグアのカテドラルに話しを戻そう。アンティグアの守護聖人もサンティアゴである。カテドラルには、サンティアゴが祀られている。グアテマラ王国でどのようにスペインによる植民化および改宗化が進められてきたかは、一目瞭然であろう。1543年から1680年にかけてカテドラルが建設された時期に注目すれば、よりいっそう分かる。

嬉しそうに、それぞれの友人たちと談笑を続けているカトリックのメスティソの新婦と花婿に心から幸せになってもらいたいと思う。辛かったであろう先祖の歴史は、もはや、かなた遠くに霞んで見える。

グアテマラの総人口1600万人以上の中で、カトリックは65%、プロテスタント30%、その他5%と言われている。民族構成は、マヤ系先住民46%、メスティソ（欧州系と先住民の混血）30%、そのほか24%である。

先記のカップルは、欧州系のメスティソらしく、ほりが深く美しい。マヤ系先住民は、日本人と同じモンゴロイドに属する。グアテマラの政治経済は、スペインなどの移民の末裔や、白人と先住民の混血であるメスティソが主に支配している。昨年（2018年）から続いている、グアテマラ、エルサルバドル（El Salvador）、ホンジュラス（Honduras）など、中米から歩いて来たキャラバン隊は、ほとんどが先住民および先住民の混血と見られ、今や（2019年、春）10万人ちかくがメキシコまでたどり着いている。北米に入って生きる糧を見つけようと必死なのである。後で、マヤ文明について少し触れたいと思う。

なかなか、先に進まないが、古都アンティグアに戻ろう。カテドラルから少

し歩くと、メルセー教会がある。アメリカ大陸の宗教美術史のなかでも、正面入り口のバロック様式の装飾が有名で非常に優美である。洗練された白い装飾は、メキシコのプエブラ市からきた漆喰職人によって造られた。教会全体の黄色い外観によく映えている。

メルセー教会は、美術史のなかで有名であるだけでなく、スペイン征服時代のグアテマラの歴史のなかでも、後世に残すべき価値がある。しばしば取り上げてきたインディオの保護官であったラス・カサスの胸像が次のような説明とともに、教会の前に立てられている。

「バルトロメ・デ・ラス・カサス師は、この首都のサント・ドミンゴ修道院の初代司教代理であり、チアパス州（メキシコ）の二代目司教であった。

高德な師は、グアテマラの古都アンティグアの最初の文筆家であり、インディオの保護官であった。

- 1) インディアスの住民の人間性を弁ずる書
- 2) インディアス博物誌
- 3) インディアスの破壊についての報告
- 4) すべての人々を真の宗教へ導く  
唯一の方法（ラテン語）

などの書を、その他多数の書物とともに執筆した。

1474年に生まれ、1566年にスペイン、アトチャ聖母修道院で92歳で死亡。」

他の村から観光で訪れたという、若い浅黒い肌のかわいらしい女の子が、かたわらにいたので話しかけてみる。ラス・カサスの名前を聞いたことがあるか、と言う問いに、知らなかった、今、初めて知ったと、にこっと笑う。学校では教わらなかったという。アンティグアには、今回、初めて来た。ここからあまり遠くない小さい村に住んでいる、歴史はあまり好きではない、などと屈託がない。若い世代にとっては、500年も前のことは、化石時代に相当するのかもしれない。

忘れてならないのは、ラス・カサスは、スペイン人の植民者の敵意や植民地

官吏と対立しながらも、インディオの窮状と救済を訴えて、平和的植民計画および平和的改宗計画の実施にむけて奔走したことである。

#### 4) ミルクの香りがしない密林の中のマヤ文明

ここで、ぜひ知ってもらいたいのは、コロンブス以前のアメリカ大陸でもっとも発達した暦と天文学の知識を備えた文明が存在していたという事実である。マヤ文明は鉄器を使わずに、石器だけで洗練された高度な都市文明を築き上げた。旧大陸世界との交流なしに独自に発展した。

先住民はマヤ低地やマヤ高地（メキシコの大部分、中央アメリカの北部）などに居住し、計 30 のマヤ語が話されている。マヤ文明が発達したのとはほぼ同じ地域で、現在でも 800 万人以上の人々がマヤ諸語を話して、マヤ文化を発展させている。つまり、「マヤ民族」という単一民族は、過去にも現在にも存在せず、「マヤ」とは、外国人が名付けた他称である。植民地時代のスペイン人史料によると、メキシコのユカタン半島の一部、13 世紀から 16 世紀にかけて発展した都市のマヤパン遺跡の一角が、「マヤ」と呼称されていたとされる。

マヤ系先住民は、日本人と同じモンゴロイドに属する。「最初のアメリカ人」は、今から 1 万 2 千年以上前の氷河期に、アジア大陸からベーリング海峡を歩いて無人のアメリカ大陸に到達したモンゴロイドの狩猟採集民なのである。その末裔の一部が、マヤ人になった。世界 7 大陸のうち、人類が最後に到達したのがアメリカ大陸である。すなわち、先住民による「新大陸」の発見は、700 万年におよぶ人類史において、かなり最近の出来事なのである。コロンブス以前のアメリカ大陸は、1 万年以上にわたってモンゴロイドの大陸であった。

マヤ文明の起源とされるのは、以下のとおりである。中米グアテマラのセイ

バル遺跡が立地するマヤ低地南部で、最古（前1000～前700年）の土器が出土し、幅が30メートル以上の大きな基壇が発掘された。「中央広場」の発掘では、前1000年頃に自然の地盤の上に建造された最古の神殿ピラミッドと公共広場が見つかっている。また、同時代と思われる翡翠を含む硬質な緑色の磨製石斧も出土している。翡翠は、緑色の硬い玉であり、メソアメリカではグアテマラ高地だけで産出する。マヤ人にとって、緑と青は世界の中心の神聖な色であった。翡翠は、その色、希少性、硬さゆえに、メソアメリカの支配層の間で権威や威厳を示すものとして金<sup>きん</sup>よりも貴重であった。

セイバルの支配層は、神殿ピラミッドと公共広場からなる「神聖な文化的景観」を日本の縄文時代晩期にあたる頃には、増改築し続けていた。

現在では、セイバルは、国立遺跡公園に指定されているグアテマラを代表する国宝級の大都市遺跡であり、9世紀半ばを代表するマヤ都市のひとつである。2000年にわたって居住されていた最大の都市として繁栄していた。セイバルは、「セイバの木が生える場所」を意味する。スペイン語でセイバと呼ばれるパンヤの木は、高さが70メートルに達する大木で、マヤ人にとって神聖な木である。

マヤ人の世界は、天上界、大地と地下界の三層から成っている。セイバの大木は、その天上界と地下界をつなぐ世界の中心軸なのである。つまり、マヤ人にとって過去から現在、未来までもつなぐ永遠を意味する聖なる木である。

モンゴロイド先住民のオルメカ文明などを独自に発展させたユカタン半島に侵略者が現れた。1518年、ユカタン半島東部のカリブ海を望む交易港として栄えた、マヤ都市のひとつトゥルムにJ・グリハルバラスペイン人が遠征してきたのである。この大きな港街や神殿ピラミッドの高い塔に驚嘆したと記している。エメラルドグリーンのカリブ海に面した広々とした白い砂浜がひろがっ

ている美しい所である。

1524年には、すでに述べてきたあの凶暴なアルバラード隊長率いる遠征隊が、マヤ高地のキチェ・マヤ人の主都ウタトランを破壊した。この征服では次のような伝説がある。キチェ・マヤ人戦士のテクン・ウマンは、たくさんのケツアル鳥の羽根に全身をつつみ、鳥に変身してアルバラードと勇敢に戦ったが討ち死にする。ケツアル鳥はグアテマラの国鳥であり、先スペイン期のメソアメリカで神聖な鳥として崇拜された。ケツアル鳥の羽根は、太陽の光の当たり具合によって、金属光沢のある緑か青に見える。金より貴重な翡翠と同じように、神聖な色であり、王族や貴族だけがそれらの装飾品を華麗に身に着けていた。

先のテクン・ウマンが戦死した地は、今朝、下船したプエルトケツアルの港近くにあるグアテマラ第2の大都市ケツアルテナンゴ（ケツアル鳥の丘という意味）である。

その後、ユカタン半島北部、中部に他のスペイン征服者たちが侵略を始めた。各地でマヤ人の反乱にあい、征服事業は困難を極めた。マヤ文明最後の都市、タヤサルはグアテマラ北部にある熱帯雨林に守られた独立した都市として栄えていた。そのタヤサルが侵略、破壊されたのは、実に、コロンブスの航海から200年以上経った1697年であった。

前述したインディオの保護官であったスペイン人ラス・カサスはユカタン王国およびマヤ人をこう述べている、「このユカタン王国には、かつて数知れない大勢の人が暮らしていた。というのも、王国がこのうえなく素晴らしい気候の土地で、そこには食物や果物がふんだんにあったからであり、しかも、その豊かさはメキシコをはるかに凌いでいた。また、ユカタン王国では、とくに蜂蜜と蠟がこれまでに発見されたインディアスのどの地方よりたくさん採れ

た。.....その住民はインディアスのすべての人びとの中でも、とくに分別を具え、礼儀正しく、しかも、陋習にふけったり罪を犯したりすることが少なく、.....」

事実、世界の作物の6割はアメリカ大陸原産である。マヤ人の主食トウモロコシ、トマト、カボチャ、トウガラシ、ジャガイモ、サツマイモ、インゲンマメ、カカオ、バニラ、タバコ、ゴムなどの豊富な原産物がある。コロンブスによるアメリカ大陸の発見は、世界の食文化革命をもたらした。特に、カカオは高温多湿の気候と良好な土壌をもつ低地の特産品であった。主に支配層の高貴でぜいたくな飲み物として珍重された。蜂蜜は、重要な甘味料であり、発酵させた蜂蜜酒は宗教儀礼において大量に消費された。

マヤ地域では、採集狩猟中心の食料獲得経済から、農耕を生業の基盤にした食料生産経済へ移行していく過程は、数千年にわたる長いものであった。

マヤ文明は、動物のミルクを飲まず、乳製品を食べない、まさに「ミルクの香りのしない文明」のひとつであったと言われている。

なんと、長い1日だっただろう、さあ、乗船しなければ.....

6時前には、船はプエルトケツアル港を出た。しばらくすると、空のいちばん上が薄金いろに染まってきた。その下はもやのかかったような桃いろで、ぼっかりと黄いろの夕陽が浮かんでいる。すぐ下の海面に反射して、赤と金の糸で織ったような帯がどこまでも長くつづいている。夕ごはんを口に運ぶのも忘れて見とれているのは、私ぐらいであった。グアテマラとの別れがたい想いにふさわしい聖らかな夕景であった。西の薄明もすぐに薄闇に包まれていく。よもすがら南へ南へと私を運んでいくとうとうと流れる海よ。

(5) 第5日目、レオン (León)、ニカラグア、2月3日 (日)

1) コリント港からレオンへ

透明な青い夜明けがバルコニーの前にひらけている。空より碧い海面は、鏡のようになめらかで白波ひとつ立てていない。左舷には、鬱蒼とした低木の濃い緑の森が先ほどから続いている。遠くには、ぼおっと薄青い山なみの起伏が幻のように浮かんでいる。この陸地は、エルサルバドル (El Salvador) か、それとも、ほんの一部だけ太平洋に面した海岸線を持ち、国境を接しているホンジュラス (Honduras) か、どちらかであろう。ニカラグアは中米の真ん中にあり、太平洋とカリブ海側にふたつの美しい海岸線を有している。エルサルバドルとホンジュラスはとおりに過ぎるだけで寄港しない。

8時前には、ニカラグアのコリント港に着いていた。コリントは、北西に位置している本土と橋で結ばれた島にある、まさにニカラグアの玄関口にあたる最大の港である。街は、ぱっと太平洋の明るい海にひらいている。そして、やさしい白砂がかぎりなく続いているビーチのある南国の魅力でいっぱいである。スペイン植民地時代をおもわせるコロニアル建築や古代教会、小さな店が立ち並んでいる。

しかし、この港町でぐずぐずしている暇はない。ニカラグアの第2の都市レオン行きのバスに乗り込んだ。車窓の両側には、農業国らしくサトウキビ、バナナ、マメ類、トマト、キュウリ、リンゴ、ピーナッツ、パイナップル、アボカド、お米などの畑がつづいている。しかし、時期ではないのか、それとも、バスの窓から遠いのか、それらの農作物を見極めるのは難しかった。

先記のスペイン人、ラス・カサスは、1535年、パナマを経てペルーへ向か

うが、風状態にあい、ニカラグアに立ち寄った。「あたり一帯には見事な果樹が繁茂していた。その結果、集落には大勢の人が暮らすようになった。」「.....素晴らしい果樹園があったので、キリスト教徒は各自、割り当てられた(彼らの言葉を借りれば、委託—エンコメンダールされた)村に居を構えた。彼らはインディオに土地を耕作させ、.....」と述べているように、広大な果樹園がある。最初は、インディオが耕作していたが、後には、身体的により頑丈な黒人が奴隷として連れてこられた。この国には、先住民、アフリカ系黒人、欧州系のメスティソ70%という民族が住んでいる。ラス・カサスは、インディオは身体的に生来ひ弱いと考えていた。前述したように、1516年、インディオ保護官の肩書を与えられたラス・カサスは、インディオ救済のための具体案を作成し「改善策に関する覚書」で、黒人奴隷のインディアスへの導入を献策した。しかし、1547年、リスボンに逗留中にポルトガル人による黒人奴隷獲得の実態を知り、回心している。

さあ、窓外の景観に戻ろう。コーヒーの低木が沿道に沿ってずらりときれいに並んでいる。ニカラグアのコーヒーは輸出されているほど有名である。後でいただいたコーヒーは、ふわっと香りが鼻腔をついて甘くおいしかった。畑が途切れると、樹木が立ち並ぶ森林地帯をとおる。遠方には富士山を小さくした火山も2, 3見える。

太平洋岸の火山地帯には、20 数個の火山がある。その中でもひととき美しいのが、コスタリカの国境近くまで迫った広大なニカラグア湖に浮かぶオメテペ島にある。淡水湖にある島としては最大級の島で3万5千人以上が居住している。大きな果樹園、コーヒー栽培農園、ヤシの木、熱帯地方に繁茂している濃い緑の樹木などにおおわれた、ふたつの山を意味するこの島には、その名のとおり、コンセプション火山とマデラス火山が、ひとびとの日々の生活の営みをやさしく見守るかのよう屹立している。稜線がなだらかで優美なたたずま

いを見せているふたつの火山は、長い長いすそ野が触れあう近さにあり、まるで睦まじい夫婦のようである。前者は1610メートル、後者は1394メートルの高度があり、富士山にくらべるとそんなに高い山ではない。しかし、いつも、山裾にふんわりとたなびいている白い雲を下から眺めていると、火山が天に限りなく伸びていると思わせる。

バスは、先記の火山地帯のずっと手前のニカラグア第2の都市、レオンの街に入っていた。港から約1時間半かかった。バスを降りると、熱い太陽を浴びせられた。レオン大聖堂に面した中央公園の大木セイバの下には、いくつかベンチが置かれ、人々がくつろいでいる。グアテマラと同様にセイバはニカラグアの国樹である。マヤ人にとって過去から現在まで、世界の中心にそびえ立つ神聖な木であると考えられている。

## 2) 中米の征服者たち

現在のレオンからそれほど離れていない旧レオン（レオン・ビエホ）が建設されたのは、1524年である。1517年にマヤ文化圏のユカタン半島へ到達したスペイン人征服者のひとりであるフランシスコ・エルナンデス・デ・コルドバによって建設された。後の（1533年）インカ帝国征服者のフランシスコ・ピサロがニカラグア遠征の指揮を拒否したためである。1610年に旧レオンの近くにそびえ立っているモトモンボ（Momotombo）火山が噴火して甚大な被害をもたらした。更なる被害を恐れた住民が現在の場所に移転を決めた。1851年まで、200年以上の間、ニカラグアの首都として、軍事、文化、宗教の中心地として栄えた。

レオン・ビエホ創設時代に戻って、インディオの視点から見れば、ラス・カサスによると、「1523年から33年までの間に、その王国一帯を見る影もなく

荒廃させてしまった。.....そうして、私と同様自由な人たちであるにもかかわらず、インディオは奴隷とされ、生地から連れ去られ、その数は50万を超えていた。」事実、当時、およそ100万の先住民がニカラグア王国に暮らしていたとされるが、20年か30年の間にわずか数万人にまで激減してしまった。

ニカラグアの現首都であるマナグアから南東へ約45キロに位置する、古都グラナダがこの王国内で最初の都市として創設されたのが、1523年である。

しかし、初めて中米がヨーロッパに知られるようになったのは、コロンブスの第4回目、つまり、最終のアメリカ航海によるものである。

最終航海に参加したのはわずか140名で、それぞれ4隻に分乗し1502年5月、スペインのカディス港を出帆した。この第4次、すなわち、最後の航海は、2年半を要した。この航海に関してコロンブス自らが記したもので残っているものの中に、1503年7月7日、ジャマイカ島より国王に宛てて書いた書簡がある。船が座礁してこの島に、約1年間滞在していた。この書簡とコロンブスの庶子であるエルナンド・コロシ（コロシはコロンブスのスペイン語名）によると、中米へのカリブ海航海は次のようなものであった。1502年7月30日、陸地から12レグア離れたグアナハ島に着いた。同行していたコロンブスの弟、バルトロメ・コロシが2隻の小艇をもって、この島に上陸したところ、25名の原住民がのった大きなカヌーが、物資を満載して通過したので、バルトロメが彼らを捕らえて本船に連行した。普通、これがマヤ族とヨーロッパ人との最初の出会いとされている。8月14日、現在のホンジュラスにあるオレーハ海岸に上陸し、ここで100名の原住民とともにミサを捧げた。

1か月後の9月14日に現在のホンジュラス、ニカラグア両国の国境地点にあるグラシアス・デ・ディオス岬（神への感謝を意味する）に到着した。その後、ニカラグア沿岸を南下して9月25日には、現在のコスタリカのリモン港

に着いた。コロンブスはここに10月5日まで滞留した。その後、パナマを探検し、モスキートス港沿岸に足跡を残した。その間に2隻の船を失い、1503年4月、帰途につくが、かろうじて、ジャマイカに到達したところで船が座礁した。そこに、約1年間留まらざるをえなかったことは前述のとおりである。

### 3) レオン大聖堂およびそこで出会った人たち

セイバと思われる、南国らしい濃厚な緑の樹葉におおわれた大木によって陰を作っている中央公園には、カラフルな民族衣装に身をつつんだ女たちが土産ものを売っている。少年たちも負けじと声を張り上げて観光客に近づいていく。今まで訪れたどこの街でも見られた人の世に繰り返される平和でのどかな情景である。木陰のベンチで、近隣から来たらしいメスティソの人たちのさんざめく声がきこえてくる。ああ、そうか、今日は日曜日なのか。大聖堂で行われるミサを待っている家族づれや友だちなのであろう。そういえば、みんなオシャレをしている。ひと昔前のヨーロッパでは、日曜のミサには、だれでも着飾って来た。教会は、友人たちと出会ってうわさ話しに花を咲かせる人間臭い社交場でもあった。後で地元の人たちとお喋りでもしよう。

まずは、白く塗られた清新な美しさを誇る大聖堂に行ってみることにしよう。さきほどから、目の前でしきりと誘っているように思われた。世界遺産にも登録されている中米最大の規模を持つ大聖堂である。大聖堂の正門の前には、レオン（ライオンを意味する）という名前がついている都市を象徴する2頭の茶色のライオンが、大聖堂を警護するように置かれている。80段の階段を上ってルーフに出る。その途端、強烈な日差しを浴びて一瞬、ぐらっとする。まだ、午後には、だいたい時間があるというのに.....陽光がルーフのあちこちに突きささって、身を隠す陰がまるっきりない。下方にさきほどの中央公園

が見えた。噴水には、透明な水が流れていて、そこには、口を開けた4頭のライオンが座っている。樹木にオレンジ色の花をいっぱい咲かせているのも見えた。ルーフをぐるっと歩く。コロニアル様式の民家や教会が並んでいる。それらの屋根は赤っぽい茶色に統一されていて美しかった。建物のすぐ先には、繁茂した樹葉におおわれた林が見える。遠方には、淡いブルーの火山が優美な姿でいくつか並んでいる。ここが、レオンの中心部であることを示す品格が、すこんと突きぬけた青い空の下に漂っているのが感じとられた。支配される者たちの苦悩、恐怖、不安および支配する者たちの驕りという、互いの情念の相克がとうとうと流れる数百年の歴史の重みは、少なくとも、今、目の当たりにしているあまりにも明るいからっとした光景にはなかった。歴史の重みを感じるためには、レオン・ビエホに行くしかない。しかし、ここから、レオン・ビエホまでは、バスを乗り継いで片道で1時間半以上かかる。最終乗船時刻が3時半なので今回は、あきらめるしかない。レオン・ビエホ(旧レオン)には、先記の1524年に創設された都市の遺跡がある。レオンとグラナダを建設したフランシスコ・エルナンデスの遺体が発見された、スペイン人による入植地の歴史を知るうえで重要な遺跡である。住居跡や教会も発掘された。そのような建築的な重要性から、2000年には、世界遺産に登録された。

薄暗い階段を下りて大聖堂の入口に着いた。中に進もうとすると、そこに立っていたメスティソの若ものにさえぎられた。警備員らしく、今、ミサがとり行われているので入れないと言う。連れがそこにいるから入りたいと言っても駄目だという。大半がカトリック教徒であるというニカラグアの国らしく、この若ものも熱心な信者であるらしく思われた。たぶん、どんな時間でも構わずに、大勢押しかけてくる観光客に慣れているらしく、次々と訪れる人たちに同じことを言って大聖堂の中へ入れてくれない。彼の横にならんでこの町のスペイン人創設者について聞くと、友好的な態度でエルナンデスについて説明し

てくれる。メモをとりながら、彼の話しぶりからは、スペイン人征服者にたいする敵対的な気持ちが全然ないことにきづく。少なくとも、このレオンにおけるスペイン人による改宗は成功したのだな、と感慨深い思いがした。

若ものの屈託のない、善良そのものの表情からは、ニカラグア王国の消滅と、それに伴う原住民のアイデンティティーの消滅に対する何らかの痛みの痕跡は微塵も読みとれなかった。征服者たちが到着する以前のニカラグア王国の誕生以来、先祖代々がキリスト教徒であるというような自然な信者としてのふるまいに終始していた。

やっと、ミサが終わった。連れと大聖堂の中を見学している時に、思いもよらなかったものに出会った。19世紀のラテンアメリカおよびスペインの詩人たちに大きな影響を与えたニカラグアの詩人、ルベン・ダリオ（Rubén Darío-1867-1916年）がここの大聖堂に埋葬されていたのである。レオンが生地だったとは知らなかっただけに、彼のお墓を見いだした喜びは大きかった。スペイン留学中に読んだ作品集、「青（88年）」、「稀有なる人びと（96年）」などは、スペイン語圏の詩に象徴主義—モデルニスモ（近代主義）と呼ばれるものを導入した。近代派の中心として活躍し、チリの高名な詩人、パブロ・ネルーダ（Pablo Neruda - 1904 - 73年、71年にノーベル文学賞受賞）ら後の世代に多大な影響を与えた。ルベン・ダリオの詩は、音楽のようなりズミカルな言葉の響きが美しい。また、暗示的で、色彩ゆたかな隠喩の言葉にあふれていて多くの読者を魅了してきた。若い感性に訴える詩作品である。レオン市民にも敬愛されて、彼の育った家が博物館として保存されている。大聖堂がある中央公園の1ブロック先には、ルベン・ダリオの名前をつけた公園もある。そういえば、ルーフから見えたそれほど大きくはないが、鬱蒼とした濃い緑の葉をつけていた樹木に四方をぐるっと囲まれた公園が、ルベン・ダリオ公園であったと、今になって気づく。この公園には、「詩人たちの公園」というロマンティッ

クな別名もついている。

大聖堂の外に一步出れば、赤いまばゆい光に射られて、おもわず目を細めてしまう。大急ぎで中央公園のさきほどのびっしりと樹葉におおわれた大木の陰をさがす。そこのベンチには、肌の浅黒い女の子が行儀よく、少し緊張した面持ちで座っていた。真っ白な袖なし、裾長のエレガントなワンピースに身を包んでいる。こちらをちらっと見て、ほほえんでくれた。肌の色とワンピースの白がコントラストをつけて美しかった。メスティソの母親らしき女性がベンチの脇に立っている。娘は9歳になったばかりで、自分が40歳の時にはじめて授かったひとりっ子だという。少女を見つめる眼が、目にいれても痛くないと言う感じを表している。こんなにおしゃれをしているのは、大聖堂でこれから初聖体をいただくからだ、少女のほうにやさしくほほえむ。このワンピースも今日という大切な日のために、ずっと前から心をこめて縫ってきたらしい。

カトリック教徒にとっては、6歳から9歳ぐらいまでの子供たちが教会で行うミサである、初聖体の拝領はとても重要である。キリスト教の世界では、イエス様の肉と血はパンとワインに聖変化(化体という)したと考えられている。初聖体とは、はじめてイエス様の御からだ(パン)をいただくことを意味する。その時、イエス様を受け入れる約束をするのである。「パドレ(神父)がたずねることにちゃんと答えられるね」と娘に念をおす。こくんとうなずいて下を向く少女が緊張している訳が分かった。世界中でおなじようなやり方で初聖体のミサが進められるのであろう。

神父様が集まった保護者、子どもたちにこうお話しをする。「皆さん、これから初聖体を行う子どもたちが前に進みでて、洗礼の恵みを大切にして、聖体をいただく決意を自分で表明し、わたしたちと一緒に信仰を宣言します。」名前を呼ばれた子どもたちは、「はい」と返事をし、前に進み出て、祭壇の方を向いて並ぶ。それらの子どもたちに、神父様がこう述べられる、「今日、初

聖体を受ける皆さんは、生まれてまもなく洗礼を授けていただき、神さまの子どもになりました。これから火が灯されたらろうそくが皆さんに渡されます。このろうそくは、皆さんが洗礼を受けたことのしるしです。」保護者から渡されたらろうそくを手にした子どもたちに、神父様がこう続ける、「皆さんは、お父さんやお母さん、教会の多くの方々に見守られ、神さまのことを知り、お祈りができるようになりました。そして、今日、イエス様の御からだをはじめいただきます。洗礼の時にはお父さん、お母さん、代父母の方々が、皆さんを神さまの子どもとして、大切に育てますと約束してくださいました。今日は、自分の言葉で約束いたしましょう。」

神父様と子どもたちの次ぎのやりとりがミサの中でも重要である。

「皆さんは、神さまを大切にしますか？」「はい、たいせつにします」

「皆さんは、ミサを大切にしますか？」「はい、たいせつにします」

「皆さんは、イエス様のように、家族やまわりのお友達を大切にしますか？」  
「はい、たいせつにします。」

初聖体の子どもたちが「きょう はじめて ご聖体を いただいて、イエスさまをおむかえするわたしたちが、神さまによろこばれる よい子になれますように」と、共同祈願する。その後、子どもたちは、手に持っているろうそくを神父さまに渡し自席に戻る。「5つのパンと2匹のさかな」の奉納の歌がすむと、今日のクライマックスである聖体拝領の儀に移る。神父さまのイエスさまを迎える（御聖体をいただく）前にいっしょに祈りましょうという言葉に、子どもたちが「いのちのパンであるイエスさま。わたしたちのもとに来てください。いつも、わたしたちといっしょにいてください。わたしたちが、神さまによろこばれる子どもになれますように」と元気よく声をそろえて祈る。

前述のニカラグアの少女の瞳が、おとなになっても深いみずうみのように澄んで無垢のままであってほしいと思う。あんなにお母さんに慈しまれて育てて

もらっているのだから、きっと大丈夫だろう。少女は、今日の晴れやかな、初聖体をいただくミサで神さまにした約束とお祈りを一生忘れないであろう。やがて、純朴でやさしい青年と神さまの前で再び約束をする望みに充ちた日も訪れるだろう。

短かい見学だったが、長いニカラグアの歴史を振り返ってみることでできた充実した1日であった。

さあ、船に戻らなくては、と焦った気持ちになる。ある詩人の言葉が浮かぶ、「まさにわれわれが安心して切っているとき、落日が訪れる、……」

午後4時に、船は、つぎの寄港地、コスタリカ (Costa Rica) のプンタレナス (Puntarenas) 港に向けて出航した。

(6) 第6日目、カラーラ国立公園、コスタリカ、2月4日 (月)

1) プンタレナス (Puntarenas) 港からカラーラ国立公園 (Parque Nacional Carara) へ

薄いバラ色に染まった山々と明けきらずに霧がかかっている薄い青い空気の中に飛行している海鳥を左舷に眺めて、船は碧い海面をすべるように港を目指している。8時にプンタレナス港に着いた時には、雲ひとつなく空が青々と透きとおってひろがり、天にまで届きそうな高さであった。ビーチが目の前に限りなく長く伸びている美しい港であった。浜辺のすぐ後ろには、ヤシの木々が白砂に沿って長く植えられている。海水浴客たちが木陰でもう寝そべっている。こんなに早い時間なのに、海に入って遊んだり、泳いだりしているひとた

ちでにぎわっている。ここからでも彼らの楽しそうなおしゃべりが聞こえそうである。どこのリゾートビーチでも、くりかえし眺められる夏のひとときの光景である。なおさら、中米のように、一年中熱帯の気候なら、毎日、飽きることなく観賞できるいっぶくの絵になる風景である。しかし、ふと、臉に映ったのは、南太平洋にある、タヒチの色鮮やかな森林にいる裸体の女たちである。浅黒い肌をした長い黒髪に花を挿している。こちらをきっと見つめている女たちをゴーガンが絵をとおして「生命賛歌」を歌い上げた。その映像は、数百年前のこの海辺に群がっていたであろう裸の女たちの原始的な生命力をも容易に喚起させてくれた。

コスタリカの最初のスペイン人の入植地は、ここ、現在、港町として、また、太平洋に面した海水浴場として人気の高いプンタレナスである。入植当時は、ブルセラスと名づけられていた。しかし、ブルセラスは植民地としてそれほど発展することはなかった。詳しいことは、後（「3」コスタリカのスペイン人による征服の歴史）で述べることにして、今は、バスに乗ってカララ国立公園に行くことにしよう。1日は、短い、先を急ごう。不意に午後の光が降りがそそぐ前に。

港から目的地まで50キロの距離の沿道には、他の中米諸国とおなじように豊かな果樹園が伸びている。パイナップル、メロン、スイカ、カシューナッツ、マンゴー、バナナ、カカオの実などである。マンゴーは年に3回採れるし、バナナは、1本の木から100キロも収穫できるバナナ産業として発展している。果樹園の後では、コーヒーの低木が植えられた林のすぐ傍をバスは通っていく。コスタリカのコーヒーもおいしい。このように自然の果物に恵まれた楽園の土地で、スペイン人が来る前は、大勢の原住民たちが幸せに暮らしていたのだなあと窓外を眺めながらふと考えてしまったのは、私ぐらいかもしれない。今回の旅の出発前に本を読み過ぎてしまった……くねくねした川には、

じっと動かないアメリカワニの姿も見られた。ああ、熱帯地方にいるんだなあ  
と感動すら覚えた。初めての異国を旅していると、美と感動と驚きが一瞬一瞬  
に襲ってくる。1時間半のバスの旅はあっという間に終わってしまった。まだ、  
自然観察は始まったばかりだ。よかった。これからカララ国立公園でのバー  
ドウオッチングとタルコレス川でのボートクルーズがある。その前に、それ以  
外にはどんな国立公園があるのだろうか。

コスタリカには、地図で見ると、13の国立公園、および野生の生物、動植  
物を保護する幾つかの野生保護区、自然保護区などがある。国全体がこれら熱  
帯地方のみに生息する動植物の宝庫であるということが分かる。

ある火山国立公園には、数十種類のハチドリ、極彩色のカエルが生息し、  
コーヒー畑、牧草地が広がっている。また、古代マヤの聖鳥でグアテマラの国  
鳥であるケツァール（カザリキバネドリ）が観察しやすい雲霧林として人気を  
集めている国立公園もある。そこの山中の傾斜地には、ケツァールの餌となる  
リトルアボカド（アグアカティージョ）の木が多い。

また、アリバダと呼ばれるヒメウミガメ大産卵で有名なビーチがある自然保  
護区がある。また、ヤシの木々にふちどられた真っ白なビーチが4つもある或  
る国立公園内の熱帯雨林には、イグアナ、ナマケモノ、サル、色鮮やかな野鳥  
がいる。その他の国立公園、野生、自然保護区には、ノドジロオマキザル、お  
よびオセロット、ジャガー、バグ、オオアリクイなどの大型哺乳類が生息し、  
絶滅の危機に瀕しているオオギワシもいる。

何百種という鳥類もいれば、また、世界で最も美しいトカゲと言われている  
グリーンバシリスク、ケイマンなどの爬虫類もいる野生保護区もある。

カリブ海沿岸の北部に広がる国立公園は、道のないジャングル地帯である。  
約80キロにわたって海沿いに走る運河と周辺の熱帯雨林は、さまざまな野生  
動物の楽園になっている。水鳥やワニ、サル、ナマケモノ、トゥカン、ジャ

ガー、バクが生息している。ウミガメのいる場所という名前がついているこのトルトゥゲーロ国立公園内の浜辺には、カリブ海一帯からウミガメが産卵にやってくる。ウミガメは大切に保護されている。

中米最大の乾燥地帯にある国立公園は、「緑の奇跡」と呼ばれる現象でよく知られている。5月中旬頃の雨季が始まると、冬枯れの森がわずか1週間で完全に緑に包まれるのである。乾期には、3種類のサル、ベッカリー、シカ、多くの野鳥が見られる。

ここまで見てきたように、コスタリカ国内のあらゆる場所で自然と生命の神秘が野生動植物をとおしてじかに感じられるのである。

## 2) カラーラ国立公園 (Parque Nacional Carara)

やっと、カラーラ国立公園の入口に着いた。太平洋に面していて、そこに流れこむタルコレス川の下流の流域に位置している、動植物層の豊かな密林地帯が広がる公園である。カラーラとは、先住民の言葉でワニの川を意味する。ちなみに、コスタリカの民族構成は、先住民はわずか2%にもみたくない。95%がスペイン系と先住民とのメスティソであり、アフリカ系が3%である。カトリックが国教であり、85%をしめていることからスペインによる征服、植民化、改宗化がスペイン側から見れば成功したのであろう。その経過は、後でたどることにして.....

国立公園の入口でイグアナが迎えてくれた。実におとなしくて逃げようともせずじっとしている。かわいらしいとさえ思えてくる食用になる生きものである。オオトカゲとも訳される。コロンブスは、第1回目の航海で初めて目にして蛇の一種と思った。

たどっていく小径の両側から、背の高い樹木の枝が絡み合っこちらに伸び

ているので強い陽光がささずに涼しい。草叢には、熱帯の色鮮やかなピンクや赤の花が咲いているとおもへば、清楚な白い花も時々見られる。この散策の最大の目的は、絶滅危惧種であるコンゴウインコを観察することである。地元のガイドが先頭にたって捜してくれるので頼もしい。

小径のところどころに英語とスペイン語でこの国立公園を簡単に説明してくれる案内板が立てられている。たとえば、「あなたが辿る森林は特別である。コスタリの典型的な北太平洋の乾燥林と南太平洋の湿潤な熱帯雨林を併せ持っているので、両方の生態系に属する多種多様な動植物が生息している。」また、他のものには、上半分に極彩色の動植物の絵が描かれている。シカ、ヘビ、チョウ、イグアナ、ワニ、爬虫類、ジャガー、熱帯植物など、「最上の2つの世界を有するカラーラでは、コスタリカに生息する動植物の半分の種類が見られる。この温度と湿度が乾燥林と緑豊かな熱帯雨林を生み出している。カラーラは、乾期でも常に緑の樹木が保たれている」の説明とともに……しかし、つぎの案内板で警告するまでもなく、森林の奥深くへいかなければそれらの動物は観察できない。公園の近くまで来る車の音、散策者の話し声、足音が動物を小径に近づかせないのである。

天に着くかとおもわれるぐらい高く、幹の太い木は、案内板によると、「カシューノキ (*Anacardium excelsum*) とよばれ、熱帯乾燥林の典型的な樹木で川の流域に植生する。高さ 50 メートル、直径 3 メートルにもなる。

種は非常に毒性が強い。果実を常食とするコウモリは、厚い果肉の部分だけを食べて、その他の部分は、芽の出やすいような最良の場所に落していく。

先頭にいたガイドが足を止めて、小径から少し離れたところにある高い木の上の部分を指さしている。太い幹には、穴があいていて、そこからちらっと赤い尾が見えた。コンゴウインコだ。やっと、見つけることができたのだ。

ちょうど近くには、こんな説明の案内板が立っていた、「12月から4月にかけて、雑木林の木々の頂き近くのうろにコンゴウインコ (*Lapas*) が巣を作る。

以前は、赤いコンゴウインコがたくさんいたが、現在は、減少している。ここは、かれらを自由にさせて保護している国立公園のひとつである。地域の住民たちが、人工的および自然に作られた巣の世話をして個体数を増やそうとしている。コンゴウインコは美しいだけではなく、賢く、寿命の長い生きものである。」

つがいのコンゴウインコがうろから出たり入ったりしている姿は美しかった。頭の部分に白とお腹の部分に青が入っているので、全身をおおっている赤が鮮やかに見えた。

ここから近いタルコレス川に歩いて向かう。ボートでゆっくり約1時間、兩岸の野鳥、水鳥を観察していく。トラフサギ、シラサギなどのサギ類が、川の水面に突きだした枯れ枝に絵になる格好でおもいおもいに休んでいる。ピンク色のサギが美しい。流域には、広々と色濃い緑の鬱蒼とした森林が広がっている。先ほど散策したカラーラであろうか。水辺近くの密生したマングローブの林には、カワセミ、ツバメ、マイコドリなどの色鮮やかな野鳥が見られる。遠くの方で、つがいであろうか、2匹のアメリカワニの背中が寄り添って水面のきらきらと白く光っているさざ波の間に見える。どんな魚が獲れるのだろうか。膝まで水につかって長い竿をたれている男の傍をボートがゆっくりと通りすぎていく。川面よりもっと碧い透きとおった突き抜けるように高い空には、さきほどからしきりと野鳥が飛び交っている。さあ、そろそろタルコレス川ともお別れだ。ふだん、そうたやすくは見られないものたち、風景に出会えた貴重な時間は、あっという間に経ってしまった。実に楽しい散策だった。

### 3) スペイン人による征服と植民地化

先記したように、コロンブスは第4回目の航海でコスタリカのリモン港と推

定されるカリブ海に面した地域に 1502 年 9 月 25 日から 10 月 5 日まで滞留していた。

1514 年以降、ゴベルナドール（ペドラリアス・ダビラ総督）、アロンソ・デオヘーダなど、大勢のスペイン人征服者たちが、ティエラ・フィルメ（現在のパナマ、コスタリカ、コロンビアの北部海岸を指す）にやって来た。始めは、コスタリカのプンタレナスのような海岸地方を襲撃したが、やがて、ラス・カサスによると、広大無辺な内陸部とそこにあつたいくつもの王国を征服していった。地表には莫大な量の金が露出していたからである。或る隊長に同行したフランシスコ会所属のフランシスコ・デ・サン・ロマンという修道士が、スペイン人によって行われた惨劇を目の当たりにしたこともあつた。

彼らスペイン人は、植民や改宗より金を略奪することに心を奪われていたので、1514 年から 1533 年までの間に海岸地方、内陸部の王国をすっかり荒廃させてしまった。植民のための開拓が始まったのは、1534 年以降である。

コスタリカに本格的な植民が開始されるのは、フアン・バスケス・デ・コロナドが、この地の統治者になってからである。彼は 17 歳ですでに、メキシコ、グアテマラ、エルサルバドル、ニカラグア、ホンジュラスへのスペイン人による遠征隊に加わっている。後に、それらの中米の国々で、アルカルデマヨール（Alcalde mayor—司法官であるとともに、地方自治体に対する王権の代表者としての権限を有していた）にまでなっている。コスタリカでは、1564 年に、創設 30 年の歴史を持つカルタゴを植民の中心地を選んだ。周りを山々に囲まれて、すごしやすいこの町は、現在の首都サン・ホセからも近い。1823 年にサン・ホセに代わるまで約 250 年にわたり首都であった。今は、国内第 3 の都市である。

フアン・バスケスは、豊かな植民地を夢みて、イベリア半島（現スペイン、ポルトガル）のカスティーリャ、アンダルシアなどの地方からコスタリカの中

央高原に多くのスペイン人を入植させた。同時に、馬、牛、豚を持ち込み、新大陸において初めての農場を開いた。他の暴虐なふるまいを行ってきた征服者たちに比べて、フアン・バスケスは人間的な心情を備えていた。しかも、先住民たちの王たちと交渉したり、協定を結ぶことにも長けていた。その才能を認められて1565年には、コスタリカの終身総督になり、ニカラグアの総督も兼ねた。

フェリペ2世（スペインの黄金時代の1556 - 98、スペイン本国、新大陸植民地、シチリア、ナポリ、ネーデルランドなどを相続、ポルトガル王も兼ねた）に召還されたフアン・バスケスが、いつかスペインに帰国して、コスタリカに帰る途中で船が遭難して、1565年に死亡した。彼の称号である前線総督、アデランタード（Adelantado- レコンキスタや新大陸征服の過程で任命される称号）は、長男に受け継がれた。

今回、行けなかったが、中米諸国によく知られている奇跡の聖母伝説で有名なロス・アンヘレスのバシリカ（La Basílica de Nuestra Señora de los Ángeles）が、カルタゴにある。コスタリカの守護聖母である黒いマリア「ラ・ネグリータ・デ・ロス・アンヘレス—La Negrita de los Ángeles」が祀ってある。前述の植民地時代には、カルタゴはスペイン人の入植者にとって主要な都市であった。その周囲には先住民が住んでいるたくさんの村々があった。当時のスペインの法律によって、ムラート（白人と黒人の混血）および黒人は町の東に離れ離れになって住み、スペイン人の居住している地域には、入ることが禁じられていた。

1635年8月2日、その黒人街に住んでいた或る貧しい少女が森の中で薪を拾っていた時、偶然、泉の脇にあった岩の上に黒い小さな聖母マリア像を見つけた。その後、いろいろ不思議な現象がマリア像に起こり、教会の司祭が発見場所に教会を建てて安置することになった。その場所には、今、再建されたビ

ザンチン様式のバシリカが建てられている。マリア像は、黒っぽい肌をしているのでラ・ネグリータと呼ばれている。20センチぐらいの高さでムラートの特徴を備えている。現在、毎年7月中旬過ぎから8月2日まで中米各地からおよそ、80万人の巡礼者が訪れている。バシリカの近くに湧き出る泉が、病を癒してくれると信じて、巡礼者がボトルでその水を持っていく。実際に回復した人たちが感謝をこめて、癒された手足、心臓、肺などの臓器を銀でかたどったものが、地下礼拝堂に奉納されている。

すでに見てきたように、メキシコのグアダルーベの聖母をはじめとして、中南米には奇跡の聖母伝説が多い。それによって、メスティソやムラートたちのカトリック信仰が強固になったのは、否めない。現在では、彼らの精神的支柱のひとつにまでなっている。

タルコレス川のポートクルージングが終わって、近くのレストランに歩いて行った。周りを木々に囲まれたオープンレストランである。思いもよらず、1本の木の葉が濃くしげったところにコンゴウインコがばたばたと羽を揺らしていた。こんなに近くから見るとは、運がよかった。給仕をしてきていた若い女の子もやって来て、先ほどの案内板に書かれていたように、コンゴウインコの数が激減している状況を顔をくもらせて話してくれた。年々、ここを訪れる車、大型バス、旅行客の増加が野生の動植物に与える悪影響は、計り知れないという。このレストランでアルバイトをしながらカラーラの野鳥の研究をしている女子大生のスペイン語は、ラテンアメリカ特有のアクセントがなく美しかった。何世代前かのスペイン人の祖先を持つメスティソで、スペイン女性の特徴を備えた瞳が大きく面立ちがはっきりしている。

動植物の絶滅危機は、カラーラだけではない。IPBES—イプベス（名古屋で開催された国連会議「2010年」、動植物や生態系を保全する「愛知目標」が採択され設立）の報告によると、すでに、ここ数十年で680種の脊椎動物が絶滅

し、85%の湿地帯が消失した。原因は人口増加、破壊、汚染などによる。保全の取り組みが進まないと、数十年間で100万種の動植物が絶滅するという。特に、中南米諸国では、森林の伐採による破壊が激しい。それに伴って、当然、森林に生息している動植物が絶滅していく。エクアドル西方の太平洋上にある、同国領のガラパゴス諸島（正称は、コロン諸島、1535年スペイン人が初めて探検し、この地に生息する巨大な亀を報告）には、ダーウィンが進化論の着想を得たという珍しい生物が、多数生息している。現在では、それらの生物の絶滅が危機にみまわれていると、イプベスは報告している。

#### 4) パナマ運河へ向けて出港

船は、夕方6時頃、パナマ運河に向けて出港した。青い空と海につつまれたどこまでも底抜けに明るい大気からだんだんと薄闇が漂ってくる。この夕暮れ時の光の変化のはざまがなんとも言えずに美しい。たしか、よく、自然を観察していた画家、レオナルド・ダ・ヴィンチは「美は無限に変化するもののなかにある、もっとも美しいものは、変化の途中の一瞬、変化のはざまにある」という基本的な原理を見いだした。つまり、時間でいえば、昼の光から夜の闇、夜の闇からしののめの光へと変化していく時間のはざまである。そして、ダ・ヴィンチは、無限に変化するものを描くために、明暗や色の調子とその変化によって形を表すほかし技法を発達させた。自然界には存在しない輪郭線によって形をはっきりと区切るのではないスフマート技法である。デッキから夜明けと薄闇の光の一瞬一瞬の連続した変化を見つめてきた。また、遠く青く霞んでいる島々、山々、町や港などの輪郭が、大気の中に溶けこんでいる幻想的な様子をたびたび眺めてきた。ダ・ヴィンチの理論には深く共鳴している。(つづく)

## 参考文献

- インディアスの破壊についての簡潔な報告。ラス・カサス。染田秀藤訳。岩波書店。東京。2017年。
- インカの反乱。被征服者の声。ティトウ・クシ・ユパンギ述。染田秀藤訳。岩波書店。東京。1997年。
- 黄金郷(エルドラド)伝説。山田篤美。中公新書。東京。2008年。
- コロンブス、全航海の報告。林屋永吉。岩波文庫。東京。2011年。
- コロンブス、大航海時代の起業家。青木康征。中公新書。東京。1989年。
- マヤ文明、密林に栄えた石器文化。青山和夫。岩波新書。東京。2012年。
- 物語、スペインの歴史、海洋帝国の黄金時代。岩根隼和。中公新書。東京。2002年。
- ドン・キホーテ。セルバンテス。牛島信明訳。岩波文庫。東京。2007年。
- 百年の孤独。G・ガルシア・マルケス。鼓直訳。新潮社。東京。2019年。
- ラテンアメリカを知る事典。平凡社。東京。1987年。
- グレートジャーニー、人類5万キロの旅。関野吉晴。角川文庫。東京。2010年。
- 夜と霧。ヴィクトール・E・フランクル。池田香代子訳。みすず書房。東京。2002年。
- 誰も知らない「名画の見方」。高階秀樹。小学館。東京。2010年。
- 地球の歩き方、中米。2018 - 19。ダイヤモンド・ビッグ社。東京。2017年。
- Brevísima relación de la destrucción de las Indias. Bartolomé de las Casas. SARPE. Madrid, España. 1985.
- Cartas de la conquista de México. Hernán Cortés. SARPE. Madrid, España. 1985.
- Cristóbal Colón. Su vida y descubrimiento a la luz de sus profecías. Kay Brigham. TERRASSA. Barcelona, España. 1990.
- De Cristóbal Colón a Fidel Castro (I). Juan Bosch. SARPE. Madrid, España. 1985.
- De Cristóbal Colón a Fidel Castro (II). Juan Bosch. SARPE. Madrid, España. 1985.
- Cien años de soledad. Gabriel García Márquez. Editorial Sudamericana SA. Buenos Aires, Argentina. 1967.
- El Libertador. Augusto Mijares. Academia Nacional de la Historia. Caracas, Venezuela. 1987.

BARTOLOMÉ DE LAS CASAS (GUATEMALA)

ラス・カサスの像



NATIVA DE NICARAGUA

ニカラグアの少女



TUMBA DE RUBÉN DARÍO (NICARAGUA) ルベン・ダリオの墓

**2. EN EL CAMINO DE LA VERDADERA IDENTIDAD CRISTIANA. (I)**

(Ensayo sobre creencias y valores cristianos)

Por Bernardo Villasanz.

*Me encuentro en tierra extranjera todavía,  
mas presiento la futura, eterna dicha.*

*Quisiera dejar la tierra para contemplar de  
cerca las maravillas del cielo.*

*Soñando en aquella vida, no siento de mi destierro  
ni el peso ni la medida. Pronto volaré, Dios mío,  
hacia mi única patria, ¡volaré por vez primera!*

*(“Lo que pronto veré por vez primera” Teresa de Lisieux)*

**RESUMEN**

*En esta primera parte (“La búsqueda de la verdadera identidad en la fe cristiana”) nos referimos al paradigma de la postmodernidad caracterizado por la creencia en el predominio de la razón sobre cualquier forma de conocimiento que se base en la existencia de las verdades reveladas.*

*A pesar del doloroso reconocimiento de la actual apostasía y el consiguiente alejamiento de la Palabra revelada, cualquiera puede precisamente desde su misma razón y su conciencia, captar e intuir la ley divina inscrita por Dios en su corazón que nos impulsa a un “nacer de nuevo”. Símbolo de esto es la parábola de Jesús del regreso del hijo pródigo, un viaje de peregrinación espiritual que expresa ese verdadero renacimiento.*

## INTRODUCCIÓN: OBJETO DEL PRESENTE ENSAYO

“EN EL CAMINO” se utiliza aquí de forma alegórica para expresar la similitud entre el viaje a un lugar sagrado y el camino de la vida humana. Este significado alegórico de la peregrinación lo encontramos en la mayoría de las creencias religiosas como camino de perfección y metáfora de la vida. Específicamente desde una hermenéutica cristiana el camino ya se nos ha revelado plenamente en Jesucristo pues no somos inventores del camino del paraíso sino descubridores y posteriormente conquistadores del reino cuando nos abrimos a la gracia. El Cielo es para todos conquista. Somos viadores, errantes que buscamos afanosamente pontear el abismo abierto entre la voluntad humana y la divina.

El alma tiene necesidad de ir a su origen y regresar a su principio de donde salió, y obrar según el fin para el cual ha sido creada: uniformarse a su Creador. El lugar donde ella mora es siempre sereno porque su origen está en el Cielo, su nobleza es divina y su santidad está en Dios.

No se trata de un camino sincrético cayendo en un “pluralismo de creencias” (*sincretismo*) o en un “relativismo” en el que todas las opiniones religiosas sean verdaderas aunque en realidad sus principios sean contrapuestos. Existen las llamadas “verdades” que son incompatibles entre sí cuando muestran argumentos opuestos dado que “no pueden existir dos afirmaciones contradictorias y ser ambas verdaderas”. Un ejemplo típico de esto es la de creer simultáneamente en la resurrección y en la reencarnación.

En realidad todos los caminos convergen en un punto y ese uno es Jesús, la Luz. Nuestro camino es un camino virgen, sin huellas que intenta buscar a Dios en lo desconocido pues todos tenemos un camino único para

nosotros. En hebreo la palabra “camino” se utiliza para designar un estilo de vida o una norma de conducta para servir a Dios siguiendo el Camino trazado por Jesús. En los Hechos se nos relata que un judío llamado Apolos llegó a Éfeso y conocía muy bien las Escrituras y estaba instruido en el camino del Señor aunque solo conocía el bautismo de Juan, su discurso fue oído por Priscila y Aquila que fueron los que se embarcaron con Pablo por la región de Siria y le explicaron el camino de Dios. (1)

En el camino de la vida del cristiano y en toda la vida litúrgica de la Iglesia los sacramentos de la nueva Ley fueron instituidos por Jesucristo que son fuerzas que brotan de su Cuerpo como acciones del Espíritu Santo y que jalonan la senda a recorrer. La identidad cristiana es la creencia en la fe transmitida por la Iglesia católica porque la fe de la Iglesia es anterior a la fe del fiel. Los sacramentos desarrollan durante nuestra vida la comunión de fe en la iglesia mediante la ley de la oración (*lex orandi*).

“DE LA VERDADERA IDENTIDAD CRISTIANA” se refiere a la creencia en identificar a Jesús de Nazaret como el Cristo ya que está fundamentado en su propia declaración como Mesías: *¿Eres tú el Mesías, el Hijo de Dios bendito? – Jesús le dijo: Sí, Yo soy.*” (2)

Por su parte a la pregunta concreta que Jesús dirige a sus discípulos sobre su identidad, Pedro reconoce que Jesús es el Mesías. (*San Mateo 16:15-16*) El término hebreo original se traduce en griego por *christos* («ungido»). Para los cristianos, la esperanza del reino incluye la fe en Cristo como el salvador ya que Cristo ha venido en humildad y sufrimiento dándonos una anticipación del reino.

Así pues, los cristianos tienen solamente un maestro, Cristo (cuya identidad es la de ser verdadero Dios y verdadero Hombre) y durante toda

la vida serán discípulos exclusivamente suyos a pesar de las diferentes interpretaciones que han sido dadas a la Palabra revelada, ya que no se puede pedir obviamente a Dios que reniegue de su misma identidad para acoplarse a las conveniencias humanas.<sup>(3)</sup>

María, por su parte, es el modelo a seguir de la que medita la palabra de Dios y actúa de acuerdo con ella. Los discípulos cristianos se convierten en familia de Dios no por nacimiento, ni por pertenecer a determinadas denominaciones religiosas sino por oír la palabra de Dios y actuar conforme a ella. Actualmente el símbolo de la fe cristiana (el Credo de Nicea-Constantinopla) es el signo de identificación y comunión de los creyentes. Es en los escritos de Ignacio de Antioquia donde aparece por primera vez el término «*cristianismo*» y también se aplica el calificativo de «*católica*» a la Iglesia. Ignacio alienta a los filadelfios para frecuentar la Eucaristía subrayando ese sentido de unidad entre los cristianos.<sup>(4)</sup>

Identidad cristiana quiere decir el alma humana injertada trinitariamente mediante la Gracia santificante, que es el mayor don sublime que Dios nos puede dar. Este injerto de la Gracia es trinitario porque supone poseer al Padre, al Hijo y al Espíritu Santo con sus siete dones. La Gracia deífica al alma dando distintos frutos según esté más o menos viva en nuestro corazón. La Unidad y Trinidad de Dios es un misterio que nadie que sea mortal puede comprenderlo en su esencia aunque haya sido revelado en parte a algunos santos.

Como “ENSAYO” el escrito en el cual el autor desarrolla sus ideas no pretende mostrar un aparato erudito, sino más bien intenta interpretar textos sagrados y revelaciones cristianas a la luz de una limitada intuición racional, consistiendo en incorporar juicios y reflexiones íntimas o personales,

insertándolas fragmentariamente en el discurso de la Revelación según distintas revelaciones privadas. Se hace necesario enfatizar, precisamente, el carácter libre e incluso general del ensayista en el tratamiento de un tema tan sobrenatural como el que le ocupa.

La fe cristiana acepta la Revelación de la que Cristo es la plenitud. No obstante esto dicha revelación no está explicitada por lo que este ensayo supone un intento de comprender gradualmente algo de su contenido para ayudar a vivir más plenamente la Revelación definitiva de Cristo. Hay que bendecir a los que nos descubren puntos difíciles de comprender y palabras que nuestro limitado entendimiento no conoce. Jesús eligió no a los doctos henchidos de orgullo sino a los humildes apóstoles. No podemos negar la apostolicidad de la Iglesia a los “apóstoles menores” que con su amor y fidelidad a la Verdad nos inspiran con sus escritos. (5)

El autor obviamente al hablar desde su fe caerá en la parcialidad ya que todos somos subjetivos, condicionados por influencias sociales y culturales, nuestro origen, educación, nuestras experiencias que nos vinculan son determinantes en las afirmaciones que sostenemos como principios. Partimos de un posicionamiento, de estereotipos, de un cierto clima de opinión contemporáneo y por tanto de opiniones previas.

Pese a tomar conciencia de esta parcialidad y de las contradicciones entre la teoría y la práctica en la historia del cristianismo ciertamente seguimos intuiciones para la investigación de la verdad y el hecho de no alcanzar el objetivo en el intento no quiere decir que consideremos inútil la intuición originaria. Hay que tener en cuenta que frecuentemente discurrimos siguiendo los impulsos de viejas costumbres y pensamientos estereotipados enraizados en el amor propio.

Ciertamente no podemos fingir objetividades imposibles ante una cuestión tan subjetiva como es el escribir desde lo que consideramos un ACTO de fe. Nuestra vida no está exenta de valores por lo que tal vez lo más objetivo es declarar la posición de la que se intenta partir. Pero podemos decir que cualquier investigador sea del campo científico que sea si cree firmemente hallarse en la verdad objetiva, su fe científica le justifica porque desde la sinceridad de su investigación obra el bien para conseguir el Bien y no hay duda que recibirá un día el premio de su rectitud y honradez.

No obstante estas humanas limitaciones y aceptando que en el ser humano no arraiga fácilmente la verdad y el testimonio no suele ser veraz y duradero, nos gustaría estar entre aquellos que perseveraron dando testimonio hasta el final de que Jesús es el Mesías, Hijo verdadero de Dios verdadero. En realidad Jesús no necesita que otros den testimonio pues sus obras dan suficientemente testimonio de su identidad trinitaria.

“SOBRE CREENCIAS Y VALORES CRISTIANOS” se refiere al ACTO de fe en Cristo y su Esposa la Iglesia católica entendida no como *denominación* de un título distintivo para diferenciarla de otras sino como *universalidad* del mensaje de la doctrina cristiana. Esta catolicidad, es decir, esta universalidad de la iglesia de Cristo es sacramento de salvación para los que estando en gracia de Dios forman parte suya custodiando los tesoros del Verbo divino. Es la única legítima intérprete de las verdades reveladas por transmisión genuina apostólica ya que es totalmente incoherente que la doctrina de Jesucristo tenga pluralidad de interpretaciones unas contrarias a otras. Y todo esto a pesar de las imperfecciones de los miembros que la componen y de los ataques de que ha sido, es y será objeto.

Actualmente hay valores cristianos divergentes pues existen hermanos

cristianos que creen en Cristo imperfectamente ya que están separados formando denominaciones cristianas que son como miembros amputados de la Iglesia Madre. Son como hijos pródigos, separados por voluntad propia de la casa paterna. No obstante esto, creemos que aunque alguno sea de la iglesia cismática o separada si cree firmemente hallarse en la verdadera fe, su fe le justificará y recibirá un día el premio de acuerdo a ella. (6)

## PRÓLOGO

Si bien gran parte de la humanidad ha quedado hechizada por los avances vertiginosos de la técnica desde la computadora hasta las innovaciones más sofisticadas de la ciencia, está tendiendo peligrosamente hacia la afirmación de la autosuficiencia, desalojando el campo de la fe para instalar la razón como único recurso mediante un racionalismo exacerbado.

De esta manera la sociedad, empapada de materialismo y ateísmo práctico, se siente incapaz de abrirse a la trascendencia, no tiene tiempo para escuchar la voz de Dios que habla desde lo más profundo del corazón; tampoco tiene tiempo para buscar la Luz. Parece que su paraíso terreno es el único objetivo de su vida; prefiere entusiasmarse por los mitos y las doctrinas llamativas y va siendo totalmente ajeno al rostro del verdadero Dios.

La vertiente negativa de una razón incrédula es el racionalismo que osa endiosar a la razón humana. La apostasía resultante suele describirse formando parte de ese proceso de secularización de la vida social como elemento central del proceso de modernización. Este proceso de secularización ha generado con el énfasis en la ciencia (prejuicio en creer

que la creencia religiosa es irracional y no científica) un rechazo de la religión hasta tal punto que hay jóvenes en los que la religión o cualquier tipo de creencia religiosa nunca ha formado parte de su conciencia. Las creencias religiosas se sitúan así en el ámbito de la intimidad sin ningún tipo de intersubjetividad ni relación social: *“El Espíritu dice claramente que en los últimos tiempos algunos apostatarán de la fe entregándose a espíritus engañosos y a doctrinas diabólicas, por la hipocresía de embaucadores que tienen marcada a fuego su propia conciencia;...”* (1 Timoteo 4, 1-2)

Lo que parece promoverse en la llamada postmodernidad es tanto un *individualismo* (que no la *individualidad*) como un eclecticismo absolutos: la sociedad de consumo y los llamados valores culturales globalizantes. El individualismo es una reacción contra el colectivismo aunque el individuo siempre esté inmerso en relaciones sociales.

La cultura individualista aprecia la autonomía, la autoexploración asumiendo en el mejor de los casos una responsabilidad personal y puede deslizarse peligrosamente hacia un subjetivismo. Así muchas personas siguen creyendo en Dios, o en alguna realidad sobrenatural sin comprometerse con ninguna práctica religiosa formal.

El individualismo caracterizado por la tendencia a pensar con independencia de los demás sin estar sujeto a normas generales no enfatiza necesariamente la individualidad de la persona por la cual se da a conocer singularmente. Por otra parte el individualismo no necesariamente significa el rechazo de Dios sino la autonomía de la manera de pensar frente a los dogmatismos que sean incomprensibles racionalmente. En el cristianismo la individualidad está relacionado con el “nacer de nuevo”, esa nueva identidad que asume el “yo” por un proceso de transformación.

El colectivismo como doctrina tiende a suprimir la propiedad particular transfiriéndola a la colectividad confiando al Estado la distribución de la riqueza. La colectividad es un conjunto de personas reunidas para un fin. El equilibrio ideal estaría en una colectividad que respetase la individualidad de sus componentes y que tendiese al bien común.

También surge con fuerza la identidad nacionalista, los nacionalismos, como apego de las personas a su nación que hace surgir el efecto contrario: la identidad internacional, el internacionalismo, caracterizado por anteponer las relaciones entre las diferentes naciones a la propia.

Tanto el amor a la patria, como el amor a otras naciones no debe ser causa de esclavización porque un espíritu universal de amor a Dios debe prevalecer. Las patrias pasan pero el Cielo permanece pues no solamente existe la sociedad de los ciudadanos o los miembros de la misma patria. Existe la sociedad de los espíritus, de las almas que aspiran a la ciudadanía celestial.

Jesús no vino para imponerse o tomar algún partido político. No vino para disputar algún reino o república a los poderosos. Su reino no es de este mundo. Tenemos que saber incorporar esta sublime idea de la “patria espiritual” aun sabiendo que habrá que saber ajustar creencias antiguas paganas con esta nueva idea espiritual que requiere un renacer del alma humana.

En cualquier caso toda esta secularización actual parece provenir del concepto humanista de la época Moderna en la que se inició culturalmente la disociación entre Dios y el ser humano. El hombre se va emancipando a costa de eliminar todo tipo de vinculación con la Revelación. En realidad se considera que la progresiva autonomía y libertad humanas son



La palabra “camino” en su significado espiritual designa un estilo de vida o una norma de conducta para servir a Dios siguiendo el CAMINO trazado por Jesús. En realidad todos los caminos convergen en un punto y ese uno es Jesús, la Luz. Nuestro camino es un camino virgen, sin huellas que intenta buscar a Dios en lo desconocido pues todos tenemos un camino único para nosotros. San Francisco Javier es llamado el “eterno peregrino” según consta en el Museo de los 26 mártires de Nagasaki (Japón).



completamente incompatibles con la idea de Dios. Como consecuencia de todo este planteamiento antropocentrista surge el humanismo ateo en el que se considera que la idea de Dios y de la Iglesia es una proyección que hace el ser humano idealizada, una imagen protectora del padre y la madre y que por fin este superhombre “liberado” de todos estos prejuicios no duda en asesinar de nuevo la idea de Dios. El ateo que niega la existencia de Dios está reconociéndolo implícitamente.

Esta subversión de valores culturales ha provocado una situación grave y decisiva, una crisis de creencias y valores que pone en peligro el desarrollo de una verdadera identidad armoniosa entre lo natural y lo sobrenatural.

El paradigma de la postmodernidad se caracteriza por la manera de concebir el progreso como bienestar social y una mejor calidad de vida, sustituyendo la ética de la moralidad por la ética de la racionalidad. Lo importante como valor cultural es la consideración de la propia estima y la autorrealización considerando al individuo como centro de todo.

Si bien se tiende a ser creativo fomentando un tipo de conocimiento independiente y original la meta parece ser la consecución del placer y disfrute de la vida unido al éxito y el reconocimiento de la propia valía.

El racionalismo imperante defiende la superioridad de la razón sobre cualquier forma de conocimiento rechazando la existencia de verdades reveladas. No obstante si la razón reflexiona con sentido común percibirá que su autoconocimiento no pueden existir sin la condición de una continuidad e identidad ontológica. Este “yo racional” estará intuyendo siempre su trascendencia: la razón intuitiva. El principio del racionalismo es dual y remite a una concepción independiente del mundo deformando en cierta medida al otro polo: lo intuitivo como algo irracional e incoherente.

Ciencia y religión son las dos grandes visiones del mundo más importantes. Son fenómenos globales presentes a lo largo de toda la historia de la humanidad. La primera pregunta que se plantea es si son entre si compatibles o incompatibles. Dentro de la compatibilidad se puede destacar su autonomía y desde ella el diálogo y la complementaridad.

Muchas afirmaciones negativas sobre la relación entre ciencia y religión se siguen repitiendo hoy, a veces, con enconada virulencia y algunos ven en la religión un virus maligno que se opone al progreso de la ciencia. El tema necesita de una reflexión seria y serena que examine la relación entre ciencia y religión como formas de conocimiento y fenómenos sociales, y cómo ha sido esta relación a lo largo de la historia, en especial, en relación con el cristianismo.

Desde la identidad cristiana la posición es muy sencilla pues la actitud que se asume es que el hombre profundiza con el saber los conocimientos que ha ido acumulando, para comprender cada vez más y admirar a Dios en sus obras. La inteligencia debe usarse para ver a Dios en la ley del astro, en la formación de la flor, en la concepción del ser y no usarla para violar la vida o negar al Creador.

Una actitud científica es una actitud por un lado de búsqueda de la verdad y un intento de comprender la realidad aun sabiendo que todo lo que va resultando cada vez más razonable y obvio es siempre una hipótesis permanente. Es una actitud de búsqueda ante el asombro de ciertos hechos tanto naturales como sociales.

Lo que creemos ahora no es definitivo, siempre está sujeto a contrastación y por tanto a perfección. Están los hechos y nuestra interpretación de los hechos. Están las creencias consideradas como hechos y

nuestra interpretación, nuestra valoración personal de tales creencias. Como seres humanos no podemos ser dogmáticos aunque nos inclinemos hacia una determinada creencia. Tal vez no esté de más señalar que *un dogma* es un principio innegable de una ciencia como proposiciones que se dan por firmes y ciertas. En el terreno religioso el dogma está relacionado con la doctrina revelada de Jesucristo y testificada por la Iglesia. Tanto en un terreno como en el otro no puede caerse en *el dogmatismo* que es cuando queremos que nuestras creencias o doctrinas sean tenidas por verdades inconcusas, esto es, sin duda ni contradicción y de una manera coactiva. Existen los dogmas (científicos o religiosos) que podemos libremente aceptar o no. En el dogmatismo en cambio, existe más bien una actitud impositiva que impide el ejercicio del libre albedrío.

Es decir, no generamos la verdad sino que la buscamos. La ciencia humana verdadera debe partir de una actitud siempre modesta al igual que una verdadera religión parte de una actitud humilde y no orgullosa. La ciencia puede ayudar a la religión a depurarla de sus supersticiones y la religión a su vez puede ayudar a la ciencia a purificarla de sus racionalismos absolutos.

La identidad cristiana parte de la base de un hilo común entre las diferentes creencias religiosas, un hilo común que son como nudos o retazos de la Verdad que el ser humano trata de comprender. Queremos encontrar la Verdad no la engendramos.

Buscamos nuestra identidad y al hacerlo intentamos comprendernos en los otros, porque somos conscientes de que es más fácil rechazar de plano cualquier creencia (ya se religiosa o científica) que el estar dispuesto a admitir que pueda haber otras mediaciones válidas tan importantes como la

nuestra.

Ciertamente no es lo mismo la verdad que el error, el bien que el mal. Si consideramos el estudio de los símbolos religiosos o las hipótesis científicas siempre nos encontramos en la encrucijada de tener que desvelar y buscar la verdad incluso en el error, el bien entre el mal. La identidad cristiana afirma el libre albedrío y responsabilidad de la persona. Los enfoques ateos y materialista suelen afirmar que la sociedad determina nuestra conciencia y acciones. El enfoque cristiano, en cambio, sostiene que somos libres en la elección e internalización de valores y que hay una interacción simbólica y estructural en el proceso de socialización. Al final somos responsables de nuestras propias decisiones y enfrentamos las consecuencias de nuestras acciones.

Cualquier cultura establece sistemas simbólicos y normas de orientación para el comportamiento social. Podemos comprobar que actualmente los valores han cambiado de una manera total y alarmante pudiendo decirse que se propone el mal como un bien, el pecado (al que suele no reconocerse) como una manera de ejercitar la propia autonomía y la propia libertad personal. Se mezcla la verdad con el error a través de medias verdades. La indisciplina, transgrediendo las obligaciones del propio estado, y la independencia separándose de la verdad son las pautas que suelen seguirse para seguir una verdad hecha a nuestra medida.

Hay que referirse al fenómeno de los aparente éxitos que parecen obtener las falsas religiones orientales debidos a que la meditación parece que sirve para el estrés de una vida ajetreada como la actual. Pero se suele mezclar la llamada meditación transcendental con el panteísmo que procuran aparentes maravillas para al final robar la verdadera fe y la propia identidad

cristiano universal. La serpiente antigua viene ahora mezclando otra vez mentiras con medias verdades, viene ofreciendo salud y bienestar, riquezas y buena vida a cambio de entregarle el alma sin caer en su celada. Tal es así que incluso algunos cristianos (incluso pastores) promueven distintos modos de oración y posturas meditativas propias de las religiones orientales, lo cual no deja de ser peligroso pues es claro que uno no puede servir a dos señores al mismo tiempo. Todos somos víctimas propicias para caer en una clara incompatibilidad para poder comunicarse con el Dios verdadero mediante la auténtica oración humilde, sustituyéndolo por una “fuerza”, una “energía” que lo que intenta es disipar la idea de Dios reconociendo que uno mismo lo es, o sea, en realidad la meditación de las religiones orientales parecen más bien promover la idolatría del yo.

No obstante todo esto no es sino la expresión de la guerra entre el “yo espiritual” (*yo superior*) en el que el alma se acuerda de Dios y de su origen divino y el “yo humano” que se acuerda de las exigencias de las pasiones. Este yo humano (o *yo inferior*) puede ser un ídolo al cual se sacrifica todo sin ninguna consideración. Es el amor propio, un “yo” ávido de estima y puede pretender incluso el querer llegar a ser como Dios.

Ciertamente hay una imagen de Dios totalmente estereotipada en la que se han incorporado elementos que no proceden de la revelación cristiana, un Dios cada vez más distante que no se preocupa del hombre y al que se le atribuye todos los desastres y calamidades humanas. Una especie de “Dios extranjero” en vez de un Dios cercano y amoroso. La idea de Dios y de la Iglesia han sido fuertemente atacadas.

Pero no nos engañemos están los que intentan ahogar la verdad de Dios

por su falta de fe, por su conveniencia personal e incluso los que intentan demoler a Dios que lo único que consiguen es suscitar más reacciones a su favor aunque intenten destruir la fe cristiano católica. La Palabra revelada es clara en su advertencia:” *Por lo que respecta a la Venida de nuestro Señor Jesucristo y a nuestra reunión con él, os rogamos, hermanos, que no os dejéis alterar tan fácilmente en vuestro ánimo, ni os alarméis por alguna manifestación del Espíritu, por algunas palabras o por alguna carta presentada como nuestra, que os haga suponer que está inminente el Día del Señor.*”

**(2 Tesalonicenses 2, 1-3)**

## **I. LA BÚSQUEDA DE LA VERDADERA IDENTIDAD EN LA FE CRISTIANA (NACER DE NUEVO).**

Parece existir una incapacidad del ser humano de responder a la llamada y obtener el santo deseo de esa fe en algo sobrenatural que está grabado en nuestro corazón de encontrar a Dios. En realidad estamos solos con nuestra libertad y la voz de nuestra conciencia percibiendo e intuyendo en nosotros signos de un alma espiritual como eco de la semilla de eternidad que el Creador realizó. Todo lo cual exige el esfuerzo de nuestra inteligencia, nuestra voluntad y la memoria recogida en el testimonio de otros que siguieron el mismo camino de búsqueda.

No todo el mundo está dispuesto a someter completamente su inteligencia y su voluntad a Dios. Tampoco estamos inclinados a obedecer en la fe sometiéndonos a la Palabra revelada. La búsqueda de la fe en Dios es salir de la rutina y costumbre cotidiana y de una manera peregrina vivir como extranjero en este mundo porque esperamos las realidades

sobrenaturales que no vemos.

Nuestra fe es una adhesión libre y personal a Dios. Primeramente Dios mediante su gracia viene a nuestro encuentro moviendo nuestro corazón e invitándonos a la verdad y nosotros libremente la aceptamos o la rechazamos. Es por lo tanto un ACTO humano libre y responsable.

En una sociedad apóstata este alejamiento de la filiación con el Creador genera un tipo de actitud estereotipada en la que la persona tiende a pensar que es casi imposible que Dios justifique a una persona impía, esto es, que no ha frecuentado los cultos dominicales, ha vivido sin respetar al Señor y su Iglesia, ha ignorado la Palabra revelada y aunque habitando y contemplando esta maravillosa Tierra, llena de señales, ha seguido persistentemente cerrando los ojos a estas pruebas de la existencia de Dios.

No obstante dada las condiciones socioculturales e históricas en las que nos encontramos puede incluso que seamos de esa clase de personas que ha cumplido exteriormente los mandamientos pero no de corazón sino por pura rutina. Hemos vivido sin amar de corazón a Dios y somos los que teniendo la Ley como la tenemos no la practicamos. En realidad un intento absurdo de burlarse de Dios con hipocresía.

Y por si fuera poco, nos hemos atrevido a vivir malinterpretando la Palabra divina a nuestra conveniencia para negar su existencia siguiendo nuestros propios caminos pensando que “somos dioses por nosotros mismos” sin necesidad de ningún Creador, comportándonos como auténticos anticristos. No hemos reconocido ley natural alguna, ni humana ni sobrenatural pues hemos sido rebeldes a toda ley, incluso renegando a la propia naturaleza humana como seres racionales dotados de inteligencia. Es decir, sencillamente, hemos sido personas de mala voluntad.

Por otra parte tal vez nos encontramos como cierto tipo de personas con un tipo de actitud con un exceso de confianza desordenada en la que no procuramos hacer el bien, porque estamos seguros que Dios está siempre contento hagamos lo que hagamos, lo que supondría una actitud soberbia. Es la actitud quietista.

Incluso hay otro tipo de actitud que tienen una imagen de Dios como un Ser intransigente, intolerable y terrible. Confunden el santo temor de Dios con el terror de Dios. Es la actitud escrupulosa.

Si nos detenemos en la Ley de los diez Mandamientos tal vez sintamos un desánimo y tristeza al comprobar que hemos fallado en alguno o en varios de ellos (faltar en uno es faltar a todos) ante lo que es la voluntad divina.

Resumiendo y recordando el contenido de la Ley Mosaica los pecadores reconocemos que: (7)

- 1- Hemos erigido altares a la mujer, a la ciencia, al poder, al triunfo militar, al dinero... en suma no hemos adorado únicamente al Dios verdadero.
- 2- No hemos usado el nombre de Dios cuando realmente necesitábamos hacerlo en las tentaciones.
- 3- No hemos honrado a nuestros padres. No hemos sido ejemplo y consuelo de los hijos.
- 4- Hemos cometido inmoralidad en el matrimonio en donde el hombre es la semilla y la mujer la tierra para fecundar.
- 5- No hemos santificado convenientemente las fiestas pues si el amor es santo más lo es el amor a Dios.
- 6- Hemos sido asesinos con las palabras e incluso con los hechos

comportándonos como verdaderos anticristos.

- 7- Hemos querido imponer nuestra voluntad a Dios y actuando en contra de su Ley. Tentamos a Dios que no es objeto de risa ni de burla.
- 8- Nos hemos comportado como verdaderos asesinos y ladrones cometiendo adulterios deshonrándonos a nosotros mismos indignamente.
- 9- Hemos mentido que es otra forma de asesinar al prójimo.
- 10- Teniendo lo necesario hemos robado los bienes ajenos cuando no hemos trabajado honradamente.

No obstante este doloroso reconocimiento en Jesús encontramos la Misericordia y la satisfacción de la Justicia ya que la persona verdaderamente arrepentida se ofrece como expiación sin desesperarse ni rebelarse llorando su perdón.<sup>(8)</sup> La expiación es dolor, pero al contrario del punto de vista humano, el dolor es un bien porque aumenta los méritos de los justos que se ofrecen a sí mismos con su resignación, como sacrificio precisamente de expiación por las propias faltas y por las culpas del mundo. Así pues desde un punto de vista sobrehumano el dolor es una “gracia”, una “piedad” por lo que para la identidad cristiana el dolor es el secreto del Amor de Dios que no encontró otro camino para salvar al mundo que la expiación de su Hijo. Es el caso de Jesús que expió las miserias y humillaciones de la criatura borrando sus culpas y purificándonos por medio de su Sacrificio.

Y es que la misericordia del Señor creador no se resigna y sigue invitándonos para que reconduzcamos nuestros caminos hacia el cielo, la Patria celeste que ha sido destinada para todos nosotros.<sup>(9)</sup>

Todos las actitudes que pretendan ver al ser humano autosuficiente y

que no equilibran justamente un conocimiento de Dios en realidad levantan muros ante la divinidad que son inútiles.

Por otra parte muchos dicen: “todos somos salvos”, y sí, son salvos, porque Jesús padeció por los pecados de todos nosotros pero quien no se arrepiente, quien no reconoce su pecado, no disfrutará del Reino de Dios y esto no por causa divina sino porque el hombre se castiga a sí mismo con su libre albedrío y su conciencia.<sup>(10)</sup>

Es absurdo creer que sólo una persona por pertenecer a determinada denominación religiosa o por tener tal o cual conocimiento pueda asegurarse sin más la salvación. Dios es toda Misericordia y puede comunicarse a las almas que deseen al Dios desconocido cuya existencia sienten por ley natural en su conciencia.

Nos maravillamos de que Dios justifique a cualquier persona impía y que la salvación se conceda a los que aparentemente no la merecen ni están preparados para recibirla porque la justificación nos fue merecida por la pasión de Cristo.

Pero por otra parte hay que estar alerta en no caer ni en una actitud escrupulosa ni en otra quietista. La justificación es algo entre la gracia gratuita de Dios y la colaboración de la libertad del ser humano.<sup>(11)</sup>

Cualquier ser humano con su razón conoce la voz de Dios en *la conciencia* que le impulsa a hacer el bien. Por medio de esta misteriosa fe como don divino (*iluminación de la conciencia*) para las personas de buena voluntad y sin conocer lo prescrito por la Ley pueden ser justificados por Dios porque de hecho obran mejor que aquellos que conocen los Mandamientos siguiendo la ley inscrita por Dios en su corazón.<sup>(12)</sup>

Este abrirse a la gracia supone aceptar una nueva identidad personal que empezamos a construir a partir de la vieja. Si bien buena parte de la identidad personal la edificamos a partir de las interacciones sociales en la familia, la escuela, la profesión y en general con la gente que se conoce a lo largo de la vida, la identidad cristiana se refiere a una auténtica conversión en cuanto a la aceptación del mensaje evangélico por el que la persona renace en el espíritu.

El bautismo de Cristo en agua lleva a hacer ver que es una enseñanza que además del verdadero rito es al mismo tiempo una acción de inmersión en el “Espíritu Santo”: nacer del agua y del espíritu. San Pablo se referirá a ello cuando nos dice que Cristo nos salvó *“mediante el baño de regeneración y renovación del Espíritu Santo”* (Tito 3, 5).

Es el relato de la entrevista de Nicodemo (Juan 3, 3:8) con Jesús, Nicodemo se dirige a Jesús como maestro venido de Dios y Jesús le respondió: **«En verdad, en verdad te digo: el que no nazca de lo alto no puede ver el Reino de Dios.»** (13)

El “Reino de Dios” o “reino de los cielos” sin duda hace referencia a la expresión de *«vida eterna»* lo que destaca una realidad espiritual e íntima en el alma. Por su parte “no puede ver” parece tener aquí un valor de visión experimental, incluso de disfrute y posesión de dicho reino. “Nacer de lo alto” (nacer de arriba) puede tener el sentido de “nacer de nuevo”, un renacer.

Es significativo que Jesús va a Juan para ser bautizado siendo que no tenía pecado, tenía el Espíritu Santo, era Hijo de Dios y no necesitaba abrir las puertas del Cielo para Él. Nos muestra de una manera clarísima que ya que es el Camino, la Verdad y la Vida nosotros tenemos que hacer como enseña, no sólo para la purificación de los pecados, sino también para cumplir

la justicia de Dios. Para ser hijos amados de Dios se necesita del sacramento del Bautismo. El Bautismo es el sacramento de la fe, un comienzo que necesita desarrollarse a lo largo de la vida, por eso con el Bautismo y la Eucaristía, el sacramento de la Confirmación constituye los sacramentos de la iniciación. Un nacer de nuevo constantemente.

Aquí las palabras de Jesucristo se presentan como mesiánicas pues revela e incluso legisla el reino de los cielos poniendo la condición necesaria de la “regeneración” por obra del Espíritu. Nicodemo como “docto” de la Ley no podía ignorar que esta enseñanza era mesiánica en el marco de la profecía de Joel en la que el profeta transmite el llamado de Dios al pueblo a arrepentirse y su promesa de restauración y bendición. Nos detenemos en la sagaz pregunta de Nicodemo: «¿Cómo puede uno nacer siendo ya viejo? ¿Puede acaso entrar otra vez en el seno de su madre y nacer?» (Juan 3, 3:4)

La extrañeza de Nicodemo no parece referirse al anuncio de “regeneración moral” sino más bien al modo, a la manera de realizarlo. Hay un cierto escepticismo en la pregunta. La respuesta de Cristo parece descubrir que en el pensamiento de Nicodemo no se evocaba a la regeneración espiritual. Renacer (volver a nacer) es la experiencia de un bautismo renovado en la que la persona adquiere y se compromete a mantener la vida de la gracia.<sup>(14)</sup>

Esta nueva identidad (el renacer del nuevo yo) supone una redefinición de sí mismo que aclara el horizonte del propio mundo moral. La identidad cristiana reconoce en **la dignidad de la persona humana** una divinización por participación. Tal vez pueda hablarse de una doble participación: participación divina y participación social, siendo la primera más universal y

la segunda más restringida al grupo cultural al que se pertenezca. **Este nacer de nuevo es una identidad en Cristo.**(15)

La conversión vivida como una experiencia trascendental en la vida de la persona genera un cambio ontológico, una mutación que le permite reconstruir una nueva identidad personal y social. Esto quiere decir que este “nacer de nuevo” en el proceso de conversión trasciende la esfera de la creencia religiosa personal y produce un cambio en la identidad de la vida de la persona que afecta a todas sus relaciones sociales. Se produce en la conversión un cambio personal y social. Dado el carácter trascendente de la persona humana el fin de la salvación, el Reino de Dios, incluye la posibilidad de conversión a todos.(16)

Es lo que suele indicarse cuando decimos que “la Iglesia es el Reino de Cristo presente ya en misterio” porque el Reino de Dios se extiende más allá de lo que las fronteras formales visibles de la Iglesia marcan. El Dios desconocido está trabajando en muchos corazones que, inculpablemente, no han sido bautizadas y no han conocido el tesoro de la Iglesia Católica. En este sentido Jesús funda su Iglesia predicando una continuidad de su doctrina universal.

El alma según el paradigma cristiano es como un ente espiritual que tiene la capacidad de renacer por libre voluntad. El espíritu puede renacer por segunda vez (*no en la carne como sostiene la creencia de la reencarnación*) sino en el espíritu uniéndose a Cristo que al regenerarse se fusiona con el Espíritu de Dios. Algunos niegan el alma cuando esto es algo que está fundamentado en la Biblia.(17)

No es lo mismo la *existencia* que la *vida*. Existen las criaturas (animales, vegetales) pero no tienen propiamente vida en el sentido cristiano, podría hablarse de una *alma viviente* para los animales pero diferente de la del *alma humana (psique) que asume responsabilidades por sus actos*. En su sentido más básico designa al hombre creado como un ser viviente (alma: *nephesh* en hebrero). Es centro de la vida espiritual y emocional. “Vida” tiene su principio cuando el Pensamiento de Dios crea un alma para habitar en un cuerpo determinado. “Muerte” quiere decir cuando el pecado mata el alma. En su acepción normal alma es el principio que da forma y organiza el dinamismo vegetativo, sensitivo e intelectual de la vida.

Por su parte “espíritu” (*pneuma*) se refiere a la parte no material del ser humano. Podríamos decir que el ser humano no es espíritu en su totalidad sino que es un alma que tiene espíritu.

Existe una unidad del alma y del cuerpo tan profunda que puede decirse que el alma es la "forma" del cuerpo, es decir, gracias al alma espiritual tenemos un cuerpo humano y viviente. El espíritu y la materia no son dos naturalezas unidas, sino que su unión constituye una única naturaleza. Si hacemos una analogía nuestro **cuerpo** sería como un templo necesario para resguardar de las inclemencias del tiempo a la llama de fuego que hay en su interior (simbolizando **el alma**). La madera que utilizamos como leña representaría nuestro **corazón** (dependiendo de la calidad de la leña así sería el fuego). La llama resultante como se ha dicho sería el alma. Por último la luz y el humo simbolizarían **el espíritu**.

El alma es analógicamente también como un pequeño terreno que nos han dado y que nos pedirán cuenta sobre los frutos de nuestras cosechas. En el alma encontramos una semilla dañada, llena de orgullo y vanidad pero

todavía con un hilo de vida: la voluntad humana. Nuestro trabajo consiste en colaborar con la gracia divina e intentar sanar la parte dañada y defectuosa para lograr cambiar la naturaleza del germen dándole la vida primera totalmente restablecida. Para ello exponemos al Sol de la Divina voluntad dicha semilla deteriorada para que con su Luz, Calor y viento quite las partes dañadas y las regenere dándole nueva vida. No somos conscientes de nuestras faltas generalmente y San Pablo dice que el hombre naturalmente no capta las cosas del Espíritu de Dios. **(18)**

Como nos transmite la Palabra Revelada Pedro es el que reconoce la identidad de Jesús por lo que al comparar esta afirmación con la negación de ser discípulo suyo (cuando antes había asegurado que estaría dispuesto a ir con Jesús a la cárcel y hasta morir si fuese preciso) vemos aquí el exponente de una semilla humana presuntuosa en la que todos nos reflejamos.

***-Y vosotros, ¿quién decís que soy yo? - les preguntó.***

***-Simón Pedro contestó:***

***-Tú eres el Cristo, el Hijo de Dios vivo.***

*(San Mateo 16:15-16)*

***-La muchacha portera dice a Pedro: “¿No eres tú también de los discípulos de ese hombre?”***

***-Dice él: “No lo soy”***

*(San Juan 18:17)*

Pedro después de afirmar la divinidad renegó de Jesús, pero él se arrepintió de haberle renegado y Dios le perdonó y lo hizo su Pontífice. Si hubiera persistido en su error obviamente no hubiera podido llegar a ser su Vicario.

Otro modelo de esta semilla dañada de la voluntad humana está en la incredulidad de Tomás. La incredulidad de Tomás recogida en el Evangelio

(*Juan 20, 28-29*) nos hace recordar que el ser humano, por su propia naturaleza, si no ve no cree. Parece que tenemos como Tomás un cierto temor a creer. Es la dramática realidad de la batalla sangrienta entre la voluntad humana y la Divina que continúa todavía. **El objetivo es hacer siempre la Voluntad de Dios.**(19)

Es la razón humana con la semilla deteriorada, la razón que pide que se la convenza, la voluntad humana que consciente de que tiene una razón hace uso de ella y que en el caso de Tomás al menos pide al Dueño de la razón humana que le enderece la suya. Es la razón, celosa de su libertad no quiere ser esclava de una sugestión colectiva. Es la razón testaruda que sólo presta oídos a sí misma y que repite que se convencerá cuando vea.

Jesús es el Agricultor divino que trabaja el terreno de nuestras almas y sembrando la semilla de su palabra para poder recoger los frutos para alimentarse. Pero para poder sembrar en el terreno del alma tiene que formar zanjas, hacer surcos e incluso meter el arado para después arrojar la semilla en ellos. La tierra apta para el cultivo es símbolo de la humildad, la nada, el aniquilamiento del alma, una tierra que se deja cultivar para no endurecerse.

La fortaleza y el conocimiento de nuestras semillas deben deshacerse para que entren en su lugar la Fortaleza, la Luz y Sabiduría de Jesús. Por eso dejamos colocar la semilla bajo tierra y la sepultamos hasta hacerla morir y pulverizarse para que después pueda resurgir más bella y multiplicada. Cualquier cosa humana que hubiera se habrá destruido y podrá resurgir a nueva vida. Cuanto más sentimos aniquilada nuestra semilla de la voluntad humana con lágrimas más crece en nosotros y se fecunda la espiga.(20)

No siempre el Agricultor celestial se deleita sembrando en terrenos

vírgenes y puros donde el alma vive en la Voluntad divina, sino que con frecuencia debe ensuciarse al sembrar dada la aridez del suelo en una tierra que no se abre fácilmente para recibir la semilla. Todo este trabajo efectúa el Agricultor para ayudar a hacer morir la semilla de la voluntad humana y hacerla renacer junto con la semilla divina y desarrollar el injerto efectuado.

Si permitimos que la semilla divina se injerte en nuestra semilla humana tendremos el vacío donde poder recibir bienaventuranzas, felicidad, alegría y belleza, todas estas semillas divinas que germinan en el Cielo, cuando el alma esté en su patria.

Podemos cosechar la semilla sembrada divina siempre que estemos en el terreno donde se ha sembrado dicha semilla con una actitud adecuada para que pueda reproducir su fruto. Igual que el sol produce los bienes de la Creación según la fecundidad de los terrenos y de la actitud del labrador. Si el ser humano no activa ni trabaja en el cultivo de la tierra el sol nada puede hacer con su luz y calor.

Somos como árboles injertados con la semilla divina. La fuerza del injerto es tal que tiene virtud de hacer destruir la vida del viejo árbol que recibe el injerto. La Voluntad divina sabe cambiar y dar la adecuada transformación para formar ese noble injerto que dará nuevos frutos. Necesitamos superar el sueño espiritual, el desierto, la noche oscura del alma cuando dudamos de la existencia de Dios. La reserva de aceite según la parábola de las diez muchachas o vírgenes nos enseña que tenemos que ser previsores y estar siempre atentos a la venida del Señor. (***Mateo 25, 1-13***). Consumimos el aceite de la fe cuando empezamos a dudar en Dios y dejamos de cumplir su voluntad. Empezamos a mezclar amores ajenos con el amor a Dios. No buscamos a Dios en sí mismo cuando nos apegamos a las cosas de

este mundo. Tenemos que vaciarnos de nuestros gustos y apetitos (perder el alma por Jesús).<sup>(21)</sup>

El alma que vive de esta fe injertada viene a participar de la sustancia de Dios y participando viene a asemejarse y a transformarse con el mismo Dios, porque la Fe es Dios mismo. En el injerto humano-divino sucede que forman una misma sustancia y no se distingue la una de la otra y es impensable querer separarlas tan sumergida está el alma en la voluntad divina. El alma que obra el bien al tener en ella la sustancia de la Vida divina hace salir el bien del principio, de la fuente que es Jesús.

El trabajo del alma como trabajo personal supone arrojar a tierra las satisfacciones naturales vaciándose de sí misma semejante a la cáscara o los espinos que hay que quitar a un fruto para extraer su sustancia.

Los que han sembrado semillas del mal se enfrentarán al tiempo de su cosecha, recolectarán lo que hayan sembrado. Aunque sintamos compasión hacia los que harán frente a consecuencias que no habían previsto, no podremos rescatarlos de los juicios de Dios. Lo que hemos hecho no tiene vuelta de hoja y es nuestra entera *responsabilidad*. Jesús alude a la necesidad que tenemos de ser transformados para conseguir la perfección con dos injertos: uno de sangre y otro de fuego. La Sangre es la de Jesús y el Fuego la del Espíritu Santo.<sup>(22)</sup>

Pero para poseer este Espíritu Revelado es necesaria la Gracia. **La Gracia** se merece por la sinceridad del arrepentimiento pues sin la gracia el ser humano sería como los animales que si bien tienen una razón para guiarse en las contingencias de la vida terrena no sabría elevarse a la vida sobrenatural del espíritu. Perder la gracia quiere decir que el alma muere a

la vida eterna. El prodigio de vivir en la gracia de la Voluntad divina permite transformar nuestros propios actos en actos eternos e infinitos que nos encontraremos en el cielo. (23)

Un arrepentimiento real y verdadero del alma con una conciencia iluminada de la gravedad de sus errores será un acto de nueva creación, una recreación. Será un alma nueva en la que podrá mirar hacia el futuro aceptando el sacramento del perdón presente y viendo el pasado como algo viejo y caduco. Un alma así se ha espejado en Jesús reflejándolo.

El alma es el campo donde trabaja la divinidad para la reintegración del ser humano a su principio de donde salió, a la nobleza perdida, a su origen. A esto se refiere el *renacer en el espíritu* que es el fruto del camino de la conversión, tal y como lo señaló Jesús a Nicodemo.

El episodio de la Transfiguración (*Mateo 17:2*) delante de Pedro, Santiago y Juan parece enseñarnos cuál debe ser nuestro objetivo, que para ser transfigurados necesitamos tomar conciencia del camino de progresiva transformación en nuestra identidad cristiana.

Al vernos pecadores e impotentes para superarnos, tendemos a pensar que la salvación (simbolizada en la Transfiguración) consiste en que la misericordia de Dios no nos imputará nuestros pecados nos esforcemos o no. Esta tentadora forma de creer en el fondo es un no creer en la verdadera capacidad y poder de Dios de transformarnos. La salvación depende del último momento por eso una actitud de continuo arrepentimiento quiere decir que somos salvados por Jesús no por nuestros méritos.

Si el bautismo es el sacramento de la fe purificando todos los pecados haciendo de la persona una “nueva creación”, al sacramento de la Penitencia

y de la Reconciliación se le denomina el Sacramento de la conversión. Una conversión que es un proceso ininterrumpido de arrepentimiento. Los sacramentos ayudan a la transformación de la persona hasta llegar a una “contrición perfecta” purificando el corazón.

Y toda esta transformación para encontrar nuestra nueva identidad, es decir, para que nuestro nombre esté escrito en el Libro de la Vida y ser ciudadanos de la nueva Jerusalén tal y como lo expresa el Libro de la revelación: *“El que salga vencedor se vestirá de blanco. Jamás borraré su nombre del libro de la vida, sino que reconoceré su nombre delante de mi Padre y delante de sus ángeles”* (***Apocalipsis 3, 5***).

La parábola de Jesús (*Lucas 15, 12*) sobre el regreso del hijo pródigo simboliza en el cristianismo un viaje de peregrinación espiritual. Al principio el padre aparece como un intruso que parece que nos intenta privar de nuestra libertad, incluso severo y exigente contra el que nos rebelamos (*“Padre, dame la parte de la hacienda que me corresponde”*). Es la idea estereotipada de un Dios Padre que sentimos amenazante y que nos amedrenta. Nos convertimos así en los hijos rebeldes que se marchan porque sentimos el miedo fundado de ser víctimas de un padre autoritario que nos impide ejercer el libre albedrío sin coacción. En realidad lo que consideramos “nuestra” hacienda la hemos recibido del Padre liberal y gratuitamente para que la administremos cuidadosamente.

En una segunda etapa estaría la experiencia del darse cuenta del propio error y la iluminación de la conciencia nos permitiría vernos tal y como somos y que da por resultado el arrepentimiento (generalmente un proceso doloroso). Es capaz de vislumbrar un destello de la verdadera paternidad misericordiosa del Padre. La conciencia está como un espejo de dos caras,

uno bajo nuestro yo y otro bajo el ojo de Dios reprochando nuestro vergonzosa manera de obrar y de pensar.

Y en un determinado momento empatizamos y nos decidimos a volver como el hijo pródigo: *“Me levantaré, iré a mi padre y le diré: Padre, pequé contra el cielo y ante ti. Ya no merezco ser llamado hijo tuyo, trátame como a uno de tus jornaleros.”* (**Luc 15,18-19**)

Pero para volver al Padre necesitamos transformarnos en su imagen y más aún en su semejanza. Tenemos que experimentar la conversión en el cambio de nuestros propios valores. Una vez conseguido esto el mundo de Dios Padre lo percibimos como mejor que el mundo humano en el que nos encontramos. Esta *iluminación de la conciencia* y el arrepentimiento consecuente hace que el Padre utilice nuestro llanto para el bien de los demás y sentimos misteriosamente que las penas se transforman en alegrías. Esta alegría no es sólo nuestra ni exclusiva de uno sino que es goce de todos, por eso no se comprende la reacción del hijo mayor que siempre vivía en casa y expresa su desacuerdo.

Al volver con un corazón contrito, sincero y confiado nos encontramos con que el Padre nos recibe con alegría, con perdón y con generosa compasión. El perdón y el amor con el que nos recibe es incondicional, no reclama nada para sí. No le pregunta al hijo pródigo cómo ha dilapidado el patrimonio ni le pide cuenta de sus maldades. El Padre Divino es todo Misericordia.

En esta parábola del hijo pródigo encontramos también la figura del hijo mayor que siempre vivía con el Padre y que se apropió emocionalmente de la casa paterna, perdiendo el sentido de la realidad instintivamente soltó una descarga de energía emocional para la defensa de “sus” propiedades



El regreso del hijo pródigo  
(REMBRANDT)



El regreso del hijo pródigo  
(BARTOLOME ESTEBAN MURILLO)

amenazadas. Estaba temeroso, un temor infundado que tomó la forma de sobresalto saltando a la ofensiva sintiéndose rival de su hermano y robándole la alegría de vivir pues (... *convenía celebrar una fiesta y alegrarse, porque este hermano tuyo estaba muerto, y ha vuelto a la vida; estaba perdido, y ha sido hallado.*" *Luc. 15, 32*). Es el verdadero misterio de la sonrisa alegre del padre que brota del fondo del alma. Una sonrisa que es creadora y liberadora que simboliza el poder sobre la materia y lo mundano.

Este hermano mayor pierde la visión proporcional de la realidad sobrevalorando los acontecimientos de acuerdo a sus temores o deseos. Es incapaz de ver la realidad tal cual es: "*Hijo, tú siempre estás conmigo, y todo lo mío es tuyo...*" (*Luc. 15, 31*) y sólo juzga a la luz de sus intereses. En suma está esclavizado de tal apropiación. Está claro que se busca a sí mismo y no permite que los demás actúen. Hay una desemejanza con el Padre. Este hijo carece de la alegría de ver a su hermano volver a la casa que sería el inicio de un movimiento que sale de sí y se expande en gozo retornando al

punto de partida pues todo está en el corazón.

Estamos ante la necesidad de un nuevo camino de corrección, de conversión para desprenderse de tales apropiaciones del yo humano y conseguir otro más auténtico. Al conocerse a sí mismo en esta iluminación de la conciencia la persona se experimentará como una nada de la que surgen ante él los pecados y las faltas de toda su vida no quedando oculto ningún mal pensamiento, palabra u obra que misteriosamente haya quedado grabados a fuego en su alma. Este reconocimiento, después de una gran esfuerzo y dolorosas lágrimas amargas permiten purificar y borrar esperando pacientemente la consolación del perdón. Se hace necesario en esta noche oscura del alma soportar el vacío espiritual y no buscar alivio de nuevo en cosas mundanas. Hay que saber echar a un lado nuestro yo, nuestra actividad intelectual para acoger la gracia santificante, la Sabiduría intuitiva que permanece oculta en nosotros.

En este simbólico pero a la vez real contacto con la realidad celeste el alma arrepentida se funde con Dios dejando de ser llama relativa para ser llama infinita del Altísimo. Los grandes pecadores convertidos no se quedan con nada del pasado sino que han consumido su barro con la llama de la Gracia. Es la finalidad de las criaturas: conquistar el Cielo y alegrar al Padre. Por el camino de las Bienaventuranzas se conquista a Dios y su Reino de una manera más dulce que el camino severo de la Ley del Sinaí. Las bienaventuranzas nos recuerdan que si somos pobres de espíritu no pecamos aunque seamos ricos; si vamos con actitud paciente, amorosa y humilde seremos mansos; si lloramos sin rebelarnos nos acercaremos a la perfección; si nos alimentamos de Sabiduría y Justicia no caeremos en el racionalismo; si perdonamos misericordiosamente tendremos en cuenta la compasión; si

somos puros de corazón estaremos preparados pues sabemos que en el Cielo no puede entrar nada impuro; si tenemos espíritu de paz no albergaremos odio en nuestro corazón; si sufrimos persecución por amor a la Justicia e incluso si nos ultrajan y calumnian estaremos dispuestos a perdonar y comprender cumpliendo siempre la voluntad divina.

*Vivir como si Dios y su Reino no existiese es una contradicción.* Una criatura que no hace referencia al Creador es como un hijo que vive como si no tuviese padre. Lo que nos da plenitud es conocer a Dios, es conocer la fuente de nuestra vida. Conocer a Dios es conocer a Jesucristo porque es el enviado de Dios (encarnación de la Palabra y del Amor del Padre). Y eso es vida eterna, no solamente en el cielo, sino que el cielo comienza ya aquí entre nosotros, el cielo está adelantado a esta vida en la medida en que comenzamos a conocer a Dios. Dios quiere nuestro bien, Dios quiere que todos se salven, Dios quiere nuestra salvación, Dios es el Bien Supremo.

A decir verdad nadie cambia y queda transformado totalmente sino que en el mejor de los casos podríamos decir que *mejoramos* aunque dediquemos muchas horas a la oración y a Dios, ya que es una triste realidad que hasta la muerte permanecemos egoístas. Parece como si Dios llevase a sus hijos predilectos al desierto para forjarlos a fuego lento en el silencio y la soledad. Todo para dejar el culto a sí mismo y darle culto a Él. Si rezando somos tan mediocres en la espiritualidad ¿cómo seríamos si no rezáramos?

Para liberarnos de nuestro “viejo yo” no es necesario detestarlo u odiarlo. Nuestro viejo yo para ser transformado debe ser comprendido e incluso amado sin tenerle miedo ya que el miedo es lo que impediría tal transformación. Si realmente amamos en Cristo lo amamos todo, en lo

perfecto y en lo imperfecto. Es lo que se denomina la “*Consciencia-Luz*” (*iluminación de la conciencia por la gracia santificante*) que ama absolutamente todo en Cristo.

Cuando acontece la crisis al buscar nuestra verdadera identidad vemos que es necesario enterrar todo lo impuro que existe en nuestro corazón al mirarnos en el espejo de Cristo. Necesitamos la fortaleza del Espíritu Santo para tener el valor y la confianza necesaria para poder decir como Pablo que para nosotros la vida es Cristo y la muerte es ganancia. (***Filipenses 1, 21***)

Percibimos claramente que hay en nosotros una vida antigua y una vida nueva gracias al injerto que hemos aceptado por eso nos dice Pablo: “*No se mientan los unos a los otros, puesto que ya se han librado de su vieja naturaleza y de las cosas que antes hacían, y se han revestido de la nueva naturaleza: la del nuevo hombre, que se va renovando a imagen de Dios, su Creador, para llegar a conocerlo plenamente.*” (***Colosenses 3, 9-10***)

Incluso a veces nos servimos del nombre de Dios para nuestros fines. Podemos pronunciar el nombre de Dios para ser conocidos de la gente, es decir, puede haber la tendencia de pronunciar el nombre divino para detrás de su nombre proyectar nuestro propio nombre, invocar mucho la voluntad de Dios para promover a su amparo nuestra propia voluntad resguardando a la sombra de su gloria nuestro prestigio o nuestras ideologías. Cualquier tipo de decisión hay que sopesarla y reflexionarla antes de valorarla. No podemos juzgar a otros cuando hacemos lo mismo que ellos porque en realidad seguimos siendo voluntariamente paganos aunque consideremos que estamos en la verdadera fe y que por tanto el Dios verdadero está con nosotros mientras tenemos cultos diversos (al dinero, a la mujer o al poder). Es una forma latente de ateísmo oculto en el estilo de vida de muchos “cristianos”.

Echamos la simiente del “viejo yo” y la sembramos esta vez en el Cielo y con ayuda de su gracia aceptamos la Palabra revelada, comienza a germinar en nuestro *yo* y poco a poco va perdiendo su identidad de grano. El “*viejo yo*” se pierde a sí mismo y perdiéndose da vida al “*nuevo yo*”. Perdiéndose en la conversión del arrepentimiento renunciando y negándose a sí mismo comienza a llevar bien la propia cruz, dificultades que se derivan de cumplir la voluntad divina. Supone el esfuerzo de intentar hacer fielmente con perfección aun las cosas más pequeñas siguiendo a Jesús caminando hacia la consumación del “viejo yo”. La persona que ha realizado esto continua sin diferenciarse a sí misma bajo el Nombre de Cristo. Los llamados extranjeros o paganos también son llamados a descubrir este nuevo yo, porque Dios no tiene favoritos.<sup>(24)</sup>

San Francisco de Asís hace hincapié en la necesidad de vencerse a sí mismo soportando con paciencia sin alterarnos cuando sufrimos injurias y crueles rechazos, el hecho de soportar incluso con gozo las tribulaciones acordándonos de los padecimientos de Cristo.<sup>(25)</sup>

Todos formamos un grupo de búsqueda de Dios y en este sentido los caminos son muy numerosos pudiendo decirse que todos tenemos predecesores y seguidores. Todas las personas son capaces de buscar a Dios pues el deseo de conocerle está inscrito en el corazón del hombre. Es absurdo cerrar el corazón a hermanos separados que no viven bajo el mismo techo cristiano pues la Iglesia de Cristo es universal. Y el poder de la Palabra siempre produce efecto en un buen terreno.<sup>(26)</sup>

Hay que estar en guardia contra el desánimo que intenta persuadir que esperamos en vano a Dios. La duda es letal para el espíritu y la utiliza

Satanás para que la persona se desespere. San José sufrió su Pasión cuando notó el estado de María. José desconfió de María y le pidió perdón por faltar a la caridad.<sup>(27)</sup> Realizar ACTOS en los que nuestra acción tenga una fuerza contemplativa y nuestra contemplación tenga una intención esencialmente activa. La contemplación viene a ser la medida de la humildad porque en el silencio se desarrolla la intimidad con Dios. Además de este trabajo individual se nos alienta a congregarnos y a animarnos mutuamente: individualidad y comunidad. Todo hecho con alegría: *Se alegre el corazón de los que buscan a Dios.* (**Salmo 105,3**) pues todos tenemos una cita con el Señor en el trono de Dios.



La IDENTIDAD CRISTIANA interioriza la actitud del buen Samaritano. Sólo Jesús es el buen Samaritano que teniendo piedad de nuestras heridas se inclina sobre nosotros para derramar el óleo y el vino extraídos del amor.

Nos da el vino de su sangre y el óleo de su Misericordia. Sólo Jesús viene y se apiada de nuestro estado.

No rechazaremos al Amigo que quiere salvarnos, dejemos que el buen samaritano nos cuide.

Perdonemos por este amor gratuito que recibimos de Dios. Nuestra vida es un medio que sirve para el fin que es la eternidad. Un don que ha de ser amado santamente.

## CITAS BÍBLICAS Y BIBLIOGRÁFICAS RELACIONADAS (\*)

### INTRODUCCIÓN: OBJETO DEL PRESENTE ENSAYO

(1) *“Apolos se puso a hablar abiertamente en la sinagoga; pero cuando lo oyeron Priscila y Aquila, lo llevaron aparte y le explicaron más exactamente el camino de Dios.” (Hechos 18, 26) (Dios habla hoy. La Biblia. Versión Popular. Sociedad Bíblica Americana. Nueva York.)*

(2) *“El sumo sacerdote volvió a preguntarle: ¿Eres tú el Mesías, el Hijo del Dios bendito? – Jesús le dijo: Sí, Yo soy. Y ustedes verán al Hijo del hombre sentado a la derecha del Todopoderoso y venir en las nubes del cielo.” (San Marcos 14, 61-62)*

*“Y vosotros, ¿quién decís que soy yo? – les preguntó. -Simón Pedro contestó: -Tú eres el Cristo, el Hijo de Dios vivo”. (San Mateo 16:15-16)*

La palabra «*cristiano*» proviene del griego la cual a su vez procede del nombre propio “Cristo” (traducción del hebreo Mesías, que significa “ungido”). Se indica en el libro de Hechos de los Apóstoles: *“Partió para Tarso en busca de Saulo, y en cuanto le encontró, le llevó a Antioquía. Estuvieron juntos durante un año entero en la Iglesia y adoctrinaron a una gran muchedumbre. En Antioquía fue donde, por primera vez, los discípulos recibieron el nombre de «cristianos». (Hechos 11, 25-26)*

En los Hechos también encontramos la palabra “cristiano” en boca del rey Agripa cuando Pablo trata de convencerle: *“Agripa le contestó: - Por poco me convences de que me haga cristiano.” (Hechos 26, 28)*

---

(\*) **Negritas del autor.**

No obstante estas citas bíblicas encontramos que Jesús se refirió también al cristianismo: “*La mordedura de Satanás fragmentará el **cristianismo**; muchas partes de mi carne mística sufrirán la separación, para formar células aisladas en el vano deseo de constituirse en cuerpo perfecto, como será el Cuerpo místico de Cristo (el formado por la totalidad de los fieles unidos en la **Iglesia apostólica, que será la única verdadera Iglesia mientras exista la tierra**). Estas partículas, separadas, privadas por tanto de los dones que habré de dejar a la Iglesia Madre para nutrir a mis hijos, se llamarán de todas formas cristianas, pues darán culto a Cristo, y, a pesar de su error, siempre recordarán que de Cristo han venido.*” (**El Evangelio como me ha sido revelado. Maria Valtorta.203. El Padrenuestro. Libro electrónico.** )

- (3) Para los cristianos, el seguimiento de Jesús debe ser prioritario según las palabras que dirige a un discípulo que le pedía que le dejase primero enterrar a su padre: “*Dícele Jesús: Sígueme, y deja que los muertos entierren a sus muertos.*” (**Mateo 8:21-22**).

La identidad cristiana reconoce a Jesús como persona divina: “*Sólo la identidad divina de la persona de Jesús puede justificar una exigencia tan absoluta como ésta: "El que no está conmigo está contra mí" (Mt 12, 30); lo mismo cuando dice que él es "más que Jonás... más que Salomón" (Mt 12, 41-42), "más que el Templo" (Mt 12, 6); cuando recuerda, refiriéndose a que David llama al Mesías su Señor (Cf. Mt 12, 36-37), cuando afirma: "Antes que naciese Abraham, Yo soy" (Jn 8, 58); e incluso: "El Padre y yo somos una sola cosa" (Jn 10, 30)* (-**Catecismo de la Iglesia Católica 590**-)

- (4) VIII. 2. *Donde aparezca el obispo, esté allí la comunidad, así como donde esté Jesucristo, allí está la **iglesia católica**. No es lícito bautizar ni celebrar la Eucaristía sin el obispo. Sin embargo, lo que éste apruebe, es agradable a Dios para que todo lo que hagáis sea sólido y válido.*” (**Fuentes Patrísticas. Ignacio de Antioquía. Cartas a los esmirniotas. Editorial Ciudad Nueva. Madrid 1991, pág, 177**)

“X. 3. *Es absurdo hablar de Jesucristo y vivir al modo judío. Pues el cristianismo no creyó en el judaísmo, sino el judaísmo en el cristianismo, en el que se ha congregado toda lengua que cree en Dios. (Fuentes Patrísticas. Ignacio de Antioquía. Cartas a los magnesios. Editorial Ciudad Nueva. Madrid 1991, página 135)*

Todo esto para que el mundo crea que Cristo fue enviado en la unidad: “*Mas no ruego solamente por éstos, sino también por los que han de creer en mí por la palabra de ellos, para que todos sean uno; como tú, oh Padre, en mí y yo en ti, que también ellos sean uno en nosotros; para que el mundo crea que tú me enviaste.*” (S. Juan 17, 20-21) *Biblia Reina Valera.*

La llamada a la unidad es clara cuando Pablo en su carta a los Efesios escribe como tema central unir a toda la creación bajo la autoridad de Cristo: “*Yo pues, preso en el Señor, os ruego que andéis como es digno de la vocación con que fuisteis llamados, con toda humildad y mansedumbre, soportándoos con paciencia los unos a los otros en amor, solícitos en guardar la unidad del Espíritu en el vínculo de la paz; un cuerpo, y un Espíritu, como fuisteis también llamados en una misma esperanza de vuestra vocación; un Señor, una fe, un bautismo, un Dios y Padre de todos, el cual es sobre todos, y por todos, y en todos.*” (Efesios 4, 1-6) *Biblia Reina Valera.*

- (5) Así pues, todo este ensayo está sujeto en última instancia tanto al Magisterio de la Iglesia Católica que tiene el oficio de interpretar auténticamente la palabra de Dios, así como al juicio de la libre conciencia de cada persona. A las Revelaciones privadas narradas o presentadas aquí no se les da oficialmente ningún valor sobrenatural, hasta que la Superior Autoridad Eclesiástica haya emitido un juicio.

Y esto porque como la identidad cristiana tiene una fundamentación bíblica uno siempre está expuesto a deslizarse por cierta interpretación personal de las Escrituras y sobre esto nos alerta: “*Pero, ante todo, tened presente que ninguna profecía de la Escritura puede interpretarse por cuenta propia; porque nunca*

*profecía alguna ha venido por voluntad humana, sino que hombres **movidos por el Espíritu Santo**, han hablado de parte de Dios.” (2 Pedro 1, 20-21)*

Por su parte las siguientes citas expresan claramente la divinidad del Espíritu Santo : “*Toda Escritura es **inspirada por Dios** y útil para enseñar, para argüir, para corregir y para educar en la justicia;” (2 Timoteo 3, 16)*

*Divinidad confirmada en los hechos de los apóstoles cuando relata el pecado de Ananías y Safira: “Pedro le dijo: «Ananías, ¿cómo es que Satanás llenó tu corazón para mentir **al Espíritu Santo**, y quedarte con parte del precio del campo? ¿Es que mientras lo tenías no era tuyo, y una vez vendido no podías disponer del precio? ¿Por qué determinaste en tu corazón hacer esto? Nos has mentido a los hombres, sino **a Dios.**» (Hechos 5, 3-4)*

No podemos interpretar las Escrituras privadamente sin referencias al Magisterio porque hay peligro de comentario retorcido y podemos vernos arrastrados como mera víctima y desviarnos de nuestra fe: “*Lo escribe también en todas las cartas cuando habla en ellas de esto. Aunque hay en ellas cosas difíciles de entender, que los ignorantes y los débiles **interpretan torcidamente** - como también las demás Escrituras - para su propia perdición. Vosotros, pues, queridos, estando ya advertidos, vivid alerta, no sea que, arrastrados por el error de esos disolutos, os veáis derribados de vuestra firme postura”.*

*(2 Pedro 3, 16-17)*

Por su parte San Juan dice que “*Jesús realizó en presencia de los discípulos otras muchas señales que no están escritas en este libro. Estas han sido escritas para que creáis que Jesús es el Cristo, el Hijo de Dios, y para que creyendo tengáis vida en su nombre.” (Juan 20, 30-31)* lo que quiere decir que tenemos en la Revelación la Palabra de Dios y por tanto no es obligación creer en otras revelaciones privadas. En el caso de que tales revelaciones o visiones estuviesen en contra de la doctrina de la Iglesia o en contra de la Palabra de Dios no hay que creerlo

sea quien sea quien lo haya dicho porque el Espíritu Santo nunca se va a contradecir. Las revelaciones privadas si son de acuerdo a la Palabra no pueden contradecirla. La base de toda la fe católica está en la Biblia y en el Catecismo de la Iglesia Católica fruto de la Tradición Apostólica.

Siempre nos tendrá confuso el qué dirán no solo el vulgo sino los doctores de la ley al ver un ensayo tan ajeno de invención, menguado de estilo y falto de toda erudición y doctrina como el presente ensayo al que se le puede fácilmente tildar de los peores calificativos tales como de “falso ensayo” o “falso místico” o incluso lo que es peor “ensayo herético” pues todo el mundo tiene su alma en su cuerpo y su libre albedrío y puede decir de él todo aquello que le pareciere sin temor que le calumnien ya sea tanto por el mal como del bien que pueda extraerse. Eso sí, siempre el autor tendrá presente la cita evangélica de: *“Amad a vuestros enemigos, haced bien a los que os odian, bendecid a los que os maldigan, rogad por los que os difamen.” (Lucas 6, 27-28)*; respetando cualquier opinión favorable o desfavorable. Contamos para no perder el norte la célebre frase del Aquinate: *“Toda verdad, dígala quien la diga, viene del Espíritu Santo” (Omne verum, a quocumque dicatur, a Spiritu Sancto est)*. Esta actitud supone un gran esfuerzo y un reto para la propia fe cuando nos introducimos en sistemas de creencias radicalmente diferentes, con verdades parciales o algunos elementos erróneos dentro de un sistema verdadero.

*-86. El Magisterio no está por encima de la palabra de Dios, sino a su servicio, para enseñar puramente lo transmitido, pues por mandato divino y con la asistencia del Espíritu Santo, lo escucha devotamente, lo custodia celosamente, lo explica fielmente; y de este único depósito de la fe saca todo lo que propone como revelado por Dios para ser creído” (DV 10). (-Catecismo de la Iglesia Católica-)*

*-(Dice Jesús): “¿Por qué queréis negar, por qué queréis decirle a Dios: “No es lícito que hagas esto?” La apostolicidad de la Iglesia no terminó con los Apóstoles. Prosigue con los apóstoles menores. Lo es cada santo, lo es cada “voz”. Y Yo, que soy el Jefe de la Iglesia apostólica, puedo elegir y difundir por doquier a estos pequeños apóstoles míos para vuestro bien.” (Los Cuadernos 1944, Maria Valtorta. Italy, Centro Editoriale Valtortiano, 2000, pág. 460.)*

- (6) No obstante todo esto y aunque Dios recibe la gloria en su Iglesia: “...*a él la gloria en la Iglesia y en Cristo Jesús por todas las generaciones y todos los tiempos. Amén*” (*Efesios 3,20*) la condenación y la salvación es algo reservado exclusivamente a Dios: “*Y castigo o premio se dará con justa medida tanto al judío como al griego, es decir, tanto al que cree en el verdadero Dios como al que es cristiano pero está desgajado del tronco de la eterna Vid, como al hereje, como al que siga otras religiones reveladas o la suya propia si se trata de persona que ignora toda religión.*” (*Valtorta, Maria. Lecciones sobre la Epístola de San Pablo. Traductor: Santiago Simón Orta. Italia, Libro electrónico.*)

Y continúa más adelante: “*Porque si uno, aunque sea de la iglesia cismática o separada tal vez, cree firmemente hallarse en la verdadera fe, su fe le justifica, y si obra el bien para conseguir a Dios, Bien supremo, recibirá un día el premio de su fe y de la rectitud de sus obras con mayor benignidad divina que la concedida a los católicos. Porque Dios ponderará cuánto mayor esfuerzo, habrán tenido que realizar para ser justos los separados del Cuerpo místico, los mahometanos, brahmánicos, budistas, paganos, esos en los que no se hallan la Gracia ni la Vida y con ellas mis dones y las virtudes que de dichos dones se derivan. Para Dios no hay acepción de personas Él juzgará por los actos realizados, no por el origen humano de los hombres. Y habrá muchos que creyéndose elegidos por ser católicos, se verán precedidos por otros muchos que, al practicar la justicia, sirvieron al Dios verdadero en el suyo desconocido.*” (*Valtorta, Maria. Lecciones sobre la Epístola de San Pablo. Italia, Libro electrónico.*)

-“... en cambio, gloria, honor y paz a todo el que obre el bien; al judío primeramente y también al griego; que **no hay acepción de personas en Dios**. Pues cuantos sin ley pecaron, sin ley también perecerán; y cuantos pecaron bajo la ley, por la ley serán juzgados; que no son justos delante de Dios los que oyen la ley, sino los que **la cumplen**: éstos serán justificados. En efecto, cuando los gentiles, que no tienen ley, **cumplen naturalmente las prescripciones de la ley**, sin tener ley, para sí mismos son ley; como quienes muestran tener la realidad de esa ley escrita en su corazón, **atestiguándolo su conciencia**, y los juicios contrapuestos de condenación o alabanza... en el día en que Dios juzgará las acciones secretas de los hombres, según mi Evangelio, por Cristo Jesús” (**Romanos 2, 10-16**).

## I. LA BÚSQUEDA DE LA VERDADERA IDENTIDAD EN LA FE CRISTIANA (NACER DE NUEVO).

- (7) “Acercóse uno de los escribas que les había oído y, viendo que les había respondido muy bien, le preguntó: «¿Cuál es el primero de todos los mandamientos?» Jesús le contestó: «El primero es: Escucha, Israel: El Señor, nuestro Dios, es el único Señor, y amarás al Señor, tu Dios, con todo tu corazón, con toda tu alma, y con toda tu mente y con todas tus fuerzas. El segundo es: Amarás a tu prójimo como a ti mismo. No existe otro mandamiento mayor que éstos.» (**Marcos 12, 28-31**) **LA SANTA BIBLIA (VERSIÓN BIBLIA DE JERUSALÉN, 1976)**

- (8) Un ejemplo de la Misericordia y la Justicia lo encontramos en el siguiente relato del arrepentimiento de una persona al que Jesús perdona: *Jesús le mira fijamente un instante, luego continúa unos diez pasos y se detiene:*

-¿Qué has hecho, hijo?

*El hombre cae de rodillas. Es un hombre que tiene unos cincuenta años; un rostro quemado por muchas pasiones y devastado por un tormento secreto.*

*Tiende los brazos y grita: -Para gozarme con las mujeres dilapidé toda la herencia paterna, he matado a mi madre y a mi hermano... Desde entonces no he*

*vuelto a tener paz... Mi alimento... ¡sangre! Mi sueño... ¡pesadilla!... Mi placer... ¡Ah! en el seno de las mujeres, en su grito de lujuria, sentía el hielo de mi madre muerta y el jadeo agonizante de mi hermano envenenado. ¡Malditas las mujeres de placer, áspides, medusas, murenas insaciables, perdición, perdición, mi perdición!*

*-No maldigas. Yo no te maldigo...*

*-¿No me maldices?*

*-No. ¡Lloro y cargo sobre mí tu pecado!... ¡Cuánto pesa! Me quiebra los miembros, pero aun así lo abrazo estrechamente para anularlo por ti... y a ti te concedo el perdón. Sí. Yo te perdono tu gran pecado. Extiende Jesús las manos sobre la cabeza del hombre, que está sollozando, y ora: -Padre, mi Sangre será derramada también por él. Por ahora, llanto y oración. **Padre, perdona, porque está arrepentido.** ¡Tu Hijo, a cuyo juicio todo ha sido remitido, así lo quiere!...*

*Permanece así durante unos minutos, luego se agacha para levantar al hombre y le dice: -La culpa queda perdonada. Está en ti ahora el expiar, con una vida de penitencia, cuanto queda de tu delito».*

*-¿Dios me ha perdonado? ¿Y mi madre? ¿Y mi hermano?*

*-Lo que Dios perdona queda perdonado por todos, quienesquiera que sean. Ve y no vuelvas a pecar nunca.*

*(El Evangelio como me ha sido revelado. Maria Valtorta. Primer año de la vida pública de Jesús. Italy, Centro Editoriale Valtortiano. 119 Los discursos en Agua Especiosa: Yo soy el Señor tu Dios. Jesús bautiza como Juan.)*

- (9) Supone desconocimiento de la Misericordia divina porque si leemos el Evangelio hallamos en la *Epístola a los Romanos*:

*“Abraham creyó a Dios, y por eso Dios lo aceptó como justo.” Ahora bien, si alguno trabaja, el pago no se le da como un regalo sino como algo merecido. En cambio si alguno cree en Dios, que libra de culpa al pecador, Dios lo acepta como justo por su fe, aunque no haya hecho nada que merezca su favor.” (Epístola a los Romanos 4: 4-5)*

Es significativa la expresión “*aunque no haya hecho nada*” lo que parecería confirmar que la salvación es por medio esencialmente de la fe, ya que: “... *todos han pecado, y están lejos de la presencia salvadora de Dios. Pero Dios, en su bondad y gratuitamente, los ha librado de culpa, mediante la liberación que se alcanza por Cristo Jesús.*” (**Romanos 3: 23-24**)

Pudiera pensarse según esto que basta creer en Cristo para ser justificado gratuitamente por su gracia redentora. Pero este mero conocimiento doctrinal también podría ser causa de condenación porque tal entendimiento puede ser motivo de soberbia en vez de humildad. Ya nos dice Santiago que “*¿Tú crees que hay un solo Dios? Haces bien. También los demonios lo creen y tiemblan.*” (**Santiago 2:19**). Ese conocimiento no asegura la posesión del triunfo pues el Cielo es para todos una conquista, segura para los que perseveran con buena voluntad hasta el final de la existencia.

- (10) Cuando Jesús dice que la mano del que le traicionará está con él, todos los discípulos se miraron aterrorizados preguntándose quién será. Ni su amor, ni su Cuerpo ni su Sangre lo convierten y le hacen arrepentirse. Cuando Judas le hace la pregunta Jesús apela a su conciencia: “*¿Soy yo, acaso, ése? Parece el más seguro de su honestidad, y parece que si hace esta pregunta es sólo porque no se interrumpa la conversación.*

*Jesús repite su gesto y dice: -Tú lo dices, Judas de Simón. No Yo. Tú lo dices. Yo no te he nombrado. ¿Por qué te acusas? Pregúntale a tu voz interior, a tu conciencia de hombre, a esa conciencia que Dios Padre te ha dado para que vivas como hombre, y mira a ver si te acusa. Tú, antes que ningún otro, lo sabrás. Pero, si ella te tranquiliza, ¿por qué dices palabras que son malditas con sólo decirlas, y piensas en un hecho igualmente maldito con sólo pensarlo, aunque sea por juego?”* (**El Evangelio como me ha sido revelado. Maria Valtorta. Opc. Cit. Tomo 9, pág. 414**)

Hay que tener en cuenta que puede hablarse de una crisis de identidad cris-

tiana cuando “conscientemente” se hace lo contrario de lo que se cree: “1859. *El pecado mortal requiere plena conciencia y entero consentimiento. Presupone el conocimiento del carácter pecaminoso del acto, de su oposición a la Ley de Dios. Implica también un consentimiento suficientemente deliberado para ser una elección personal. La ignorancia afectada y el endurecimiento del corazón (Cf. Mc 3, 5 -6; Lc 16, 19-31) no disminuyen, sino aumentan, el carácter voluntario del pecado. (Catecismo de la Iglesia Católica)*

Por eso se ha dicho que: “*Y en verdad os digo que no es lo que aparece lo que es verdadero. Muchos católicos están desprovistos de Dios más de cuanto lo esté un salvaje. Porque muchos católicos tienen de hijos de Dios sólo el nombre, peor: escarnecen y hacen escarnecer este nombre con las obras de una vida hipócrita, cuyas manifestaciones son la antítesis de los dictámenes de mi Ley, cuando no llegan a la abierta rebelión que les hace enemigos de Dios. Mientras que en la fe de un católico, equivocada en la esencia pero corroborada por una vida recta, está más el signo del Padre. Éstas son sólo criaturas que tienen necesidad de conocer la Verdad. Los hijos falsos, en cambio, son criaturas que deben conocer, además de la Verdad, el Respeto y el Amor hacia Dios.*” (Los Cuadernos 1943. *Maria Valtorta. Op. cit. pág. 153-4.*)

Como se ha dicho y repetimos lo que justifica a la persona es el creer firmemente su convicción de estar en la verdadera fe, aunque esté por ignorancia en el error: “*Porque si uno, aunque sea de la iglesia cismática o separada tal vez, cree firmemente hallarse en la verdadera fe, su fe le justifica, y si obra el bien para conseguir a Dios, Bien supremo, recibirá un día el premio de su fe y de la rectitud de sus obras con mayor benignidad divina que la concedida a los católicos. (Valtorta, Maria. Lecciones sobre la Epístola de San Pablo. Italia, Libro electrónico.)*

(11) Hay que compaginar estas citas bíblicas paulinas de la justificación por la gracia

con las de Santiago:

*“¿De qué sirve, hermanos míos, que alguien diga: “tengo fe”, si no tiene obras? ¿Acaso podrá salvarle la fe? (Santiago 2:14) y más adelante: “Así también **la fe, si no tiene obras, está realmente muerta.**” (Santiago 2: 17)*

- *“La justificación establece la colaboración entre la gracia de Dios y la libertad del hombre. Por parte del hombre se expresa en el asentimiento de la fe a la Palabra de Dios que lo invita a la conversión, y en la cooperación de la caridad al impulso del Espíritu Santo que lo previene y lo custodia:*

*“Cuando Dios toca el corazón del hombre mediante la iluminación del Espíritu Santo, el hombre no está sin hacer nada al recibir esta inspiración, que por otra parte puede rechazar; y, sin embargo, sin la gracia de Dios, tampoco puede dirigirse, por su voluntad libre, hacia la justicia delante de Él”. [Cc. de Trento: DS 1525) (-1993 Catecismo de la Iglesia Católica-)*

(12) *“...El hombre tiene una ley inscrita por Dios en su corazón... La conciencia es el núcleo más secreto y el sagrario del hombre, en el que está solo con Dios, cuya voz resuena en lo más íntimo de ella” (GS 16). Catecismo 1776.*

Por medio de esta misteriosa fe como don divino para las personas de buena voluntad y sin conocer lo prescrito por la Ley pueden ser justificados por Dios porque de hecho obran mejor que aquellos que conocen los Mandamientos. De lo que se colige que la fe vale más que la Ley para salvar al hombre **“Porque Dios justifica, tanto a los incircuncisos como a los circuncisos por medio de la fe.** Y muchas veces, verdaderamente, los incircuncisos, mediante la fe misteriosa que les anima (un don divino para éstos de buena voluntad), sin que conozcan las obras prescritas por la Ley obran mejor que aquellos que las conocen, haciendo así patente que la fe vale más que la Ley para salvar al hombre, porque donde hay fe en un Dios desconocido que ama y premia por el bien realizado en su honor, allí hay esperanza y allí está la caridad. Y donde hay caridad hay salvación. Porque ciertamente, al final de los tiempos, aquellos que no fueron bautizados con el agua

*lo serán con el Fuego, es decir, con la Caridad dado como premio a su caridad” (Valtorta, Maria. Lecciones sobre la Epístola de San Pablo a los Romanos. Italia, Libro electrónico).*

*“Dice Jesús: Cuando un hombre, incluso alejado del conocimiento del verdadero Dios, conoce, **por elevación del alma recta, que debe existir un Dios y eleva en su corazón un altar al Dios desconocido del que habla Pablo, este hombre está mucho más cerca de Dios quienes, tras haber sido instruidos sobre la existencia de Dios, han querido aplicar teorías humanas a las maravillosas obras de Dios.***

*Aún son más idólatras y más malditos quienes adoran el propio pensamiento o el de otros hombrecillos como ellos, que quienes adoran un astro o un animal.” (Los Cuadernos 1943. Maria Valtorta. Italy, Centro Editoriale Valtortiano, 2000, pág. 439.)*

Al hablar de la “*iluminación de la conciencia*” se hace necesario referirse al grandioso acto de Misericordia Divina con esta generación mediante el cual probará lo que se denomina **EL AVISO**, durante el cual ningún alma se escapará a la experiencia del autoexamen.

Hay una larga tradición de santos y místicos católicos que profetizan de esa iluminación de conciencia a nivel mundial. Esta experiencia se refiere al hecho de ver nuestras almas tal y como las ve Dios y es muy similar a muchas experiencias cercanas a la muerte en al que uno puede ver su vida como si se tratase de una biografía real documentada cinematográficamente. Se trata de sensibilizarse de la necesidad de cambio en nuestras vidas. Tendrá un efecto personal y la reacción será diferente: unos cambiarán y otros no, incluso se radicalizarán en el rechazo.

- (13) *-De Profesores de Salamanca. Biblia comentada. II. Evangelios por Manuel de Tuya. Visita y conversación con Nicodemo. 3,1-21. Capítulo 3. Madrid, B.A.C., pág. 1207.*

Al recibir el bautismo recibimos el Espíritu Santo y somos su templo: “*¿No sabéis que sois santuario de Dios y que el Espíritu de Dios habita en vosotros? Si alguno destruye el santuario de Dios, Dios le destruirá a él; porque el santuario de Dios es sagrado, y vosotros sois ese santuario.*” (1 Corintios 3, 16-17)

Además hay una seria advertencia para los que rechazan el bautismo: “*Y todo el pueblo y los publicanos, cuando lo oyeron, justificaron a Dio, bautizándose con el bautismo de Juan. Mas los fariseos y los intérpretes de la ley desecharon los designios de Dios respecto de sí mismos, no siendo bautizados por Juan.*” (S. Lucas 7, 29-30) **Biblia Reina Valera.** La Biblia no dice que primero haya que enseñar la doctrina de Jesús para poder bautizar excluyendo así a los niños sino que primero dice que hay que bautizar y después enseñar: “*Por tanto, id, y haced discípulos a todas las naciones, bautizándolos en el nombre del Padre, y del Hijo, y del Espíritu Santo; enseñándoles que guarden todas las cosas que os he mandado; y he aquí que yo estoy con vosotros todos los días hasta el fin del mundo. Amén.*” (Mateo 28, 19-20) **Biblia Reina Valera.**

(14) *Dicele Nicodemo: «¿Cómo puede uno nacer siendo ya viejo? ¿Puede acaso entrar otra vez en el seno de su madre y nacer?»*

**Respondió Jesús:** *«En verdad, en verdad te digo: el que no nazca de agua y de Espíritu no puede entrar en el Reino de Dios. Lo nacido de la carne, es carne; lo nacido del Espíritu, es espíritu. No te asombres de que te haya dicho: Tenéis que nacer de lo alto. El viento sopla donde quiere, y oyes su voz, pero no sabes de dónde viene ni a dónde va. Así es todo el que nace del Espíritu.»* (Juan 3, 5-8) **(Negritas del autor)**

Bautizarse por inmersión como se hacía en la iglesia primitiva también simboliza el hecho de que nuestro yo se sumerge en Cristo para renacer con él a nueva vida: “*Al ser bautizados, ustedes fueron sepultados con Cristo, y fueron resucitados con él, porque creyeron en el poder de Dio, que lo resucitó.*” (Colosenses 2, 12)

*“Mi doctrina es todavía más severa que la de Juan, porque prohíbe incluso el resentimiento. No se dirige tanto hacia lo externo cuanto hacia el espíritu. **Tendréis que renacer, si queréis ser míos. ¿Queréis hacerlo?**”*

*(El Evangelio como me ha sido revelado. Maria Valtorta. Primer año de la vida pública de Jesús, pág. 259).*

(15) Es destacado el texto paulino que nos habla de la identidad “de ser en Cristo”: “...y no vivo yo, sino que es Cristo quien vive en mí; la vida que vivo al presente en la carne, la vivo en la fe del Hijo de Dios que me amó y se entregó a sí mismo por mí”. (*Gálatas 2, 20*)

(16) La creación a imagen y semejanza de Dios da al ser humano un valor sagrado. La dignidad de la persona humana participa de la luz del Espíritu divino con una vocación de carácter comunitario pues una sociedad es un conjunto de personas.

*“1879 La persona humana necesita la vida social. Esta no constituye para ella algo sobreañadido sino una exigencia de su naturaleza. Por el intercambio con otros, la reciprocidad de servicios y el diálogo con sus hermanos, el hombre desarrolla sus capacidades; así responde a su vocación (Cf. GS 25, 1). (Catecismo de la Iglesia Católica)*

(17) En el Eclesiastés se dice expresamente que “...y el polvo vuelva a la tierra que fue, y **el espíritu vuelva al Dios que lo dio. Vanidad de vanidades, dice Cohélet, vanidad de vanidades, todo es vanidad.**” (*Eclesiastés 12, 7*)

En Hebreos se habla de las almas de los justos que han llegado a la perfección en la Jerusalén del cielo: “Vosotros, en cambio, os habéis acercado al monte Sión, ciudad del Dios vivo, Jerusalén del cielo, a las miríadas de ángeles, a la asamblea festiva de los primogénitos inscritos en el cielo, a Dios, juez de todos; a **las almas** de los justos que han llegado a la perfección, y al Mediador de la nueva alianza, Jesús, y a la aspersion purificadora de una sangre que habla mejor que la de Abel.” (*Hebreos 12, 22*)

En el libro del Apocalipsis se describen las almas que gritan justicia: “*Cuando abrió el quinto sello, vi debajo del altar las almas de los degollados por causa de la Palabra de Dios y del testimonio que mantenían. Y gritaban con voz potente: «¿Hasta cuándo, Dueño santo y veraz, vas a estar sin hacer justicia y sin vengar nuestra sangre de los habitantes de la tierra?».* (Apocalipsis 6, 9)

Algunos interpretan erróneamente la siguiente cita del Eclesiastés “*Porque los vivos saben que han de morir, pero los muertos no saben nada, y no hay ya paga para ellos, pues se perdió su memoria.*”(Eclesiastés 9,5) para afirmar que una vez muertos no queda nada ni de lo material corporal ni de lo espiritual. El contexto en cambio se refiere sólo a lo material, a lo terrenal: “*Como el que haya un destino común para todos, para el justo y para el malvado, el puro y el manchado, el que hace sacrificios y el que no los hace, así el bueno como el pecador, el que jura como el que se recata de jurar. Eso es lo peor de todo cuanto pasa bajo el sol: que haya un destino común para todos, y así el corazón de los humanos está lleno de maldad y hay locura en sus corazones mientras viven, y su final ¡con los muertos! Pues mientras uno sigue unido a todos los vivientes hay algo seguro, pues vale más perro vivo que león muerto.*” (Eclesiastés 9,2-4)

Aunque el cuerpo muera el alma no, esto es reafirmado por Jesús a Marta cuando Lázaro murió. Dijo Marta a Jesús: “*Señor, si hubieras estado aquí, no habría muerto mi hermano. Pero aun ahora yo sé que cuanto pidas a Dios, Dios te lo concederá.*» Le dice Jesús: “*Tu hermano resucitará.*» Le respondió Marta: “*Ya sé que resucitará en la resurrección, el último día.*» **Jesús le respondió: «Yo soy la resurrección El que cree en mí, aunque muera, vivirá; y todo el que vive y cree en mí, no morirá jamás. ¿Crees esto?»** Le dice ella: “*Sí, Señor, yo creo que tú eres el Cristo, el Hijo de Dios, el que iba a venir al mundo.*» (Juan 11, 21-27) (Negritas del autor)

-«¿Qué es **el alma**?» -«Es aquello que hace del hombre un dios y no un animal. El vicio y el pecado la matan y, una vez muerta, el hombre se vuelve animal repelen-

*te».* (*El Evangelio como me ha sido revelado. María Valtorta. Opc. Cit. Tomo I, pág. 423*)

-¿No dije Yo: "Quien me ama observará mi palabra y el Padre mío le amará e iremos a él y haremos morada en él"? **El alma** que está en gracia posee el amor y, poseyéndolo, posee a Dios, o sea, al Padre que la conserva, al Hijo que la instruye, al Espíritu que la ilumina. Posee, por tanto, el Conocimiento, la Ciencia, la Sabiduría. Posee la Luz. Imaginaos, pues, qué conversaciones más sublimes podría establecer con vosotros vuestra alma, que son las conversaciones que han llenado los silencios de las cárceles, los silencios de las celdas, los silencios del yermo, los silencios de las habitaciones de los enfermos santos; las que han confortado a los presos que en la cárcel esperaban el martirio, a los cenobitas, que habían elegido el claustro en pos de la Verdad, a los eremitas, que anhelaban conocer anticipadamente a Dios, a los enfermos, para que soportaran o, mejor dicho, amaran su cruz. (*El Evangelio como me ha sido revelado. María Valtorta. Opc. Cit. Tomo I, pág. 83*)

-“365 La unidad del alma y del cuerpo es tan profunda que se debe considerar al alma como la "forma" del cuerpo (Cf. Cc. de Vienne, año 1312, DS 902); es decir, gracias al alma espiritual, la materia que integra el cuerpo es un cuerpo humano y viviente; en el hombre, el espíritu y la materia no son dos naturalezas unidas, sino que su unión constituye una única naturaleza.” (*Catecismo de la Iglesia Católica*)

- (18) Por nosotros mismos y con nuestras propias fuerzas solamente nada podemos conseguir ya que: *¿Quién se da cuenta de sus propios errores? ¡Perdona Señor mis faltas ocultas! Quítale el orgullo a tu siervo; no permitas que el orgullo me domine. Así seré un hombre sin tacha; estaré libre de gran pecado!* (*Salmos 19-18, 12:13*)

Que la semilla de nuestra voluntad está deteriorada es ejemplificada en la negación de Pedro ante su Maestro al que había asegurado antes que daría su vida por Él: *“Le responde Jesús: ¿Que darás tu vida por mí? En verdad, en verdad te digo: no cantará el gallo antes de que tú me hayas negado tres veces”.* (**Juan 13: 38**)

*-“Porque a nosotros nos lo reveló Dios por medio del Espíritu; y el Espíritu todo lo sondea, hasta las profundidades de Dios. En efecto, ¿qué hombre conoce lo íntimo del hombre sino **el espíritu del hombre** que está en él? Del mismo modo, nadie conoce lo íntimo de Dios, sino el Espíritu de Dios. Y nosotros no hemos recibido el espíritu del mundo, sino el Espíritu que viene de Dios, para conocer las gracias que Dios nos ha otorgado, de las cuales también hablamos, no con palabras aprendidas de sabiduría humana, sino aprendidas del Espíritu, expresando realidades espirituales. El hombre naturalmente no capta las cosas del **Espíritu de Dios**; son necedad para él. Y no las puede conocer pues sólo espiritualmente pueden ser juzgadas. En cambio, **el hombre de espíritu** lo juzga todo; y a él nadie puede juzgarle. Porque ¿quién conoció la mente del Señor para instruirle? Pero **nosotros tenemos la mente de Cristo.**”* (**1 Corintios 2, 10-16**)

(19) Tomás no cree que Jesús haya resucitado en carne y hueso, debe ver para creer, quiere la evidencia porque lo que su razón no puede aceptar lo rechaza. Cree que lo que los apóstoles han visto es un fantasma. También como Pedro llorará de arrepentimiento exclamando: *“Señor mío y Dios mío”*. Jesús perdonándolo le respondió:

*-¡Tomás, Tomás! Ahora crees porque has visto... ¡Bienaventurados los que crean en mí sin haber visto! Si os he de premiar a vosotros y vuestra fe ha recibido la ayuda de la fuerza de la visión, ¿qué premio habré de darles a ellos?...* (**El Evangelio como me ha sido revelado. Op. cit. Tomo 10. Pág. 229.**)

- *“Hija mía, quien verdaderamente hace mi Voluntad puede decir que todo lo que*

*se desarrolla en ella, tanto en el alma como en el cuerpo, lo que siente, lo que sufre, puede decir: 'Jesús sufre, Jesús está oprimido.' Porque todo lo que las criaturas me hacen me llega hasta en el alma en la cual habito, porque hace mi Voluntad, así que si las frialdades de las criaturas me llegan, mi Voluntad las siente, y siendo mi Voluntad vida de esa alma, por consecuencia sucede que también el alma las siente, así que en vez de afligirse por estas frialdades como tuyas, debe estar en torno a Mí para consolarme y repararme por las frialdades que mandan las criaturas; así si siente distracciones, opresiones y otras cosas, debe estar en torno a Mí para aliviarme y repararme, no como cosas tuyas sino como mías, por eso el alma que vive de mi Voluntad sentirá muy diversas penas, según las ofensas que me hacen las criaturas, pero las sentirá repentinamente y casi de sobresalto, como también sentirá gozos y contentos indescriptibles, y si en las penas debe ocuparse en consolarme y en repararme, en las alegrías y en los contentos debe ocuparse en gozárse los, y entonces mi Voluntad encuentra su compensación, de otra manera quedaría contristada y sin poder desarrollar lo que contiene mi Querer.” (Luisa Piccarreta. Volumen 11, pág. 793.)*

- (20) Las lágrimas sinceras vertidas en la tierra son altamente valoradas en el reino celestial:

*”Estoy extenuado de gemir, baño mi lecho cada noche, inundo de lágrimas mi cama; mi ojo está corroído por el tedio, ha envejecido entre opresores. Apartaos de mí todos los malvados, pues Yahveh ha oído la voz de mis sollozos. Yahveh ha oído mi súplica, Yahveh acoge mi oración.” (Salmos 6:6-9)*

*- “Los que siembran con lágrimas cosechan entre cánticos. Al ir, va llorando, llevando la semilla; al volver, vuelve cantando trayendo sus gavillas.” (Salmos 126:5-6)*

*- “El ángel tenía una pequeña copa en las manos. La copa dorada estaba llena (véase Apocalipsis 5:8) de un líquido. El hombre de la habitación me dijo: El me acaba*

*de traer una copa de lágrimas de la tierra. Deseo que veas lo que hacemos acá con ellas.*

*El ángel le entregó la copa, junto con un pedazo de papel. La nota tenía el nombre de la persona cuyas lágrimas estaban en la copa. El hombre de la habitación leyó la nota y entonces se dirigió a uno de los lugares en que se guardaban las vasijas. Leyó la placa debajo de la vasija y yo sabía que coincidía con la persona de la tierra cuyo nombre venía en la nota. El hombre tomó la vasija, que estaba casi llena y la acercó a la copa. Vertió entonces las lágrimas de la copa dorada en la vasija.*

*“Quiero mostrarte lo que hacemos aquí”, me dijo el hombre, “Cuéntaselo a la gente de la tierra”. Entonces llevó la vasija hacia la mesa, tomó uno de los libros. Las páginas del libro estaban totalmente en blanco. El guardián de la habitación me dijo: “Éstas son las lágrimas de los santos de Dios en la tierra según claman a Dios. Mira lo que sucede.”*

*Entonces el hombre vertió una gota de la vasija, una lagrimita, en la primera página del libro. Al hacerlo, comenzaron a aparecer palabras inmediatamente. Bellas palabras, elegantemente escritas, comenzaron a aparecer en la página. Cada vez que una lágrima caía en una página aparecía una página entera de escritura. Continuó haciéndolo página tras página, vez tras vez.*

*Al cerrar el libro y hablar, parecía estar diciéndole a toda la humanidad lo mismo que a mí: “Las oraciones más perfectas son aquellas que están bañadas con lágrimas que salen del corazón y el alma de los hombres y las mujeres de la tierra.” (Mary Katherine Baxter. **Una revelación Divina del Cielo. Libro electrónico. Lágrimas en el cielo.**)*

- (21) *“Esta aniquilación del yo viejo para transformarse en el nuevo para quedar en la nada: “Y cuando viniere a quedar resuelto en nada, que será la suma humildad, quedará hecha la unión espiritual entre el alma y Dios, que es el mayor y más alto estado a que en esta vida se puede llegar.” (San Juan de la Cruz. **Obra completa. (I) Madrid, Alianza editorial, 1991, pág. 190**)*

San Bernardo se refiere también al injerto para una nueva vida cuando se refiere a las palabras del Apóstol San Pablo a los Romanos (6, 4 y ss.): *“Hemos sido sepultados con Él por el bautismo para morir por Él, a fin de que, así como Jesucristo ha resucitado por la gloria del Padre, así también nosotros caminemos en una nueva vida. Pues, si hemos sido injertados en Él por la semejanza de su muerte, lo seremos también por la semejanza de su resurrección.”* (**Obras completas de San Bernardo. Madrid, B.A.C., pág. 877-78**)

(22) Jesús le dice a Juan sobre la necesidad de los dos injertos:

*“Serénate, amigo. No me interrumpas. Sé tú el primero en escuchar estas verdades. Lo mereces. La Sangre: la mía. Ya sabes que para esto he venido. Soy el Redentor... Piensa en los Profetas. No omitieron ni una iota describiendo mi misión. Seré el Hombre descrito por Isaías. Y, cuando me desangren, mi Sangre os fecundará a vosotros. Pero no me limitaré a esto. Sois tan imperfectos, débiles, obtusos y miedosos, que Yo, glorioso al lado del Padre, os enviaré el Fuego, la Fuerza que procede de mi ser por generación del Padre y que vincula al Padre y al Hijo en una arra indisoluble, haciendo de Uno, Tres: el Pensamiento, la Sangre, el Amor. Cuando el Espíritu de Dios, o mejor, el Espíritu del Espíritu de Dios, la Perfección de las Perfecciones divinas, descienda sobre vosotros, vosotros dejaréis de ser lo que ahora sois. Seréis nuevos, potentes, santos... Pero para uno nula será la Sangre y nulo el Fuego. Porque la Sangre, para él, significará poder de condenación, y para toda la eternidad conocerá otro fuego, en el cual arderá, arrojando y tragando sangre, porque verá sangre en todos los lugares donde ponga sus ojos mortales o sus ojos espirituales, desde cuando haya traicionado la Sangre de un Dios.”*(**El Evangelio como me ha sido revelado. Op. cit. Tomo 5. Pág. 459.**)

(23) Numerosos pasajes bíblicos hacen mención del don de la Gracia de los cuales entresacamos:

-“Pero yo no considero mi vida digna de estima, con tal que termine mi carrera y

*cumpla el ministerio que he recibido del Señor Jesús, de dar testimonio del Evangelio de la gracia de Dios.” (Hechos 20:24)*

*“En efecto, si por el delito de uno solo reinó la muerte por un solo hombre ¡con cuánta más razón los que reciben en abundancia la gracia y el don de la justicia, reinarán en la vida por un solo, por Jesucristo!” (Romanos 5:17)*

*“La ley, en verdad, intervino para que abundara el delito; pero donde abundó el pecado, sobreabundó la gracia; así, la mismo que el pecado reinó en la muerte, así también reinaría la gracia en virtud de la justicia para vida eterna por Jesucristo nuestro Señor” (Romanos 5:20, 21)*

En la lección sobre la Iglesia y los Sacramentos Jesús responde al significado de los **“sacramentos”** como formas de administrar la Gracia: Los sacramentos son **“-Medios sobrenaturales y espirituales aplicados no sin medios materiales, usados para persuadir a los hombres de que el sacerdote hace realmente algo. Como puedes observar, el hombre, si no ve, no cree; siempre necesita algo que le diga que hay algo. Por este motivo, cuando realizo milagros impongo las manos o mojo con saliva u ofrezco un bocado de pan untado en algo. Podría hacer milagros sólo con mi pensamiento. Pero ¿crees que, en ese caso, la gente diría: “Dios ha hecho un milagro”? Dirían: “Se ha curado porque era la hora de curarse”. Y atribuirían el mérito al médico, a las medicinas, a la resistencia física del enfermo. Lo mismo será para los sacramentos: formas del culto para **administrar la Gracia**, o devolverla, o fortalecerla en los fieles. Juan, por ejemplo, usaba la inmersión en agua para dar una figura de la purificación de los pecados. En realidad, **la mortificación de confesar la propia impureza por los pecados cometidos era más útil que el agua que lavaba los miembros**. Yo también tendré el bautismo, mi bautismo, que no será simplemente una figura, sino realmente eliminación en el alma de la mancha original y restitución al alma del estado espiritual (aumentado por conferirle los méritos del Hombre-Dios) que poseían Adán y Eva antes de su pecado.”** (El Evangelio como me ha sido revelado. Op. cit. Tomo 4. Pág. 195.)

- (24) Recordando sus palabras: «*Si alguno quiere venir en pos de mí, niéguese a sí mismo, tome su cruz cada día, y sígame*». » (**Lucas 9:23**)

La Escritura dice: “**Dios no tiene favoritos, sino que cualquiera que de cualquier nacionalidad que tema a Dios y haga lo que es justo es aceptable para Él**”. (**Hechos 10, 34-35**)

Las personas que no tienen los auxilios de la gracia de los sacramentos hacen un esfuerzo mayor por su salvación por lo que en el comentario a la misma Epístola a los Romanos pudimos leer: “*Para Dios no hay acepción de persona. Él juzgará por los actos realizados, no por el origen humano de los hombres. Y habrá muchos que, creyéndose elegidos por ser católicos, se verán precedidos por otros muchos que, al practicar la justicia, sirvieron al Dios verdadero en el suyo desconocido.*” (**Valtorta, María. Lecciones sobre la Epístola de San Pablo. Italia, Libro electrónico.**) Véase cita 6.

No hay otro camino para conquistar a Dios y su Reino que practicando las bienaventuranzas sea uno del credo que sea: “*¡Bienaventurado seré si soy pobre de espíritu, porque será mío el Reino de los Cielos! ¡Bienaventurado seré si soy manso, porque heredaré la Tierra! ¡Bienaventurado seré si soy capaz de llorar sin rebelarme, porque seré consolado! ¡Bienaventurado seré si tengo hambre y sed de justicia, más que de pan y vino para saciar la carne: la Justicia me saciará! ¡Bienaventurado seré si soy misericordioso, porque se usará conmigo divina misericordia! ¡Bienaventurado seré si soy puro de corazón, porque Dios se inclinará hacia mi corazón puro, y lo verá! ¡Bienaventurado seré si tengo espíritu de paz, porque Dios me llamará hijo suyo, pues en la paz está el amor y Dios es Amor amante de quien se asemeja a Él! ¡Bienaventurado seré si soy perseguido por amor a la justicia, porque Dios, Padre mío, como compensación por las persecuciones terrenas, me dará el Reino de los Cielos! ¡Bienaventurado seré si, por saber ser hijo tuyo, oh Dios, me ultrajan y acusan con mentira! Ello no deberá hacerme sentir desolado, sino alegre, porque me pone al nivel de tus mejores siervos, al nivel de los Pro-*

*fetas, perseguidos por el mismo motivo; con ellos compartiré - lo creo firmemente - la misma recompensa, grande, eterna en ese Cielo que ya es mío!" (Maria Vallorta. El Evangelio como me ha sido revelado. Op. cit. Tomo 3. Pág. 70.)*

(25) Según le dice Francisco al hermano León:

*"Y ahora escucha la conclusión, hermano León: por encima de todas las gracias y de todos los dones del Espíritu Santo que Cristo concede a sus amigos, está el de vencerse a sí mismo y de sobrellevar gustosamente, por amor de Cristo Jesús, penas, injurias, oprobios e incomodidades. Porque en todos los demás dones de Dios no podemos gloriarnos, ya que no son nuestros, sino de Dios; por eso dice el Apóstol: ¿Qué tienes que no hayas recibido de Dios? Y si lo has recibido de Él, ¿por qué te glorias como si lo tuvieras de ti mismo? (1 Cor 4,7). Pero en la cruz de la tribulación y de la aflicción podemos gloriarnos, ya que esto es nuestro; por lo cual dice el Apóstol: No me quiero gloriarse sino en la cruz de Cristo (Gál 6,14) (-Florecillas de San Francisco- Capítulo VIII. Cómo San Francisco enseñó al hermano León en qué consiste la alegría perfecta. Libro electrónico).*

(26) Dice Jesús: *«Quien cierra el corazón a la misericordia cierra el corazón a Dios. Porque Dios está en vuestros hermanos y quien no es misericordioso hacia los hermanos no es misericordioso hacia Dios. No se puede separar a Dios de sus hijos, y pensad bien que vosotros que vivís sois todos hijos del Eterno que os ha creado. También aquellos que en apariencia no lo son, porque viven fuera de mi Iglesia, lo son. No creáis que os es lícito ser duros, egoístas, porque uno no es de los vuestros. El origen es uno: el Padre. Sois hermanos aunque no viváis bajo el mismo techo paterno. ¿Y cómo no pensáis en actuar para atraer a los alejados, a los perdidos, a los infelices, que por diversos motivos están fuera de mi morada? Dios no es exclusivo de los católicos, y mucho yerran aquellos católicos que no se afanan por los no católicos. No trabajan por el interés del Padre, son sólo parásitos que viven del Padre sin darle ayuda filial. Dios no tiene necesidad de ayuda porque es poten-*

*tísimo. Pero de todos modos la quiere de vosotros. Dios circula como sangre vital en las venas de todo el cuerpo del Universo. De este gran cuerpo creado por Él, la **Catolicidad es el centro.** ¿Pero cómo podrían los miembros más lejanos ser vivificados por Dios si el centro se encerrase en sí mismo con su Tesoro y excluyese a los miembros del beneficio? Dios está también donde distinta fe o distinto espíritu hace pensar que no esté. Y en verdad os digo que no es lo que aparece lo que es verdadero. Muchos católicos están desprovistos de Dios más de cuanto lo esté un salvaje. Porque muchos católicos tienen de hijos de Dios sólo el nombre, peor: escarnecen y hacen escarnecer este nombre con las obras de una vida hipócrita, cuyas manifestaciones son la antítesis de los dictámenes de mi Ley, cuando no llegan a la abierta rebelión que les hace enemigos de Dios. **Mientras que en la fe de un no católico, equivocada en la esencia pero corroborada por una vida recta, está más el signo del Padre.** Éstas son sólo criaturas que tienen necesidad de conocer la Verdad. Los hijos falsos, en cambio, son criaturas que deben conocer, además de la Verdad, el Respeto y el Amor hacia Dios. Las almas que quieren ser más deben tener misericordia de estas otras pobres almas. Pero las almas víctima deben inmolarse, también, por ellas. ¿Hice Yo de otra forma? **¿No me inmolé por todos?** Si es misericordia dar de comer, vestir, dar de beber, enterrar, instruir, consolar, ¿qué no será obtener, a precio del propio sacrificio, la Vida verdadera para los hermanos? ¡Si el mundo fuera misericordioso!... El mundo poseería a Dios, y lo que os tortura caería como hoja muerta. Pero el mundo, y en el mundo especialmente los cristianos, han sustituido el Amor por el Odio, la Verdad por la Hipocresía, la Luz por las Tinieblas, Dios por Satanás. Y Satanás, allí donde Yo sembré Misericordia y la hice crecer con mi Sangre, esparce sus abrojos y los hace prosperar con su soplo de infierno. Vendrá su hora de derrota. Pero por ahora viene él porque vosotros le ayudáis. Pero bienaventurados los que saben permanecer en la Verdad y trabajar por la Verdad. Su misericordia tendrá el premio en el Cielo». (Los Cuadernos 1943. *Maria Valtorta. Italy, Centro Editoriale Valtortiano, 2000, pág. 153-4.*)*

(27) *“¿Quién podrá describir mi batalla contra el desánimo que pretendía subyugarme para persuadirme de que había esperado en vano en el Señor? ¡Oh, creo que fue la rabia de Satanás! Sentí surgirme la duda a las espaldas, y sentí cómo alargaba ésta sus gélidas zarpas para aprisionarme el alma y detener su oración. **La duda... tan peligrosa, letal para el espíritu.** Letal, porque es el primer elemento agente de la enfermedad mortal que tiene por nombre "desesperación"; contra él se debe reaccionar con todas las fuerzas, para no perecer en el alma y perder a Dios.”!* (Maria Valtorta. *El Evangelio como me ha sido revelado. Op. cit. Tomo I. Pág. 127.*)

La intuición del Cielo por otra parte es fuente de alegría que no se explica. Nadie puede explicar por qué se alegra uno. La alegría es el movimiento que partiendo de nosotros mismos se expande en gozo. La Paz del Cielo es lo que podemos denominar la nueva vibración, una sonrisa que brota del fondo del alma. Invocamos a Dios y su Reino jubilosos no apocados. El Eclesiástico nos recomienda la alegría para la salud y felicidad: *“No te entregues a la tristeza, ni te atormentes con tus pensamientos. La alegría del corazón es la vida del hombre, la dicha alarga los años.”* (Eclesiástico 30, 21:22)

Alegría de poder experimentar una audiencia con el Señor ya que la sala del trono de Dios es el lugar más bonito del cielo: *“Había una fragancia que impregnaba todo lo que parecía ser un vínculo entre la misma presencia de Dios y todo el cielo. Era absolutamente un éxtasis de puro asombro. Me dijeron que era la fragancia de Dios. Caí ante el Señor postrado cuando oí esas palabras.”* (Richard Sigmund. *“Mi tiempo en el Cielo”. La segunda experiencia del trono. Libro electrónico, pág. 126.*)

- *El autor agradece a todos los que directa o indirectamente han contribuido a la realización de este ensayo en el que se han utilizado ideas publicadas en anteriores escritos así como videos, entre otros los de [www.ESCUELADEBIBLIA.COM](http://www.ESCUELADEBIBLIA.COM).; los del padre Ignacio Larrañaga, los de EWTN y los del CATECISMO de Mons. José Ignacio Munilla.*

*De acuerdo con el decreto del Papa Urbano VIII, el autor declara que a los hechos o revelaciones privadas narrados en este ensayo no se les da oficialmente ningún valor sobrenatural, hasta que la Superior Autoridad Eclesiástica haya emitido su juicio sometiéndose a sus decisiones oficiales Asimismo expresa su adhesión al Magisterio de la Iglesia Católica en cuanto a los posibles errores teológicos o dogmáticos.*